

の者も三人連で来て居り、談論數刻、時の移るを忘れた。

それから次には安井息軒の所へ行つた、安井は極めて眞面目な學者で、土方が

「私は學問修業の爲に江戸に参つたのですが、一體學問といふものは、如何様に研究したならば宜しいものでございませうか」

と質問を發した、すると息軒は悠揚迫らざる態度でもつて、除に口を開いて曰く、

「お前達が學問をするのは、徒に字句文章を解するのみでなく、賢人君子となる即ち孔子孟子となるの覺悟がなくてはならぬ、そこで一體文章といふものは、何れの國でも時代によつて變るものである、日本でも支那でも上古中古近世といふやうに變つて來てゐるものであるから、少くとも秦漢以前の古書を十分に讀まねば、孔孟の眞意を會得することが出來ぬ、仍て先づ古書を大に讀め」

と云ふのであつた。

息軒の主張を論難攻撃す

土方は息軒の言ふところに疑團を生じ、

「先生のやうに仰有つても、主人に仕へてゐる人もあり用事の多いものもある、然らば古書ばかり讀んでゐることの出來ぬ人が多くあり、従つて多數の人は學問の出來ぬ譯である、又

古書ばかり讀んだからとて、強ち聖賢の意を究むることは出來ますまい」

と反問したので大議論となり、土方は大膽にも息軒の主張を論難攻撃した、勿論土方自身は議論を以て息軒を凌ぐつもりで言つたのではなかつたが、息軒は大に立腹して「貴様達が彼是やがましく言つたところで、自分は最早既に自得してゐるから、貴様達の意見を採ることは出來ぬ、又貴様達も其れほど既に固まつてゐるならば、最早僧侶の宗旨論をするやうなものである、無益の論争は好まぬ、そんな言は止めろ」と散々に叱つた、土方は何も息軒をやり込めてやらうなどの考へで言つたのではないから「ポット出の田舎漢が、彼是過言をいたし、誠に恐れ入りました」と詫びて、それから時勢論に移り、對談數刻にして辭し去つた。

大橋は庵が氣に入つた

今度は又大橋訥庵の所へ行つて、學問の筋道を質すと、先生の言ふところは頗る面白い。「詩だの文章だのを研究したところで何の役にも立たぬ、文章や詩集を如何程たいて見たところで、一向自分の根本が立たない、人は自分の根本を定めねば、恰も下手な大工が、澤山の良材を集めても、腹が分つて居ないから普請が立派に出来上らぬと同一であるから、先づ第一に經書を読んで心膽を練り固め、自分の根本を定めなければならぬ、其上で詩も作れば文章も綴り得られる」と云ふのである、それから先生の時勢論が非常に面白く、滿腹幕府に不平で、當時の執政でも何でも、完膚なきまでに罵詈雑言して、年も若し却々面白かつたといふ。

次には若山壯吉の所へ行つた、若山は大橋と同じく一齋の門弟で、元氣旺盛な學者であつた彼は

「今の書生は文弱で役に立たないから、斯ういふ時世には武を練らなければならぬ、今日は恰度山鹿流の軍學をやつて居るから見よ」と云ふ調子で、これも甚だ面白くて堪らないから、遂に大橋の門人となり、折々若山へも行

つて、茲に研學修業することなつた。

當時大橋は會の度ごとに、大に幕政を罵り、餘り亂暴狼籍を演ずるので、其席には旗本の子弟も居合はすことであり、甚だ危険であるから、少し注意なすつたら好からうと注意しても、先生トント聽かない、ところが旗本の子弟なども、矢張不平家と見えて、其頃の大老井伊掃部頭の事などは、ひどく悪く言つて居つたさうだ、斯くて土方は萬延元年の春に至るまで江戸に學び、研學も一定の豫定を終へたので歸國した、當時彼は二十八歳の血氣盛であつた。

藩主塾居と聞いて大に憤る

これより先、井伊掃部頭は開國反對論の主張者たる水戸を始め、尾張越前などの諸大名を罰し、遂に皇族公卿にまで及び、多數の志士を斬つて、安政の大獄を斷行した、さうして其餘禍が土佐にまで及ぼして来て、藩主山内容堂も塾居を申付かつた、しかし徳川家では外様大名に餘程憚るところがあつたものと見えて、山内家へは容堂に内意を下して隠居させ、幼年の嗣子を江戸に上せて、本領を安堵させてから、安政六年に容堂に塾居を申付けたといふことだ、そ

こて土佐では議論が沸騰した、當時土佐の小南五郎右衛門といふ、藩中の先輩で、橋本左内や藤田東湖と交を結んで居つた人が、江戸にあつて容堂を輔佐してゐたところ、吉田元吉といふ男が江戸に出て来て、容堂は隠居することとなり小南は國許へ追還されて、身代没收の上、城下八里先に塾居させられてしまつた、土方は歸國して此有様を聞くと大に憤つて、「何だ馬鹿々々しい譯ではないか、何も容堂は狂氣したのでもなく、病氣になつた譯でもない、國家の爲に盡したのである、それを狂者か病人のやうにして、まだ若い人を隠居さすとは怪しからぬ話である」と云ふので、大に論難を試みたけれども、一の壯士論として何の役にも立たなかつた。

佐幕派を斬つて藩論一變す

これより天下の物情騒然として、終に櫻田門外の變あり、幕府反對の氣焰は益々高潮して来る、然るに土佐では矢張幕府を尊崇してゐるので、土方等は堪らない、文久元年には藩に残つて居た武市牛平太や其他同志の人々が、薩長の有志と往來して、國家の爲に總てを擧げて盡さ

うといふことになつた。

ところが段々舞臺が廻つて、藩長兩藩が京都に重きを爲すに至つたので、グツ／＼して居ると、天下の事は藩長の手で料理されることになるといふので、土佐藩でも運動を始めた、土藩では參政の吉田東洋が政權を握つて、佐幕論を取つて居り、隠居の容堂も依然として佐幕勤王である、元來容堂は却々の豪傑であつたが、藩士にも豪の者が多い、君命でも抑へきれない過激家の武市牛平太などは、國でも京都でも働いてゐた、又ボツ／＼脱藩して京都に上り、所謂浪人者の仲間入をして、奔走してゐるものも随分あつた、そこで土方などの同志は、文久二年四月吉田東洋の下城するのを要撃して殺してしまひ、それから藩の形勢も一變して、小南五右衛門は配所から呼戻され、重役に擧げられるに至つた。

七卿の供をして長州に向ふ

翌文久三年、將軍の上洛といふので諸浪人が又騒ぎ出した時、土方と間崎哲馬とに執政の上席深尾鼎といふ人から、御用があるから急ぎ出頭せよといふ使が來た、其頃土方も間崎も部屋

住であつたので、直接に執政の所へ行つて命を受くるなど、云ふことは名譽であつた、それから出頭すると、御密事御用を以て京都に差立てるから出立せいと云ふ命令だ、其時には後日出世した時よりも愉快に感じたさうで、直ぐさま間宮と二人で出京し、堂上諸卿並に天下有志の士と交際し、専ら國事に關係することゝなつた。

同年八月、土方は徵士に選ばれ、三條實美が總裁である學習院の御用掛を命ぜられて、大和行幸の取調べをしてゐた、ところが俄然朝旨一變で、大和行幸は断然お止めになり、三條卿以下七卿が退けられて、長州人と共に都を落ち、過激派の諸浪人は皆京都を退き、會津と薩摩の二藩が専ら京都を守護することになつた、斯くて長官であつた三條が勅勘の身の上となつて立退くのに、御用掛の者ばかり踏み留まつて見たところで、何の方法も立たないからと云ふので土方は七卿の供をして下向することになつた。

騒ぎを他所に船中て高軒

七卿は兵庫までは陸路を取り、そこから船で鞆ノ浦に着くと、こゝで一ツ議論が起つた、そ

れは昔足利尊氏が新田、楠の兵に攻立てられて九州に逃げた時、九州の重立つた者に使者を送つて、味方に引付けて置いた爲に、菊池等を除くの外は尊氏に應じて到頭盛返しが出来た、仍て吾々も是から九州中國の諸藩に急使を立て、正義の士を固めて置かうではないかと云ふことに一決し、土方は正使となつて藝州淺野へ行くこととなり、別盃を酌んで船に乗つたが、此日風波が荒くて、三人の船頭は、逆も此風では船が出せぬと主張する、こちらは急ぎだから是非出せと云ふ、いや出せませぬと平身低頭する、道中諸事取扱をした長州の役人で血氣にはやつた男が矢庭に刀を抜いて、斬るとか突くとか言つて船頭を脅迫し始めた、其有様は如何にも源九郎が攝海出帆の故事など思ひ合はされて、なか／＼面白かつた。

土方は若い時から酒を飲むと心ず眠る癖がある、別盃に酔うて船に乗ると此有様だ、船頭を斬つてしまへば船は出せないに極つてゐると、船側にもたれて高軒、目が覺めて見ると船は海上を走つてゐる、同船の使節の人々は彼の剛膽に驚いた、斬るの突くといふ騒ぎの中で、眠つてしまふとは實に剛膽だと持囃されて、思ひもかけぬ功名を博したとか。

三條の股肱となり東奔西走

それ以來土方は三條のお供をして、或は筑前黒崎や、或は小倉藩などへ、三條の使者となつて、攘夷について應援を頼むべく赴いた、尚いろ／＼と自分の意見を陳べたり、献策もしたり三條以下諸卿の爲に大に奔走盡力した、諸卿も土方を信頼して、有志と諸卿との交渉には何時も彼が其任に當つたのである。

慶應元年一月、土方は三條から密命を啣せられて京都に上ることとなつた、それは京都には公卿にも又諸藩から出て居る人の中にも、随分勤王家があるから、其等と能く交通して十分京都の事情を取調べよと云ふのであつた、そこで上京して、諸藩の有志と交り、天下の形勢を探る一方、坂本龍馬と共に薩長聯合の事に協力し、當時太宰府に居た三條に報告すべく、同年五月歸西したが、時事紛々として其年七月に至るも、尙確たる解決を見ないので、土方は七夕の日左の一律を賦して肺肝を流路した。

星夕晴開天漢雲 一年早已過平分

客身偏怯秋風冷 素心未成時事紛
京洛嵐光勞遠夢 鎮四暮色帶妖氛
女兒不解吾人恨 歡語爭呈乞巧文

諸卿の爲に盡すこと六年

然も舞臺は廻轉して愈々王政復古となり、三條以下の諸卿も復位の勅命を拜して、太宰府から上洛することとなつたので、土方は諸卿の後乗お供をして京都へ來た。

明くれば慶應四年正月元旦、今朝雪初めて霽れ、一望の銀世界と化した、多年漂泊の身が漸く都門の新春を迎へたのであるが、まだ太平を諳ふまでに至らず、喜憂交々で感慨禁する能はざるものがある、同志の士は相寄つて無事を祝し大に飲んだ、其席上土方の作は左の通り。

長門路や心づくしのかずかずに
うしとみし夜の夢もまた
いつしかさめて九重の

みやこの春のさかほかひ

かたらひかはすけふのたのしさ

思へば文久三年八月、七卿が倭者の爲に陥れられて西下してより、こゝに六年の久しきに亘つて、七卿に従ひ具さに困難を嘗めたが、其勤勞苦忠空しからずして、諸卿の苦節も亦酬いられ、土方はこれまで脱走人の形であつたのが、藩命によつて藩籍に復した。

判事て南町奉行の後を襲ぐ

いよく維新の兵亂も鎮定して、江戸の政治向を改革することとなり、土方は市政裁判所判事を命ぜられ、南町奉行の後を承けることとなつて、事務引繼をすますと、與力同心一同を呼出して、左の如く申渡した。

「今日拙者が市政裁判所判事を仰付かつて、南町奉行から事務を受取つたから、爾後吾輩がこの事務を執る、貴様たちは決して敵國に降服した譯ではなく、元より一天萬乗の大君が天下をしろしめす所を、暫く幕府に政權を御委任遊ばされて居つたのを、此度その御委任にな

つて居つたのを、此度その御委任になつて居つた御政治をお取上げになつたので、徳川慶喜を始め一同恭順し、王政復古の大御代となつたのであるから、この上は皆朝廷に御奉公をせねばならぬ、依て御奉公いたしたき者は直に使ふ、若し又御奉公の出来ぬと申す者あらば、直に暇をやるから各處決せよ」

すると皆々御受をしたが、唯その中で一人御奉公が出来ませぬと云つて、去つた者があつたといふ。

當時町奉行の仕事といふのは、今の東京府の仕事と市役所の仕事を兼ね、其上に刑事も民事も一切扱つて居り、而して控訴院もなければ大審院もなく、始審も終審も獨斷である、勿論それだけでなくは其時分のことだから間に合はぬ、ところで土方は新政を行ふについて何から遣らうかと考へた末、先づ大逆無道を行つた奴の外、一切大赦を行はうといふことに決定し、獄中に在る者を開放して赦してしまつた、次には忠臣孝子義僕及び特志の者に賞典を行つたのである。

子爵 田中不二磨

幼にして勤王の志厚き田中の如きは實に稀なりで、而して其奇行は彼を狂人視さるゝに至りても、猶且つ王事に奔走して能く回天の偉功に献替したる忠誠の士、その明治政府に用ひらるゝに及んで、トントク拍子に官位を進められて、或は文教に携はり、或は司法を宰し、或は外交官となり、行くとして可ならざるなき明治の功臣たり、彼は明治二十四年始めて法相の任に就いた。

毎日三回足利の像を鞭つ

田中は尾張藩士田中儀兵衛の倅で、幼名を國之輔と稱し、教を明倫堂に受けて居つた、此時からして彼は勤王の志深く、將門の専横を惡むこと蛇蝎の如しといつた有様であつた、年甫めて十三、志を決して王家の爲に盡さんと期し、工人に命じて足利十三代の像を造らせ、それをば己が居間に並べ置き、毎日此像に向つて鞭つこと三回、斯くすること數ヶ年間の久しきに及んで、而も一日だもこれを忘れた事がないと云ふに至つては、高山彦九郎をして後に陸若たらしめる底の人物、彼を知る人々は其勤王の志厚きと、此奇行とに驚嘆せざるはなかつた。

田中を見込んだ今小町の戀

こんな風で、彼の平常は萬事にかけて變つてゐた、否親戚の者までも彼を狂人のやうに待遇つて、成るべく寄り付かないやうにする、娘子供などは彼を見ると、ソラ田中の狂人が来たと言つて、慌て、逃げ匿れてしまつたものだ、ところが夢喰ふ虫も好き好きとやら、當時名古屋に花屋新兵衛と云つて、花簪を商つてゐる店があつた、此家の箱入娘おマスさんは、今小町と呼ばれる程の評判の別嬪、それが何うした譯か此狂人じみた田中に惚れ込んで、両親に隠れて婚曳しては、衣類小遣錢なんかを貢いで居つたが、いつしか新兵衛の爲に喚ぎつけられて、これは途方もないことだ、男もあらうに彼の狂人じみた、然もお尋ね者の田中と一緒にならうとは、以ての外だと、一刻も早く手を切らせんものと、百方嚇したり嫌したりしたが、娘心の一徹心、何といつても背かばこそ、其中に田中は藩の嫌疑を受けて、探偵は益々嚴重になつて来た、おマスさんは非常に心配して庇匿つてやつた、両親も田中は何うならうと構はぬとして、大切の娘が連累とでもなつた日にはと、そのみ氣に掛けて毎日薄氷を履む思ひであつた

とは、左もあるべきことであらう。

昨日にかはる今日の榮華

やがて幕府は倒れて王政維新の世となり、田中は王事に勤勞した功を以て金千圓を賜り、次で參與職に任ぜられ、忽ち衣冠の列に班して昨日に變る今日の榮華、情人おマスさんの喜びは何を以て之に譬へんやで、父新兵衛の驚きも一方ならず、唯々娘の眼識に舌を巻くばかり、斯うなつたのも田中が非凡の材と、勤王の志とが齎らした結果なるは言ふまでもないが、娘が心盡しの程も亦大に與つて力あるもの、此恩義が何うして忘れられよう、田中は然るべき人を媒妁に、改めておマスさんをば、妻に貰ひ受ける事に定つて、目出たく借老同穴の契を結んだ。

超スピードで官位累進す

これからの田中は旭日昇天の勢ひで、明治二年には大學の御用掛となり、更に中辨に任ぜられ、爾來太政官出仕、樞密大使、内大使、文部大丞等に歴任し、五年には理事官として歐洲

各國へ差遣せられ、翌年歸朝すると直に文部省三等出仕を仰付かり、次で文部少輔から大輔に進み、十三年には司法卿に任じ、十四年には多事院副議長を拜命し、十七年には特命全權公使となつて、二十年には華族に列せらるゝの光榮を擔うた。

彼が内閣に大臣として、始めて法相の椅子を占めたのは明治二十四年で、其年九月山縣有朋が其後を繼いだ、彼は樞密顧問官に任ぜられ、議定官を兼ねて權威徳望一世に振うた、少年時代の國之輔、狂人と忌まれた奇行の田中が、こんな出世をしようとは誰が想像し得たであらうか。

侯爵大隈重信

明治憲政史上の一大花形で、外交家としては其名聲列國に鳴り、教育家としては數萬の人材を育成したる大隈重信は、少年の頃藩制の窮屈なるに反抗的態度を取つて、小革命家の名を謳はれ、夙に洋學の必要を悟つて長崎に遊び、幕末騒擾の際には國事に狂奔して藩主を動かす等、豪宕奔放の彼は遂に政府に用ひられて、辣腕を縦横に揮ひ、野に在りては改進黨の首領となり、朝に在りては外務大臣となり、總理大臣となり、其一生は實に華かなものであつた。

母親一人の善美な庭訓

大隈は幼名を八太郎と呼び、天保九年肥前國佐賀に生れた、父信保は長崎砲臺の警衛頭として、其名を知られた藩士で、家格は左程高いといふ譯ではないが、維新の功臣の多くが、其身を足輕などから起したのに比べると、大隈は稍幸運な運命の下に生れたのである、母は三井と云ふ、賢明にして思慮に富んだ婦人、父は八太郎が八歳の時に死んだので、母の手一つで育てたのだが、庭訓善美、其子を教養すること随分他に優れてゐた、例へば八太郎が近所の子供と遊ぶ時は、母親も其中に交つて共に遊び、少しも眼を離さずして群童の性質良否を鑑別し、細かに八太郎の悪習に染まざるやう注意し、何等干渉的態度を執らずして、巧く愛兒の性格を陶冶したといふ如く、まことに此母にして此子ありと云ふべき育て方であつた。

後年豪宕奔放を極めた大隈も、八太郎時代には何一つとして母の訓へに逆らつたことはなく學校から歸れば静に袴の塵を掃ひ、刀を刀架に掛けてから、必ず母の前に膝を折つて「只今歸りました」と順從に挨拶し、駄々をこねるなどのことはなかつたとか。

嚴正なる放任主義の薰陶

母親は何時も温顔を以て彼に接し、其行爲の不正ならざる限りは、愛兒の性情を抑へたり若くは叱るなどの風はなく、努めて嚴正な放任主義を以て薰陶した、八太郎は常に多勢の友達を家へ伴れて来て、恰も少年倶楽部の觀を呈したけれども、母は決して之を厭ふやうなことなく菓子と興へたり飯を食はせなどして、衆と共に樂しましめるといふ有様、之が爲に費用が嵩んでも一向頓着しない、元來八太郎は幼少の時から負けず嫌ひの性質で、自己の信ずるところは孤立孤行しても奮闘するといふ戦氣を帯びてゐた、之に對し母は彼が主張の是非善惡を冷静に考慮して、若し八太郎の意見を是なりと認むれば、假令近所隣りの者が不賛成でも、一向お構ひなしで遣らせた、こんな賢明な母親に向つて、八太郎が従順であつたのは素より當然のことだが、長じて後、早稲田の老侯が政界の荒波と健闘を續け、又其門下には日夜來訪者の絶えたことがないなど、何れも皆其幼少時代に於ける家庭の感化によれるは疑ふべくもあるまい。

佐賀藩に於ける過酷の掟

佐賀藩の子弟は、稍文字を解する頃から一種の經典を教へられた、それは所謂「葉蔭主義」と云ふので、「武士たるものは唯だ一死以て佐賀藩の爲に盡すべし」といふ信條を説いたもの、これが同藩の武士道教科書で、神聖不可侵の藩律である、開卷の初めには、釋迦も孔子も楠公も信玄も、曾て鍋島家に奉公したことのない人々だから、決して崇敬するに足らない旨を説いた一章がある、天地廣しといへども佐賀藩より貴重なるものはないといふのが、此主義の神髓とするところであつた、而して此主義に配するに窮屈な朱子學を以てし、各種の制規を設けて甚だしく子弟を拘束した、従つて其學風は因循固陋の弊に陥り、私塾の如きは之を排斥したのであつた。

又藩費の弘道館には内生と外生との區別があつて、藩士の子弟六七歳に達すれば皆外生として入校し、漸次進んで十六七歳に至れば、内生となつて、二十五六歳で卒業するの制度で、其教育科目は四書五經の素讀から、會讀論議に及び、何れも朱子學以外に出るを許さない、若し

過酷になつて規定の學業を成就する能はざるものは、其罰として家祿の十分の八を控除し且つ藩の役人となる能はざる過酷な掟があつた、されば如何なる英才も此苛烈なる束縛に恐れ入つた、偶々豪放な者があつて此桎梏を脱しようとするれば、却つて冷酷な周囲の壓迫を受けて、身の置き所がなくなるといふ窮境に陥る外はない。

大義名分の思想を養ふ

無論八太郎も如上の藩制に依つて教育せられ、其狹隘なる陋習に惱まされた一人であつたが年少氣銳の彼は甘んじて之に従はない、盛んに反抗的態度を執つて、早くも藩費内に於ける謀叛の一首謀者と目せられ、之が爲に一時放逐されて、四面楚歌の悲境に沈んだが、賢明なる慈母は彼が唯一の慰藉者となり、又鞭撻者ともなつて、少しも彼を責むるが如きことはなかつた、即ち八太郎の主張せるところは、確に時勢に適應した合理的思想に基いて居ることを承認したからである。

其頃佐賀藩に義祭同盟と稱する青年結社が出来て、副島種臣の兄枝吉李助が此同盟の牛耳を

執つてゐた、枝吉は夙に固陋の學辯を超越し、又國學に通曉して尊王の論、國體の説を唱へ、慷慨氣を負ふ奇傑であつた、八太郎は其才學を慕ひ、其談論を聞くを好み、枝吉に就いて國典を修め、大寶令、古事記等の講義を授かつた、「是れ予が一生の精神行爲を養成せし第一歩なり」とは後年彼の語れるところで、大義名分の思想は實に枝吉の植ゑ附けたものである、こんな間柄であつたから、八太郎も義祭同盟に加はつて士氣の涵養に資した、これは彼が十六歳の頃であつた。

蘭學生として長崎に派遣

然るに大隈は藩の窮屈なる退嬰的氣風に對し、益々不平憤懣の念強く、此頃よりして清新な洋學を研究するの必要を唱へ、熱心に改革の急務を論じた、恰も此時藩主の設けたる蘭學寮が弘道館内に移されることになつたので、朱子學に懾らざりし大隈は、直ぐ蘭學派に屬して専心西洋の學藝に心を傾けた、さうして間もなく大隈は蘭學寮の教師に拔擢されたが、彼は父の後を繼いで砲術家にならうとし、大砲及び築城學等の研究に興味を感じて、藩主よりは航海術を

學ぶべしとの勸告があつたけれども、之をことわつて軍事に關する知識を練り、傍海外各國の地理、法制及び歴史等に就いて學んだ。

先に藩主鍋島閑叟は、保守主義者と蘭學攻究者との間に思想の衝突を來したのを緩和すべく蘭學寮を弘道館内に移したのであつたが、保守對進歩派の衝突、漢學及洋學派の軋轢は其後毫も調和を見ず、日を逐うて一層劇烈を極め、互に排撃して兩々相下らざる有様に、閑叟は其争ひを和ぐるの手段として、蘭學生三十餘名を長崎に派遣し、親しく泰西の文物を修得せしむることとした、大隈は其人選中に加へられて、狭苦しい佐賀の地を脱するを得たのであつた。

債友を援くる任俠的氣風

長崎遊學の命を受けた佐賀藩の子弟は藩の設立した致遠館といふ一學舎に於て、英人を備うて専ら英學を講究することとなつた、當時洋學といへば、和蘭語の代名詞なるかの如く世人の思惟せる時代に、早くも英語に親しんだのは彼に取つて非常の幸福であつた、大隈は英人フルベツキに就いて數學を修め、基督教の説教を聞き、其他歐米の文物制度を學んだのは、後年彼

が明治政界の智囊として、忽ち頭角を現はした素地を作つたのである、大隈と志を同じくし日夕互に勉強研究したのは副島種臣で、二人は眞に莫逆の友となつた。

致遠館は佐賀から三十里ほど隔つて居たけれども、同一藩内の土地であつたから、大隈等の革命的新運動は、爾來此長崎なる新學舎を根據として行はれた、さうして幼少の頃から一種の任侠的氣風を有せる彼は、長崎遊學中にあつても他の貧困な僚友を援助し、爲に學資は普通人の二三倍をも要した、然るに彼の母は毫も厭な顔もせず、遂には自分で養蠶をやつたり、或は味噌醬油を造つたりして、寡婦の身でありながら愛兒の爲には費用を惜まなかつた、彼が慈母から受けた恩寵は實に深入無邊であり、健氣なる母親の教育振りは三歎せざるを得ないものがある。

藩吏に疎まれて選に漏る

大隈が義祭同盟に加入して士氣の作興に心を傾けたことは前に述べた、然るに其頃から物情騒然として、天下の形勢奮ならざるものがあつた、米國の使節ペルリが浦賀から神奈川に進み

強硬なる談判を持ち込んだとの急報が、すると、佐賀藩でも江戸藩邸の守護が心細いといふので、俄に藩士を派遣し、又列藩の形勢をも探るべき必要が起つた、そこで島義勇や大塚與七などは蝦夷探險の途に上り、薩藩其他へもそれ／＼藩士を出して情勢を視察せしめたが、何れも皆少壯有爲の人で、而も其多くは義祭同盟に加はつた藩の不平兒であつた、それで大隈などは同志の報告に依つて益々時勢の急なるを知ると同時に、青春の血は一層胸に湧き立つた。

安政の末、幕府は米國に使節を派遣するに當つて、佐賀藩から五人の隨行者を選抜せしめた大隈は此選にあづからんものと、いろ／＼策動したけれども、藩吏は彼を疎外して遂に目的を達せしめなかつた、しかし五人の中の二人は大隈の同志であつたから、彼等に依つて情報の得られるのを楽しみに僅に胸を撫で下した、間もなく櫻田事變の報が傳はると、閑叟は痛く心配して、密に腹心の友島津齊彬を鹿兒島に訪うて、時事に關する意見を交換した。

時非にして壯志を挫かる

此時、井伊大老を仆した水戸藩士の一味が、閑叟の首をも併せて取つて居るとの情報傳は

つた、元來閑叟は水戸烈公とは親しい間柄で、殊に姻戚たる深縁を結んでゐた、然るに水戸藩士が閑叟を敵視するに至つたとは、頗る不思議な話で、其事情は明確には解らないが、閑叟が水戸派の過激なる攘夷主義を喜ばなかつたものと解釋したらしい、大隈は此情報を聞くと大に驚いて、同志の間に奔走し、相携へて江戸に出て危急の際に應ぜんものと決心した、しかし之に就いて藩の許可を得ることは困難だから、自費を以て出發するの外はないと覺悟した、斯る場合には大隈の母は、家産を抛つて彼の志望を満足せしめ、更に同志の爲にも多少の費用を支出することを拒まなかつたけれども、大隈の熱烈な運動も、重役の強壓に會つて遂に江戸に出でんとする目的を挫かれてしまつた。

壯志遂に空しく、大隈の鬱屈は察するに餘りがある、彼は藩重役の優柔不斷に憤懣するのみであつたが、偶々彼の先輩にして尊王派の逸足と稱せられた中野方藏は、幕吏に捕はれて獄中に斃れ、彼の私淑せる枝吉幸助は虎列拉で死んだ、しかのみならず、彼の敬重せる閑叟は激しき腸望扶斯に罹つて以來、心氣衰耗して政務は嗣子に委せたといふ有様で、大隈一味の進歩主義者は、何れの時か其實現を見るを得んやと、唯だ天を仰いで痛嘆煩悶するばかりであつた。

明快なる彼の尊王倒幕主義

一藩の狀態斯の如く情弱の氣風に囚はれて、所詮天下の大事に参加する能はざるを見ては、憂憤の情抑へ難くして、急進派の江藤新平は奮然脱藩して京都に上らんとした、又幕府が征長の師を起すに當つても、大隈等の同志は此好機會に乗じて斷然藩論を一定し、倒幕の先頭に立つべきを主張した、これより先、大木喬任亦脱藩して窃に木戸孝允等と畫策するところあつたが間もなく江藤は捕へられて禁錮の身となり、大木は譴責を受けて蟄居仰付けられ、彼等の運動は悉く挫折し、閑叟の蹶起を求めて堂々中原に出でんとする大隈等の計畫は、一として成立するに至らなかつた。

是に於て大隈等の同志は切りに人材登用の必要を叫んで藩の當路者に迫つた、されど其抜擢された人物は、概ね皆革新を好まざる反對派のもので重役等は少壯派の行動を蛇蝎視し、徒に事端を醸すものと看做して居た、大隈などの思想は、之を今日より顧るも寧ろ不思議に思はれる程に、明快なる尊王主義を唱へ、而して幕府に對する見解も亦、些の憚るところなき破産論

者であつた、他藩の人々が公武合體論を説き、表面に尊王攘夷を唱へつゝ、内心信幕府に未練をもつてゐたなどは、餘程其性質を異にし、思想の傾向から云へば、最も早く時代の趨勢を自覺して居たのであつた、然るに閑叟は濃厚なる言行を取つて、屢京都の召命を受け、内勅降下の機會ありしに拘らず、彌縫的手段に腐心して何等の活路をも開き得なかつた。

諸種の献策と非凡の識見

兎角するうちに島義勇は蝦夷から歸つて、北門警備の忽にすべからざるを説き、又幽閉中の江藤及大木から各藩の形勢をも聞いて、大隈の頭腦は益々燃えて來た、それに佐賀藩は長崎に近いので、外國の事情を聞くのに便なるのみならず、内外交通の要衝に當るが故に、總ての報道は逸早く大隈などの耳に入つた、大隈は僅に英學の研究に心を慰めつゝあつたとは云へ、到底靜に落ちつき拂つて讀書してゐることが出来なかつた、彼は藩制改革の議を献策して、軍政の改良、財政の振興を説き、大阪陣及び天草戰爭以來殆ど進歩の實績を見ざる兵制を刷新し、門閥の弊を打破して適材を適所に用ひ、大に泰西の精良なる武器戰術を採用すべし、と率先主

張した。

しかのみならず、大隈は所謂富國策の緊要なるを提言し、藩の資源を作るべき方法をも立案した、従來佐賀藩には代品方と稱する貿易事務官の如きものがあつて、大阪に出張して専ら國産品を販賣し、藩の財政を補つて居たが、大隈は更に其規模を擴張して、長崎と大阪とに大商館を設け、三四十萬兩の資本を投じて、材幹ある官吏及び商人に命じて其事務を擔當せしめ、通商貿易の利益を増進すべしと献策した、さうして自分にも長崎に來往する商人と相結んで之を實行せしめ、或は大阪に物品を送らしめ、又或時は關東に於ける米價の騰貴に乗じて、之を江戸に輸送せしめ、更に又或時は北海道に商業の販路を伸張すべきを勸めて、「船によるの商賣」を佐賀の商人に勸説した。

武人は金錢を卑しむ、貨殖を談するを以て耻とした時弊を排して、此方面に着眼せる彼の眼識は、最も推讃に値すといはねばなるまい、不幸にして彼の勸告に應じて實行に着手したものは、船舶の運用及び取引上の慣習に熟せずして、多くの失敗者を見るに至つたけれども、彼は之に由つて多大の經驗を得、後年明治の政界及び財界に立つて、縦横の手腕を揮つたのは、即

ち其實験的智識に基くのである。

奮然として副島と共に脱藩

斯る間に一兩年は過ぎて、幕府の長州再征となつた、そこで大隈は再び國事に就いて奔走を
始め、先づ閑叟を説いて、幕府と長州との間に立つて調停の勞を取らしめ、然る後進んで天下
の表に立ち、徐ろに大事を経営せんと企てた、それは當時幕府の閑老であつた小笠原壹岐守は
肥前唐津の藩主で、其領土は佐賀藩の領土の間にはさまり、又小笠原は曾て佐賀の學校に學ん
だ關係などもあるので、大隈は奇貨措くべしと爲して、盛んに同志と共に藩中に活躍した。

蓋し大隈の目的とするところは、先づ幕府をして征長の師を止めしめ、若し聽かざる時は長
州を助けるのである、佐賀藩の勢力を以て臨めば、小笠原の如きは必ず之に従ふであらう、萬
一彼が之を拒んだならば、兵力を以て唐津藩の領土を威壓する、さすれば小笠原は否應なしに
屈伏するに相違ない、いづれにもせよ、此際閑叟が一呼して起つあらば、天下風に臨んで靡き
來り、佐賀藩は勞せずして較著なる地位を占めることが出來、此内亂の危機を轉じて、全國の

一致結合を圖り、依つて以て改革の偉業を大成することが出来るであらうと言ふのだ、然るに
藩論は終に定まらずして、佐賀藩の名を成すべき好機を逸した、大隈は憤つた、さうして一身
を擲つべき決心を以て、腹心の友副島種臣と語りひ、死を盟つて共に藩を脱走し、京都に馳せ
上るに至つた。

謹慎を命ぜられ親類預け

京都に於ては大政奉還の論議喧しく、薩長二藩は名實共に幕府を倒さんとし、土藩其他の列
藩は名を棄て、實を存せんと云ふのであつた、然し佐賀藩士の勢力は、京都の志士間では敢て
敬重せらるべき素地を有してゐなかつた、閑叟の名聲は夙に喧傳せるも、性質温厚に過ぎて頼
むに足らずとし、又江藤新平や大木喬任の名は、多少世に知られて居ないではなかつたが、藩
論を代表するものでないところから、餘り重視されてゐなかつた、こんな有様であつたから、
後進の一書生が京都へ上つて、薩長土各藩の志士と共に運動しようとしても一寸むづかしい、
殊に藩の勢力を左右し得る地位が有るではなし、大隈などの志は壯なりといへども、之を伸

ぶるの便宜を見出すのに困じた、大隈等はつくづく佐賀藩の無氣力を嘆じ、折角脱藩して上洛した効のないのを嘆いた。

けれども、大隈等は、如何にもして多年の抱懐を實現せんものと、一橋慶喜の幕僚たる原市之進に依つて、大政奉還の必要を將軍に進言せんとした、そこで先づ原に會うて自己の所見を説いたが、原は忽ち大隈を藩吏に引渡し却つて彼を窮地に陥れた、藩吏は直ぐ大隈を抑留し、脱藩の廉を以て歸藩謹慎を命ぜられ、親類預けの身となつた、斯くて大隈と副島の兩人は、京都に滞在すること僅々二三ヶ月にして、飛ぶに羽翼なき籠の禽となつてしまつた。

大病に罹つて計畫は水の泡

幕府の長州再征は大隈の豫見した通り、果して散々の失敗に終り、加ふるに將軍家茂の薨去で幕府の混乱名状すべからず、慶喜が將軍職を繼いだ、けれども幕府の威信は全く地に墜ちて天下の形勢は何人の目にも略ほ其趨向を察し得るやうになつて、優柔なる佐賀藩も漸と目が覺めた、覺めると共に大隈等の、同志に倚るの止むなきを悟つて、そこで大隈の謹慎を解き却つて

其意見を徴することとなつた、大隈はこゝぞとばかり、今日の計としては兵を京都に出し、閑叟自ら朝廷の樞機に參して、之を補佐するに有爲の人物を以てし、列藩の有志と共に風雲に乗するの外なしと説いて、自分は再び長崎に向つた。

好事魔多しとやら、大隈は佐賀を發するの昨夜、頻に惡寒を感じて身體に異狀あるを知つたが、強ひて勇を鼓して長崎に向つたところ、諫早に着いた頃から眩暈と氣促の苦痛を感じることに數回に及び、辛うじて長崎に着いた時には殆ど人事不省に陥つてゐた、即ち猩紅熱に罹つたので、一時は快復の見込なしと匙を投げられた程の大患であつたが、幸に長崎には蘭醫マルセルを始め著名の良醫が居たので、投藥効を奏して九死に一生を得たのであつた。

元來大隈は幼い時から體質が弱く、且つ過つて右足を傷けてからは益々健康を損じて二十四五歳にして既に四十歳以上の衰容を呈した程であつた、唯彼は其氣力の旺盛と、性質の活潑なので少しも意に介せなかつたが、猩紅熱を病んだ時には三四ヶ月間空しく病床に呻吟せざるを得なかつた、之が爲に彼の豫定計畫は齟齬して、遂に幕末維新の大業に馳せ參することが出来ず、徒に懊惱煩悶するばかりの遺憾な状態にあつた、そして少し快くなつたので直に活動を始

めた、醫者は切に豫後の攝生を勸めたが、時勢の急なるを聞いては安閑と静養する道もなかつたのである、果せるかな、彼は又もや劇烈なりユーマチスに襲はれ、再び非常な苦痛のうちに轉輾しなければならなかつた。

歐米留學の勸告を拒絶す

たま／＼佛國巴里に世界大博覽會が開かれることとなつて、同國から幕府に向つて切りに出品勧誘を試みた、そこで幕府は各藩に之を慫慂した、佐賀藩では恰も、豫て和蘭に注文した軍艦が竣工したといふ通知が来て居た節ではあり、其受取かた／＼委員を派遣することとなつて佐野常民が選ばれて其任に當り、一行を引連れて佛國へ渡ることにした、此時大隈の親戚の人達は、豫てから大隈の身の上に就いて大層心配し、大隈の同志は何れも過激な人ばかりで、國禁を犯すことなど屁とも思はない、こんな連中と長く交際して居ては、何時とはなしに之に感化されて、遂には一家を亡ぼす如きことが出来るかも知れぬ、だから此際海外へやつて、今までの同志と絶交するのが安全の策だと考へ、上記の軍艦委員に託して大隈を佛國に送り、専

心勉強せしめんと企てた。

そこで藩主の許しを受ける前に、一應大隈の意向を確める必要があるといふので、大隈に此事を話すと、「危急なる國家を捨て、おめ／＼歐米留學を爲し居る時ではない」とキツバリ切ねつけた、蓋し幕府の運命旦夕に迫り、之を一刀兩斷的に處理せずんば、天下亂れて徒に外國の乗ずるところとならんことを虞れ、身を挺して難局に當らうといふ一大壯圖を抱いてゐたからである、且つ又、一行の委員長たる佐野は朱子學を奉じ、從來仲の好くなかつた間柄として總ての點に於て外國行を欲しなかつたものらしい。

出府して幕府の實情を探る

大隈の志望は、江戸に赴いて幕府の地位、現狀及び其弊害の伏するところを視察し、再び京都に到りて其視察に基ける實跡を列擧し、各藩有力者を説いて而して後藩に歸り、頑冥なる藩吏を覺醒せしめんとする方針であつた、されど數年來の奔走に多大の資金を費し、大病の入費を合せると殆ど家産は無くなつて、今や如何ともすべからざる境遇にあつたので、大隈は種々

金策に頭を悩ましつゝある最中、横尾某なる者が進んで大隈の爲に若干の金を調達してくれた。横尾は曩に大隈が富國策を藩廳に建議し、其一部の採用を得た時に、大隈と懇意になつた男である。

斯くて金は幸に調つたが、大隈のリューマチスは依然として根治しない、大隈は大に焦つて居る折柄、京都の風雲は明日をも測り知るべからざる場合となつたので、彼は同志の一人山口尚芳をして急ぎ京都へ赴かした、やがて病氣が太分快方に向つたので、英國商船に乗つて東上し、山口等と協力しようとしたが、同船は途中模様變で神戸に寄港せず、横濱に直行した、大隈は一旦大に失望したけれども、幕府の實情を探らうとする當初の目的には、却つて好都合だと自ら慰めた。

ところが横濱に上陸して見ると、幕吏の警戒が極めて嚴重で、苟も兩刀を腰に帯してゐるものは、容易に關門を通過させない、これは攘夷黨の壯士が日夜外人を覘ひ、居留地を襲ふなどの風聞が高かつた爲である、然るに幸にも船中で心やすくなつた幕府の通辯某なる者が百方盡力してくれて、無事關門を通れたのは天祐であつた。

捕はれる覺悟で急ぎ歸藩

江戸へ着くと勝海舟や其他の人々に會つて、いろ／＼議論を闘はして見たが、最早天下の形勢は口舌を以て如何ともすべからず、幕府の威令は全く行はれずして、歩兵、新徴組等は亂暴甚だしく、盜賊白晝に横行するといふ有様、そこで大隈は直に京都に赴かんとして、恰も外國船の神戸に向ふものに乗込んだ、神戸に着くと偶然にも京都から着藩せんとして神戸まで來た山口尚芳に遇つたので、親しく京都の情況を聞き、又江戸の有様を語つて、歸藩の後は閑叟を説いて兵を率ゐる上京せしめようといふ事に申合せ、山口は佐賀に向ひ、大隈は京都に向つた。時は慶應三年十二月、將軍慶喜大政を奉還して朝廷之を納れ、會津桑名二藩の京都守職を解いて、薩長兩藩を之に代らした、尋で慶喜は二條城より大阪に脱れたけれども、會桑二藩の兵は盛んに不穩の行動を示し、京都の雲行は暗澹として、一波瀾なくては治まるまいと觀測された、之を見た大隈は、今は朝命を待つまでもなしと、匆々神戸から藩の汽船に乗つて歸國の途に就いた、固より脱藩の廉を以て捕はれるのは覺悟の前だつたが、事急にして之を避く

るの違がなかつた。

然るに同じ船に乗り込んだ山崎といふ士官は、大隈と縁戚關係のある人で、且つ閑叟の信任厚き側年寄の原田と近親であつたので、大隈は山崎に頼んで先づ原田を説き、而して閑叟に面謁せんとする機會を作つた。

閑叟の優柔遂に時機を失す

事は幸ひにして首尾よく運ばれ、脱藩の事も、亦免されて、いよいよ大隈は執政、參政列席の上、閑叟に面謁して所見を陳べる事となつた、蓋し一介の書生にして直接に藩侯と言を交ふるは、未曾有の異例であつたが、京都の新事實を聽かんとするに急なりし爲、特に之を許したのであつた、大隈は大に勇んで江戸及び京都の實狀を説き、王政復古の大業が着々として其歩を進めつゝあるを述べて、我藩今日までの如き優柔なる態度を以て傍觀せば、益々世の疑惑を招くべき事、今我藩にして起たば、薩長と共に將來重きを致すに至るべき事等を、縷々として最も熱烈に、最も剴切に、最も沈痛なる口調を以て述べ立てた、然るに閑叟は最後に於て唯一

言「委細聽き置く」と言つたのみ、張合ひのない事夥しい。

大隈の憂慮一方ならず、先に歸藩せる山口と共に、參政執政等の有力者間を説き廻つて、殆んど氣狂ひのやうになつて運動した、斯て慶應三年も將に盡きんとする時、漸く閑叟上京の布達が傳へられた、而も期日は確定せず、年が暮れても尙ほ上京の模様が見えぬ、彼の同志は寢食を忘れて奔走したけれども其甲斐なく、重役は有志の意見を握り潰して閑叟に通達しなかつた、是に於てか島義勇等は「我藩にして因循斯の如くんば、到底頼むに足らぬ、日ならずして我等同志は藩を捨て、京都に行かう」と言つた、藩吏は之を聞くと驚いて初めて閑叟に此趣を告げたが、時既に遅し、矢は弦を離れた、慶喜は鳥羽伏見の戦に敗れて江戸に遁れ、天下の形勢は定まり終んぬ、あゝ斯の如くにして鍋島藩は、大隈等同志の烈々たるものありしにも拘らず、薩長に後れを取るの止むなきに至つたのである。

長崎で幕臣遁走後の跡始末

然し天は長く此有爲なる逸足をして、徒に伏櫪の嘆を啣たしめなかつた、大隈が跳躍馳驅

すべき新しき舞臺は茲に開展されて、彼の腕の冴えは忽ち廟堂に認めらるゝに至つた。三百年來我國唯一の開港場であつた、長崎には外國商館及び外人の居留する者多く、幕府に於ても最も重要視した土地であつた、然るに慶喜將軍大阪を脱走したといふ報知を聞くと、長崎の外國奉行等は何れも役所を棄てて逃竄し、一時は無政府の状態を示したので、維新政府は從來長崎に關係深き各藩から、各代表者を出さして事務を處理させることとなり、薩藩からは松方正義を始め、長藩及土藩からも其藩士を遣はし、佐賀藩では大隈に命じて其任に當らせ

た。大隈は數年來既に長崎にあつて其地の事情を詳にし、外人との間にも知人多く、内外貿易の状態も熟知して居たから、各藩の代表者中最も優れたる適材であつたことは言ふ迄もない、彼は各藩の人々と相談して、先づ合議事務所を設け、當時幕臣遁走の際總ての書類を持去つた爲、其跡始末を講ずるに臨機的手段を執らねばならぬ必要があつたので、彼は主として是が整理の任に當り、各國領事に對して、

「内國人に關する取引上の權利を有するものは此際二ヶ月以内に申請すべく、若し此手續を

履行せざる時は假令權利あるものと雖も消滅すべし」といふ告知を發した、そこで紛糾せる内外各般の事件は直に明瞭となり、僅々二ヶ月にして全部當面の事務を完了した、彼の處斷は頗る公正で、内外の區別を眼中に置かず、外人が我を威壓せんとするやうな態度のある時は、市民及商會に命じて一種のポイコットを行はしめ、極めて嚴正なる遣り方を見せた、薩藩の同役松方正義の如きは、大隈の處斷が餘りに強硬なのを心配して、屢調停役をしたことがあつたといふ。

面倒なる外交問題の突發

大隈の外交的手腕は之に依つて漸次外人間に認められたが、兎角するうちに澤主水正が九州鎮撫總督となり、參謀井上馨を從へて長崎へ來たから、各藩の合議事務所は之を澤總督に引渡した、さうして彼は副參謀に任ぜられ、次で外交事務に當ることとなつた、然るに茲に端なく面倒なる外交問題が起つた。

由來長崎には密に基督敎を奉ずるものが澤山あつて、それが幕府の勢力失墜と共に益々其數

を増し、附近の人民からは交々澤總督に是れが取締方を要請するのであつた、澤總督は極端な攘夷家で、國學の素養深く、王政復古と同時に神道の爲に氣焰を吐かんとして、熱心に其企てに携はつてゐた人だから、耶蘇教を嫌ふこと蛇蝎の如く、直に令を下して耶蘇教の信者と目せらるゝもの五六百人を捕縛せしめた、大隈は豫て外教に關して多少の智識もあり、澤の如く無暗に之を嫌ふことはしなかつたが、唯それが國禁である以上は、彼等信者は國禁を犯し國法を破るの徒として、其罪を糾さねばならぬといふ見解の下に、其重立つた者を呼んで懇々其心得を諭したが、彼等は頑として之に應じない、いよゝ責むればいよゝ反抗せんとする氣色を露はすのみならず、外國宣教師等は大に憤つて其非を鳴らし、當局に迫つて強硬に構へた爲に遂に朝野の大問題となつたのである。

外國公使と談判の重任

此時突如として太政官の命令は大隈に下つた、速に上京して參與の職に就き外交事務に當るべしといふ辭令だ、大隈はかしこまつて、長崎の跡始末のつき次第上京しようと考へて居たと

ころ、至急上京せよとの再度の命令に加へて、岩倉具視からは澤總督に宛て、重要事件があるから萬事を抛つて大隈を上京させてくれとの旨を傳へて來た、そこで大隈は急ぎ京都に向つて出發したのが、明治元年三月初旬で、これぞ他日彼が中央政界に雄飛して、巨大の足跡を印せる第一歩であつた、時に年三十一。

上京匆匆、彼の手腕を試むべき重要事件は、他ならぬ基督教徒處分問題であつた、長崎にゐる各國領事は公使に依つて之を解決せんとし、激しく太政官に迫つて來たので、流石の岩倉や木戸等のお歴々も大分持て餘してゐた、維新政府の基礎未だ堅からざるの際、漫に外國公使の要求を排斥すれば、如何なる事變が生ずるかも測り難い、さればとて耶蘇教徒を放免することとは國內の輿論が之を許さない、そこで閣議を開いて相談したが、誰あつて意見を述べるものもなく何れも皆當惑の爲體、西郷大村などの武將は東征軍に従つて京都に居らず、政府には木戸大久保を始めとして小松帶刀、後藤象二郎、大隈と同藩の大木喬任、副島種臣等の人々が出仕してゐたが、一向名案も浮ばなかつたらしい。

そこで急ぎ大隈を呼び寄せたのであるが、彼は徐ろに一策を建て、曰く、

「國法は國家の安寧秩序を維持するを以て目的とす、國際法を唯一の標準として他國の内政に干渉するは不當也、而して耶蘇教は我國古來の嚴禁する所、之を犯せるものを處罰するに外人の容喙すべき限りに非ず」

と、大隈の此意見が果して外國公使を屈伏するに足るや否やは姑く別として、兎も角彼の説を容れて外國公使と談判せしむることゝなつた。

耶蘇教問題に就て大論判

一介の書生たりし大隈が、一躍して政府の代表者となり、國家の大事を處辨するのであるから、彼も素より不用意ではなかつた、是れ大隈が一身上の初陣たるのみならず、又明治政府の罪の輕重を外人に問はるゝと同様である、やがて大阪の本願寺別院で談判は開かれ、外交總裁山階宮を始め、小松、後藤、木戸等要路の人々其席に列り、外國方はハリー・パークスの兩人が、其代表委員として出席した。

いよいよ談判を開始せんとするに當つて、英公使パークスは突然立つて「予は大隈とは談判

するを好まない、斯る地位の低き者は責任を有しないから」と、劈頭大隈に對して一撃を加へた、由來パークスは恫喝手段を以て外交上の秘訣としてゐた男だ、そこで先づ我が當局の度膽を抜いてやらうとつかまつた、我列席の委員之に答へて「大隈は日本政府一同の承認を経て此局に當つたものであるから、其言説は必ず責任を有するものであると、辯解しパークスも、漸く首肯いて、偕彼我意見の交換となるや、大隈は自ら現に長崎に於て耶蘇教徒を縛し、之を糾問した實際の事情を述べ、更に語を進めて、

「足下等は我國禁を犯せる者を許し、且つ同教を日本に布教するの自由を要求して止まされども、國には各歴史あり、慣習あり、日本の法律に依つて施行しつゝある一國の權利に對し、漫に外國の干渉を受くる必要なく、従つて此事件に關しては、別に足下等の容喙又は干渉を受くるの理由なしと信す」と、滔々として明快に論破した。

怒るパークスと笑ふ大隈

パークスは之を聞いて非常に憤慨し、文明諸國皆齊く信教の自由を許しつゝあるの時、日本獨り之を禁じて無辜の民を罰し、世界の眞理を遮斷するの暴政を行はゞ、日本の將來や知るべきのみと、口を極めて我國法の非なるを論難攻撃した、大隈は之に答へて、予は素より同教の眞理を含めるを知らざるにあらざるも、而も耶蘇教の歴史は戰氣充滿し、屢國家の基礎を危くし、國民道德を紊るの虞れありと論じ、事例を擧げてパークスの所説を駁したる後、語を繼いで、

「日本には佛敎あり、神道あり、今耶蘇敎を許可せば是等の諸教徒の反感を招き、延いては各地人民の不平となつて、如何なる騒亂を起すやも測り難し、内政の亂るゝを捨て、足下等の意見を取らば頗る危険なり」

と述べた、パークスは益々怒り、一利一害は何事にも伴ふもの、一時の杞憂に心を勞して吾人の説を採用せざれば、日本は必ず滅亡せんと予は斷言すと、聲色を勵まして叱咤怒號する有様、大隈はニコ／＼笑つて之に答へ「外人の指揮に依つて輕々しく國法を變ずる時こそ、日本の滅亡する時なるべし予は我國民をして宗教的紛争の慘劇に投ぜしむるを欲せず、鮮血を以て

基督敎を買ふが如きは、予の爲し能はざるところなり」と、斯くて午前十時より晝食をも攝らずして夕刻まで互に辯論したけれども、遂に議論決せずして物別れとなつた。

新日本の人物試験に及第す

さすがのパークスも、大隈の剛勁なる主張と態度には大に驚き、當時通稱の任に當つたシーボルトに對し「予は今日まで大隈の如きものと談判したことがない」と言つたとか、其後兩者の會見談判もなく、基督敎徒處分問題は稍緩慢となり、パークス等も我政府が如何に彼等を處分するかを見て、改めて嚴談に及ばうといふ腹らしかつた、また當局も外人の意嚮を察して、敢て苛酷の取扱をせず、在京各藩の諸侯に彼等の處分法を諮詢し、又木戸孝元を長崎に遣はして、各藩に教徒を分附し、改宗遷善の事に力を盡さしめた。

こんなわけで、大隈の外交談判は十分の解決を得るに至らなかつたけれども、彼の氣骨稜々として、識見の雄邁なるは確に内外の認むるところとなつた、木戸孝元、大久保利通等の要路にありし人々は、此時より大隈を推重し、其言に耳を傾けるやうになつた、薩長二藩の天下で

あつた時、佐賀藩出身の彼が目ざましい昇進を遂げたのは、畢竟彼が新日本の人物試験に及第した結果であると言へよう。

字は祐筆に書かせます

終りに、大隈の逸話として名高い字を書かなかつた一件を紹介しよう、彼がまだ總角の八太郎時代に、同藩の武富圀南を師として讀書や習字を稽古してゐた、ところが此圀南先生は朱子學者で非常に博識な人であつたが、又却々の大酒家であつたので、門弟どもに手本を書いてやる場合にも、今は一杯やつてゐるから後程書いて置かうの、今日は來客があるので明日書いてやるのと言つて、却々書いてくれない、大隈も矢張り此手でやられて手本を書いて呉れなかつた、性來短氣な八太郎、黒々とすつた墨汁を玄關に投げつけて家へ歸ると、「俺は生涯字を書くまい、屹度書くまい」と決心した、それ以來如何に母親から責められても、母親に従順であつた彼が、此事ばかりはどうしても聴き入れない、而して曰く「なアにお母さん、十萬石以上の鋼持大名になれば、祐筆を置きますから、自分で字など書かなくても宜しい」と言つたとか。

伯爵 樺山資紀

ところが大隈の自筆したものが日本に唯の一つある、それは先年或事件の證人として、裁判所から彼の別荘へ證言調書を得るべく判官が出張し、一ツ御署名を願ひますと云ふと、法律の前には何うも駄々をこねるわけにはゆかぬ、何十年目かに筆を握つたが、その手つきと云ひ格好と云ひ、なか／＼振つたもので、判官も全く氣の毒にたへぬ面持がした、さうして十二三分もかゝつて書き終つたのが「大隈重信」の四文字、其字の格好と來たら、全く人様の前では書けさうもないものだといふ、其署名は今尙裁判所で大切に保存してあるとか。

薩摩の生んだ勇將の一人で、幾たびが大臣となれる樺山は、維新の變に武勳を立て、以來、武人として最の位に上り、子爵を賜はり、第一次山縣内閣の海軍大臣となりしを振り出しに、第一次松方内閣の海相、第二次松方内閣の内務大臣となり、日清戦役の功によつて伯爵に陞叙せられ、更に第二次山縣内閣の文部大臣となるなど、行くところして可ならざるはなしといふ官歴を有する。

初陣の奮戦に英軍を走らす

樺山は薩摩の藩士橋口與三の三男で、天保八年十一月に生れ、幼名を覺之進と稱し、後故あつて樺山四郎右衛門の養子となつてから同姓を冒すに至つた、彼は幼より沈勇剛直、頗る果斷に富んだ英雄的素質を備へ、長じて藩費に文武の道を學ぶや、其進境大に見るべきものがあつた、時恰も幕末騷擾の際、薩藩の士が英人を斬つた例の生麥事件が起つて、英國の軍艦が鹿兒島を砲撃するに相違ないと云ふので、藩中では大に騒いで其應戰準備を急いだ、果して英艦は遣つて来て砲撃を始めた、藩に於ては兵士を繰出して極力戰つたが、此時樺山は遊軍として砲臺を守り、若し英軍に負けるやうなことがあつたなら、それこそ薩摩の名折れでもあり、日本の耻辱でもあるといふので、一同を鼓舞激勵して砲戰すること二日にわたり、其頑強な死物狂ひの働きに、英軍も遂に膽を潰して敗走したのであつた、樺山が初陣の戦功は、彼の剛勇沈着なるを世に示して、以來彼が藩中に於ける評判は頗る高かつた。

使命を全うしたる彼の膽勇

其後樺山は二番遊撃隊に屬し御守衛として、京都に上ると、勤王方は京都に陣を構へ、將軍

慶喜は會津桑名兩藩の兵を引連れて大阪にあり、さうして四方から集つて來る天下の志士は、頻りに京阪の間を往來して世間は實に物騒千萬、何時どんな嵐が吹き起るか知れない状態であつたが、此時前に長州へ落ち延びた七卿中の三條壬生等の諸卿が大阪まで歸つて來たものゝ、偕入京するには途中で何んな間違ひが起らぬとも限らないと云つて、勢からず心配し一時入京を見合せてゐた、薩藩では此時剛勇な樺山こそ出迎への好適者であると云ふので、彼をして大阪へ向はしめたのであつたが、途中随分危険な事もあつたけれども、決死の勇を振つて三條等を護り、難なく入京せしめて立派に使命を果した。これには藩公始め先輩志士の面々もいたく、樺山の膽力と勇氣とに敬服した。

戊辰の戦に著るしき勲功

やがて明治元年正月二日、鳥羽の戦が起つた、樺山は考へた、幕軍は屹度薩藩に向つて來るに相違ないから、一ツ其軍略の裏をかいてやらうと、兵を率ゐて丹波路から書夜を別たず兼行し、先づ第一着に幕府の兵が入京せんとするのを淀の堤に遮へ撃つて、目に餘る程の大軍

を見事敗走させた、續いて東山道に向ひ、轉戦して奥州白河まで兵を進めたが、彼が斥候の任を帯びて敵地に侵入した際の如きは、三十名の部下と共に重圍の中に陥つた、既に十七名の勇士を失つたにも拘らず、勇を鼓して彈丸雨飛の間に奮戦し、縦横無盡に切り捲つたる獅子奮迅の勢ひに、衆を恃んでゐた敵兵共は、其太刀先に破られ、端なくも潰走してしまひ、彼は十餘名の残兵を連れて本營に歸つたといふやうな働きもあつた、而して元年十一月凱旋と共に、勳功を賞せられて永世祿八石を賜はり、翌年陸軍少佐に榮進した。

參謀長の一言千鈞の重み

時に臺灣の蕃民が我が流球人を虐殺したとの報があつて、之を聞いた樺山の憤慨一方ならず其儘に捨て置くべきではないとあつて、先、桐野利秋を説き、西郷隆盛に就いて之れが問罪の師を與さんことを發議した、世論は益々喧囂する、遂に舊薩藩の輿論を一定して、政府をして愈々征討の軍を出さしむることに決つた、而して西郷從道は都督として臺灣に向つたが、此時樺山は參謀として畫策宜しき得、大に戰功を現はした、續いて十年の役には、谷干城が熊本鎮

臺司令官で、樺山は參謀長であつたが、二月十一日には篠原國幹等が鎮臺に迫つて、敵はなか／＼の優勢であり、城中では糧食既に盡きて、馬は勿論のこと犬や猫までも殺して食べるといふ有様、斯うして援兵の來るのを待つたが、容易に來さうにもないので、此上は賊軍の通過を許すより外に途はなからうとの議論が起つた、すると樺山は憤然として「お前方がさういふつもりならば、先づ乃公の首を斬つて、然る後に敵に通過を許してやるがよい」と意氣頗る激昂したので、多數の武官は此一言に辟易してしまつて、死を決して敵に當るべく各其部署に就いた、思へば彼此の一言こそ、賊軍滅亡の時期を早める千鈞の力があつたものだ。

子爵 高島 鞆之助

英雄豪傑を多く生める薩摩に於て、大西郷に次ぐ小西郷として畏敬せられ、政界に在つては長閑を排して薩摩の勢力を盛返すの畫策に成功したるなど、智勇兼備の名將軍にして政治家を兼ねたる高島革丙將軍は、維新の變に各地に轉戦して功を立て、西南の役に敵將を惱まし、抜んでられて少將となり、遂に躍進して大臣の椅子を占むるに至つて、第一次松方内閣の陸軍大臣を振り出しに、拓殖務大臣たること二回、再び帥軍大臣となつて子爵を賜はつた。

英敏卓識の名藩中に高し

由來鹿兒島は幾多の英雄豪傑を生んだが、大西郷に次いで小西郷とまで畏敬せられ、智勇兼備の名將軍と謳はれたのは、即ち此革丙將軍其人である、彼は政界に在つても一種の大勢力を有し、一時は長閑の勢力隆々として政權を壇にせしほどなるに引換へ、薩閑の意氣は大に衰へたる時に當つて、能く頽勢を挽回した表面の勇者は山本權兵衛であるが、其裏面に於て畫策聲援、遂に長閑を排して薩の勢力を盛返した功勞に至つては、之を高島頼之助の榮譽に歸せねばならぬ。

彼は鹿兒島藩士高山喜兵衛の四男として、弘化元年十一月に生れた、少時より英敏卓識の質は、物毎に其鋒鋦を現はして、喜兵衛の伴には變り者が出来たと、藩中の評判が却々高かつた稍長じて藩黨に入ると、成績は何時も拔群の立派なもの、所謂一を聞いて十を知るといふ賢さであつたが、腕白の方でも亦一番で、戦さ事をしても彼は常に大將となり全軍を率ゐて居た、十八歳の時藩主に仕へ、文久二年三月島津久光に従うて京都に上り、禁闕守衛の任に當つた、當

深創を裏んで直ぐ様奮戦

時天下の形勢漸く變調を呈して、近く事あるべきを看取したる彼は、切りに諸有司の門に入らして交りをつ結んだ、斯くて彼は奥小姓とまで取立てられたのであつた。

徳川幕府は、日に衰へて威信地に墜ち、勤王の志士は四方に起つて倒幕を謀るに至つて、將軍慶喜は愈々大政を奉還することになつたが、長く幕府の祿を食んでゐた幕臣や大名中には、大權の存在は上にあるとしても、政務は天皇の下にあつて徳川に執らせるのが至當だと主張するものもあり、それやこれやで反旗を翻す者が出来て来た、朝廷は愈々征討の師を起すといふことになつて、高島は監軍となり、鳥羽伏見の戦ひに臨んで大に武勇を振つて功を立て、其年の四月には越後路に向ひ、長岡片桐等を攻めたが、偶々彈丸に腕を傷けられて、到頭入院治療することとなつた、すると官軍急なりとの知らせが来た、斯くと聞いてはジツとして居られな、剛膽な高島は深創を裏んで直ぐ様出陣、轉戦して敵をして顔色なからしめ、間もなく奥羽の地は悉く平定して、こゝに維新の戦雲は全く治まつた、凱旋後朝廷其功を賞して、永世賞

典祿八石を賜はつた。

西南戦役に殊功を立つ

明治三年六月、彼は二十七歳にして侍従に任ぜられ、明治大帝に奉仕することとなり、七年五月陸軍大佐に任ぜられ、八年二月教導團長仰付けらるるといふ勢ひで、十年の西南戦役には本營師團幕僚參謀の格で戦地に臨み、出征中に長崎警備司令官に任ぜられ、別働第二旅團司令官に轉じて、愈々八代から賊の背後を衝いた、これには桐野利秋等も少からず惱まされたさうで、それより彼は諸兵を指揮して各地に轉戦し、官軍遂に勝を占めて、西郷以下の賊將は城山で討死をする、亂平らいで凱旋した高島は忽ち少將に榮進したのである。

彼の出世は堪忍の賜物

元來高島は武骨稜々たる薩摩隼人で、衣冠の人としては何うも適せないところがあるから、侍従に任ぜられて宮内官の仲間をした時に、此一介武辯の士は同僚の嫌はれものとなつて、或

日背後から鹽を振り懸けられた、高島は心の中で非常に怒つたが、齒を切つて堪忍し相手の男を咎めもしなかつた、それで事なくすんだが、若しも此時堪忍袋の緒が切れて、其場で一騒動を起さうものなら、家は斷絶身は切腹といふ、淺野内匠頭の二の舞とまでは往かずとも、彼は確に重き刑罰に處せられて、一生埋木で終るに至つたかも知れなかつた、然るを忍ぶべきを忍んだ若き高島、遂に躍進して大臣の椅子を占めるを得て、彼は往時を追懐し、彼の時の辛抱こそ今日あるを得た賜物であると、會ふ人毎に物語つたさうだ。

伯爵 陸奥宗光

剃刀大臣と謳はれ、典型的の外相と譽められる陸奥宗光は、立派な人物を父として高い門閥家に生れながら、不幸にして奸佞の徒に陥れられ一家零落の悲運に會し、一家の再興と復讐の念に燃えて、東都に上りし以來の放蕩流離、時には女郎の間夫となり、或は乞食姿の浮浪者となり、其青年時代の私生活は、實に多種多様であつた、然も彼の機智と才幹とは、遂に自ら登龍門を開いて、浮沈多き公生活に、怪腕を縦横に振つた近代稀に見る大政治家である、彼は一度び農商務大臣となり、終に多年の宿望たる外相の椅子に就いた。

高い門閥と偉い父君

陸奥家の家系を尋ねると、彼の講談や義太夫でお馴染の伊達騒動、原田甲斐を使つて本家の五十四郡を横領せんと企てた伊達兵部少輔といふのが先祖であるが、其後仔細あつて紀州家の客分となり、それが年月の経つに従ひ、何時か流れ込んで紀州家の臣となつたのである、宗光の父は宗廣と申し、膽斗の如き人物で、博く和漢の學に長じ、殊に深く禪を學び、自得と號して實參實究の工夫を凝らし、身心脱落の大禪定に入つたのだ、彼は幾多の迫害に會つても更に動せず、その屈伸は唯一道の禪味を帯びてゐて、正に後進の模範とすべきものが多かつた、鳥尾中將が參禪して得庵と號したのは、宗廣に學ぶところが多かつた爲だといふ、宗廣は若い時から才氣が溢れて、十八歳の時既に扈從から抜けて監察になつた程である、さうして大殿の舜恭院と國家老の山中筑後守との肩入は一方ならず、大殿附の執權職渥美源五郎の女マサといふのを妻に迎へて、出世は見る／＼うちに、勘定吟味役から寺社奉行とまでなつたが、天稟の才氣は愈々光を放つて家臣どもから多少の嫉妬も受けたが、終には己れの及ばざることを悟つ

て、何れも宗廣の前に降伏してしまひ、宗廣は紀州家の一勢力とはなつた。

義に勇んで禍其身に及ぶ

恰度此時十三代將軍家定の繼嗣事件から、水戸齊昭が駒込の邸へ幽閉の身となつてゐるのを和歌山城下の大泉寺の住職から聞き込んで、コハ御三家の一たる水府家の一大事、決して聞棄てならぬとばかり、早速大殿の許しを得て公儀へ願ひ立てた、然るに江戸詰の水野土佐守は之を耳にし、公儀へ取次ぐこと断然拒絶したので、宗廣は躍起となつて東西に奔走した甲斐もなく、遂に土佐の爲に阻まれて其志を成すことが出来なかつた、爾來宗廣は深く土佐守に含むところがあつて、度々衝突をするやうになり、土佐の方でも、假令身分は違つても何となく宗廣が邪魔になつて、此奴今に見ると宗廣を睨む、宗廣は又どうしても土佐を打ち込んでしまはなければ、自分の老へを紀州家に行ふことが出来ない、思ひは双方同じことで、互に其機を窺うてゐるうちに、遂に宗廣は水野の爲に陥れられて、一家離散の悲境に沈むこととなつたのである。

佞者の讒に遭うて幽閉の身

宗廣は辣腕を揮つて紀州家財政整理の難局に當り、着々功を奏して旭日の昇る如き人望を博したが、大殿が不圖した病氣が原因となつて他界され、引續いて國老山中筑後守も逝去したので二人の後楯を失うた宗廣に對し、今まで猜忌嫉妬の念に燃えてゐた奴共は、暗々裡に宗廣の隙を窺ふに至り、一方水野土佐守は、非常な働きを以て十四代將軍を紀州家から出したのに勢力を得てゐたから、宗廣の後援者が逝去したのを機とし、宗廣を貶さうと目論んで、遂に勤王論を入説したといふ事と、紀州家をして町人の爲す如き商賣をさせたといふ缺點を見出して、嘉永五年十二月二十二日公儀より嚴重な沙汰が下り、初めは幕府よりの附家老安藤飛騨守に預けられ、罪科が定まつてからは田邊といふ村へ禁錮された、更に翌六年正月に至つて家は改易、地區を定めて居住させられることになり、一家の者は泣く泣く家屋敷を引拂つて、高野山麓の鯉野村といふ所へ移つたのである。

宗廣は茲に於て昨日に變る今日の有様、世に時めいた大殿の愛臣、寺社奉行まで勤めたもの

が如何に罪過があればとて、疊なれば四枚か五枚、見るもいぶせき破屋すまひ、實に測り難きは人の身の上、されど宗廣は少しも驕がず、唯だ運命の神の弄ぶに任せるばかり、人を怨まず身を嘆たず、唯だ自然の成行に其日を送り、幼き子供を生長を待つ外に餘念もない、養子の五郎は流石に年は長け事理の分別もあることゝて、今度の災禍については憤慨の腕を撫することもあつて、假令父の宗廣に少しの落度はあるにせよ、藩政に對する功勞も亦尠からず、所謂功罪相償ふものなるに、如何に水野土佐が讒すればとて、藩公も餘りに無情なりと、時に當り折に觸れては不平の言葉の漏るゝこともあるのを、宗廣は之を戒めて、唯だ何事も時節と諦めよ、尺蠖の屈するは伸びんが爲なり、我れ年五十を越えしのみ、幸ひ身體も頑健なれば、一生のうち再び宗廣の世の來らんも計り難し、今は人を怨まず自然の運命を楽しめと、口には言へど心のうち、幾多の煩悶に苦しむこともあつたであらう。

春くれど籠にこめられし鶯は

ふる巢戀しと音をや鳴くらむ

行く水の泡とも消えて柵に

かゝれる花や我身なるらむ
宗廣は國學に達し、和歌の道にも暗からず、多くの詠草は世に傳へられて、人の吟誦するもの少くない、此二首は鯉野村藝居の折の思道りとて世に知られたものである。

父を驚かした神童の奇才

宗廣の六男に牛麿といふのがあつた末の子の愛は一層兄や妹にもまさつて、父母の寵愛一方でない、ところが牛麿は幼い時から病氣勝ちで、幾度か父母の胸を痛めさせ、段々と生長するに従つても蒲柳の質で、全く事に堪へない身であつたが、氣象は人並すぐれて物に屈せぬ勝気で子供に稀なる度胸もある、義兄の五郎も之れには時々苦しめられたこともあつたから、若し幸ひにして生命さへ長ければ、必ず伊達家の家名も興すであらうと、父母は勿論、藩臣のうちでも多少事理に通ずる人達は、牛麿の將來に望みをつながないものはなかつた、宜なる哉、この牛麿こそ後年の陸奥宗光である、外務大臣として一代の奇才を現はし、外相の典型として今の今まで言ひ囁される彼の前身牛麿は、復讐の念に強き性質で、父や兄の話を聞くたびに遺

恨の涙やるせなく、何とかして此怨み一度は酬いてやりたいものと、寝ても覺めてもそればかりだつた、時に年甫めて九歳。
宗廣も牛麿を見ること尋常の兒童とは異なるものがあつた、前年紀州藩に勢力を振うてゐた時のこと、宗廣が江戸へ出府するので牛麿を伴れて行つた、江戸の邸へ着いてからは、自分は藩用で忙しく、却々江戸見物などに伴れて歩くことは出来ないで、外出は牛麿の自由に任せてあつた、牛麿は根氣よく出て歩く、朝出れば必ず晩になつて歸る、何時出ても晩でなければ歸つて来ない、宗廣も不思議に思つて、或日のこと牛麿を對手に「お前は此頃よく出かけるようぢやが全體何處へ行くのか」浅草へ参ります「ナニ浅草ツ……さう毎日浅草でもあるまい」「いゝえ他へは参りません」「ハア、何か珍しいものでもあるのか」「別に珍しいものはありませんが、觀音様の境内へ参ります」「觀音へ日参か」「はい」宗廣は之を聞いて少しく呆れた、子供の癖に今から神や佛と騒ぐのは困つたものだと思つて「何を頼みにゆくのか、御利益があるのか」「いゝえ、そんなことで行くのではありません」「それぢや何の爲に行くのだ」「はい、駈ける稽古に参ります」との意外の答に「駈ける稽古、フーム、そりや何ういふわけか」

「父上……私は何の不幸か生れついでに病身、武藝の稽古も思ふやうには参りませぬ、此儘ではとても他人と試合などは出来ませぬ、他人を斬ることが出来なければ、せめて斬られぬ工夫でもと思つて、あの人通りの劇しい觀世音の境内を、人に突き當らぬやう、抜けつ潜りつ駈け出す稽古をして居ります、それさへ出来れば如何な難場も通けられますといふ考へでござります」

宗廣は驚いた、この小僧なかく味なことを言ふ、將來恐るべきものだと思ひ、心切に喜んだ、何と面白いではないか、斬ることが出来ない、と云つて斬られては困る、だから逃げ出す稽古をするのだとは、普通の子供には無いことだ、後の宗光なるものは又格別のところがある、此方がいけなければ彼方へ行く、表からでも裏からでも、どつちでも臨機で行くといふ、その應變の才は蓋し此時から發露されて居たものだ。

一家再興に幼心を勞す

或日のこと、鯉野村のあばら屋へ一人の男が訪ねて來た、これは大和五條の書肆で、宗廣に

和歌を教はつたり、又その周旋で和歌山城下に大分得意も出來、年に一二回は商用で必ず出て來るのだが、今度來て見ると宗廣の零落の一件を耳にし、屹驚して遙々此處まで訪ねて來たのである、恰度其時兩親は不在だったので、牛麿は其男に向つて、水野土佐の奸策から今日の如き哀れ果敢なき境遇にあることを物語り、實に無念で堪らないから、屹度この怨みを酬いてやるんだと憤慨した、書肆の久吉はつくづくと牛麿の顔や様子を見てみると、すべての態度が子供らしくない、青白い長い顔で、然も眼光の鋭いことは、どうも普通の伶俐といふだけとは思はれない、こんな有様で此子供を埋めて置くのは實に惜しい、と言つて何うすることも出來ないが、せめて何とか世の中へ出る工夫もがなと、面白い氣象の久吉は頻りに思案に耽つて居たが大和の五條は天領で、代官もえらい威勢であり、徳川家でも紀州藩でも手の付けやうのない有様だから、その代官へ頼んで何とか出世の手廻を捜しませうと云つた、其時宗廣夫婦が歸つて來たので話を外らし、浮世の雑談に移つてやがて久吉は辭し去つた、それから牛麿は幾度か考へたり、又思ひ返しても見たり、數日の後漸く決心して、先づ大和の五條に走り、代官に頼んで、家の再興、また水野への復讐、假令出來ぬまでも一ツやつてみよう、一夜寝に兩親の目

を忍んで大和の五條へと走つたのである。

牛麿の考へでは、先づ五條の代官邸へ住み込んで、どうかして代官になつて、それから復讐をと、うまい考へをしたのだが、さて代官邸へ住み込むだけは久吉の骨折で出来たものゝその代官といふのが頗るの没分曉漢の方で、到底牛麿の目的を果し得られるやうな見込みがつかない、殊に負けきらひの勝氣の牛麿には、こんな所で辛抱の出来る筈はない、そこへ父からはわざ／＼使者を立てゝの迎へに、これ幸ひと牛麿は再び鯉野村へ歸つて来た、宗廣は其時何も言はなかつたが、母からは懇々と諭されて牛麿は一言もなく恐れ入つてしまつた。

放蕩の果てが破門の憂目

月日に關守なく、牛麿も元服をして小二郎と改名し、一人前の武士となつたので、唯だ空しく両親の膝下で日を送ることは好むところでない、今度は公然打明けて、江戸表へ修業に出かけることの許しを受け、吉日を選んで發足し無事江戸に着いたが、多少の貯金のあるうちは各所の見物に日を送り、やがて身の振方や前途のことを考へて、先づ學問を修めようとの覺悟を

したが、さて誰を師としたのが好いか薩張り見當がつかない、段々他人の評判を聞いて、終に安井息軒にしようとした、息軒は氣魄のあつた學者で、碌々として徒らに章句の末に泥み、文字を漁るのみの死學者ではない、彼の雲井龍雄の如きも其門から出たのである、小二郎が師として息軒を選んだのは、實に能く其人を得たものと言つてよろしい。

息軒先生は小二郎が負けじ魂で、根氣が強く、その上に議論すきの奇才縦横、眞に壯快な氣風の持主であるのを夙くも看取し、この小僧却々面白い奴だと、大に氣を入れて教へる、從つて文字以外の教訓も多く、小二郎は間もなく安井塾の名物男となつた、初めのうちは父から少しづつ送つてくれる金でやつてゐたが、暫く経つとそれも送つて來なくなつて、小遣にも困るやうになつたので、内々筆耕をやつたり、町家に出稽古を始めたが、それでも足りない青春と自樂が手傳つて、小二郎は先生の眼を偷んで道樂を始めた、吉原通ひが大分劇しくなつてくる、無理な算段もすれば友人に迷惑をかけるやうになつた、息軒が餘り小二郎を可愛がるので、他の者はどうも癪にさはつて堪らない處へ、此頃の様子を見て大喜び、早速先生に訴へて小二郎の不埒の限りを告げた、非常に嚴格な息軒は、初めは左程に信じなかつたが、他の者

の騒ぎがひどいので、打棄つて置けば塾の風紀にも關するところから、或日小二郎を呼んで

「お前に尋ねることがある、隠しては不可ん、お前は吉原へ通ふといふが眞正か」

「はい、参ります」

先生も之れには驚いた、何とか辭柄を設けて言ひぬけをするだらうと思つたのに、はい参りますとは案外な返答だ。

「フーム、ゆくのだな、相弟子の衣類や書物を典物したといふのは何うか」

「金につまつて……それに違ひありません」

先生は嘆息した、もう致方がない、此上は救ふ道はない、まだ此の外に悪いことがある、しかしそれは最早聞くに及ばぬ、放逐の外はない、されど何等悪びれた振舞もなく、男らしくスラリと言つて退けた其態度、其氣象は寧ろ愛すべきだとは言へ、多くの門人の手前、それを赦すことは出来ない。

「小二郎、改めて申渡す、今日限り退塾しろッ」

「ハイ、承知いたしました、永々御厄介に相成りました」

何とかお詫びでもするかと思つた息軒先生、全く張合拔がしてしまつた。小二郎は仕度をして再び先生の前へ来て「それではお暇を……」よろしい、引取りなさい、差當り困るだらうから之を興へる」と紙包を投げた、小二郎は一禮して懐中に入れた、息軒は別れに臨んで、

「お前の父は紀州の名物男、お前は其子ぢや、父の名を辱かしめないやうにきなさい」

と唯だ一言、小二郎は黙禮して立つて行く、先生は其後姿を見送つて「どうしても普通の奴ぢやないわい」

乞食姿で外科醫に強談判

息軒の塾を追はれた小二郎は、何處へ行かうとの目的もない、息軒に貰つた紙包を開けて見ると金はいつてゐる、先づ是れのあるうちは生命には別條ないと、毎日遊んで暮してゐた、何しろ物價の安い時分であつたから、恵みの金は多くはなかつたけれども、相當に遣ひばえがあつた、ところが是れも終に遣ひ盡して、三日や四日は何とか工夫もつたが、今は早や何うすることも出来なくなつて、苦し紛れの考へから、父の縁故を辿つて、芝の二本榎にあつた高

野山出張所へ尋ねて行き、無理づくめに住み込んだ。さア斯うなると拭掃除から使ひ走りもさせられる、喰ふだけは差支へないが、着るのに不足する、無論小遣にも困る、それに元來が他人の寄合ひだから堪らない、出て行けと言はぬばかりの處置も見えて、勝氣の小二郎に堪へ得られる道理がない、到頭一ヶ月餘りで其處を飛び出してしまった。

それから諸所を放浪した果が、終に宿るべき家もなく、喰ふべき物もないといふ仕儀で、身についたものを賣り喰ひして日を送つたが、それも何時しか盡きて、あはれ今は見る影もない乞食姿となつてしまつた、おまけに弱り目に祟り目とやら、安物を買つた酬いの腫出物が酷くなつて来て、終には全身腫物微苔が岩のやうになり、その痛みと臭いには自分ながら閉口するくらゐ、況して他人は鼻を掴んで通り過ぎる、腹は空るし、痛さは痛し、さなきだに瘦せた身體の上に此苦痛に憊まされて、まるで汚い幽霊のやうな有様になつて、毎日市中をブラ／＼して居る、父の舊友を頼つて行けば何とかなるだらうが、假令餓死すればとて此姿ではそんなことは仕たくない、流石に剛情我慢なところもある。

或日やつて来たのが神田お玉ヶ池の花岡といふ外科醫の門前、疲勞と痛みに堪へかねてホツ

と呼吸を吐いた、見れば門の側に天水桶があるので、その蔭にピタリと坐り込んで足を投げ出し、扉に寄りかゝりながらグタリツと首を俛垂れて、ウト／＼寝入つてしまつた、之れを見た花岡の下男は、此乞食を追拂はうとしたが却々退かない、そこで手に持つた箒の柄でグイと突いた、この仕打に憤つた小二郎は、いきなり玄關へ飛込んで敷臺に坐り込み、間もなく外から歸つて来た花岡醫師に強談した、花岡も此奴普通物でないと見て取つて、快く病室へ入れ親身のやうに世話をしてくれた、元來が疥癬のやうなものだつたから、手當が行き届けばズン／＼癒つて行く、三十日餘りで全快した小二郎は、品格もあれば威厳もあり、言語といひ態度といひ、普通のものとは全然違ふ、花岡は唯だ不思議な人と思ふばかり、更に素性を糺さうともせぬ。

小二郎の艶福ものがたり

さて小二郎は病氣全快したが、何處といつて行く目的もなければ食ふ手だてもない、そこで花岡醫師に頼んで病人看護の役を引受け、三名の老看護婦の取締といつたやうな格で、此家に

御輿を据ゑたところが、自分が長く患つてゐた經驗から、病人に對する思ひやりも深く、名は初めから小助と云つてゐたので、小助さん〜と病人に重寶がられてゐる、大體花岡醫院は病人といつても婦人が多く、男は大抵斷つてしまふ、婦人も吉原あたりのものが多かつた、その中に吉原甲子樓の遊女で歌川といふのがあつて、彼女は深く素性を包み隠して冗談ばかり言つてゐるが、その冗談が皆上品であつて、多少文字もあるらしく、行儀作法も却々立派なもの、閉花羞月とまではゆかないが、眼に愛嬌のある十人並以上の代物、小助がチヨイ〜見舞に來るので自然懇意になる、歌川はいろ〜世話になるからと、小助に禮心の金を呉れる、小助も何となく懐かしいやうな氣がする、遂に二人は他人の目にもつくやうな陸しい仲となつた、そのうちに歌川の病氣も癒つて樓主の方から迎へが來た、歌川は別れを惜しんで、懷中から何か書いたものを出して、「こんなものが出來ました、御覽下さい」といふ、手に取つて見ると、

花の咲くのも實の結ぶのも

雪や嵐の苦の世界

歌川は迎への轎に乗つて擔がれて行く、後に小助は掌中の珠を奪はれたやうな心持、朝に夕

に文の佛が眼にチラついて、彼は到頭戀の奴とはなつた。
二三日経つと吉原から小助の小二郎を迎へる轎が來た、小二郎は胸をドキつかせながら吉原へ乗込み、二人の戀は茲に愈々成立した、爾來小二郎は歌川の切なる戀に引き付けられて、夜毎に通ふ土手八丁、歌川は身上りの重なるにつれて借金の淵に沈んでしまひ、二進も三進もゆかなくなつたので、或夜小二郎に向つて、どうかあなたの素性を明かしてくれ、さうして及ばぬものなら今のうち寧ろ諦めますとの血に泣く願ひ、木石ならぬ小二郎は膝を正して、家系のことから今の一家の有様、さては自分の境遇を具に打明けた、それを聞いた歌川は、身分の違ふ此戀は所詮末遂げられぬと斷念して、眞に腸を斷られる思ひで小二郎と縁を切ることにした。

女郎の情けて二十兩の旅費

一三日も流連した揚句、互に盡きせぬ名残を惜しんで、惚れた同志がブツツリ縁を切つた、小二郎は、お玉ヶ池に歸つて來たが、如何に何でも少しはきまりが悪い、ソツと自分の部屋に

入つてゴロリ横になつてゐると、留守中に國許から飛脚が来たとして渡された手紙、取る手遅しと開封すれば、父宗廣が赦免の御沙汰を蒙つたとの文面、小二郎は雀躍して大喜び、一時も早く歸國すること決心したが、さて第一に困るのは金だ、紀州まで短くもない旅の道程、國へ歸つたとて長い間の父の苦しみ、貯へのある筈はなし、多少の餘裕がなければ何も出来ない、ハテ何うしたものだらうかと、これには小二郎も當惑した、ところが其日の晝頃になると、歌川から使ひが来たので、會うて見ると吉原で馴染のお茶屋の女中である「あの……花魁から宜しく」と言つて差出す手紙を披くと、昨夜の別れのつらさから、楽しみもない此の行く先きの果敢なさを書きつらね、だん／＼つまつた果の自分の身として、纏つた金の出来ないことから、僅に二十兩だけ送るから、それで堪忍して一日も早く國許へ歸り、立派に身を立て、くれとのこと、逢へば思ひの種だから寧ろ逢ひたくないとのこと、行末長く妾のことを忘れずに居てくれ、妾も亦どんな身體に變りがあうらとも、あなたのことは一生忘れない、よし便りはなくも忘れずにくれれば、それで妾は満足することをお知らせし、潔白と書いてあるが、涙の痕は紙の上に鮮かに見えてゐた。

使ひの女中に祝儀を與へ、歌川へは返事を認めて使ひを歸へし、さアこれから旅の支度、花岡醫師にも厚く禮を述べて再會を約し、茲に目出度江戸表を出發に及び、左の一絶を賦して自らその行を壯にした。

朝誦暮吟十五年 飄身漂泊似難船

他時爭得生鵬翼 一舉排雲翔九天

少しく餘談に涉るが、後年陸奥宗光が刑部省判事に任ぜられて上京した時、一日大藏大輔伊藤博文と共に、白馬銀鞍に鞭つて吉原の女郎屋の立退先の深川假宅へ乗り込み、歌川を訪ねて懐舊談に花を咲かせ、さうして歌川を身受して、陸奥が改めての媒介人となり、かねて馴染の男と夫婦にしてやつた、其後彼夫婦は日本橋區で木綿問屋を営み、數十萬圓の富を有して、歌川は樂隠居で一生を終つたといふ。

坂本龍馬の知遇を得た

さて小二郎は夢の名残の江戸を立ち、心も急げば道もはかどり、二日目には箱根の坂へかゝ

つた扱しも、關所の方から一臺の早轎、ヒヨイツと其轎を見ると、薩藩士中村庄兵衛と筆太に書いた札が、どうも見覚えのある義兄五郎の筆跡にそっくりなので、若やそれかと進み寄る、果して轎の中の武士は兄の五郎であつた、五郎は不思議の邂逅を喜んで、こゝで父宗廣が赦免の事情を語り、勤王攘夷論で京都の有様の切迫せることや、諸藩の形勢、今や將軍家茂の上洛で内外最も多事の時であると、事落ちもなく物語る、小二郎は大に喜んで「時節到来、時節到来、これからは吾等の世の中、これでお別れいたし、粟田口へかけつけて父上のお手扶けをいたさうと兄と弟は西と東に杖を別つた。

赦免の御沙汰を蒙つて、再び活動の機会を與へられた宗廣は、京都に出て粟田口に居を構へ京攝の間を往來して東西の志士と交つた、五郎の江戸表へ急いだのも矢張り同志の委嘱を受けて、江戸の様子を探るためであつたのだ、斯くて五郎の便りを待つてゐるところへ、思ひがけなく小二郎が歸つて来たので、これには流石に驚いたが、最愛の小二郎が立派な武士になつたのを見て、坐ろに喜びに堪へず、追々同志に紹介するうちに、この小二郎を見て、これこそ有爲の青年なりと、はやくも其爲人に着眼したのが、土州の俊傑坂本龍馬であつた。

神戸の海軍操練局に入る

小二郎は才智の卓絶れた男であるから、尋常の浪士とは大に其撰を異にするところがある、妄に腕を振し刀の柄を叩いて、慷慨悲憤するやうな眞似はしない、その代り、諄々として説き懇々として談するの風があつた、それが却つて同輩には餘り喜ばれない、殊に血氣に逸る武士には憎まれる原因となつたのである、小二郎には腕力が無い、刀を帯してゐるが餘り強くないけれども剛情で、霸氣もあれば膽力もある、従つて却々負けては居らぬ、時に依ると刀の柄を握つて自説を頑守することもある、それ等の事が原因となつて追々同志に憎まれて来る、「何の生意氣な、斬り捨てるツ」といふやうな聲が段々高まつて来る、獨り其間にあつて調停の任に當り、常に感情の融和に努めてゐたのが坂本龍馬であつた、或時は小二郎と對坐で意見もして見たが、それも聞いてゐる時だけで、毫も改める様子がない、このまゝに打捨て置く時は、可惜有爲の材を失ふことになる、龍馬は頗る苦心した末に、不圖思ひついたのは、熊本の横井小楠が今は越前の松平春嶽に招かれて、顧問として仕へてゐるから、この横井に暫く預けよ

う、それには幸ひ越前家の家老岡部造酒之助と知己であるからと、一日岡部の邸を訪うて此事を話し、岡部も快く承諾してくれたので、取敢ず小二郎は岡部の邸に起居することゝなつた、然るに偶々越前の藩論が一變し、横井は中根雪江等と共に斥けられたる有様に、小二郎の越前行も中止の姿となつて、彼は復たも坂本の紹介で勝安芳に面會し、神戸操練局に入つたのである。

難を避けて伏見に隠る

神戸の海軍操練局といふのは、勝海舟が米國から歸ると、國防の忽にすべからざるを見て、幕府に建議して創立されたもので、勝は其局長として幕臣を集めて海軍の事を教へた、従つて幕府の反對の者などは決して足踏の出来る所ではないのだ、然るに襟度の廣潤な勝は、そんなことに頓着せず、人材を造るのが唯一の目的であつて、直參でも陪臣でも、佐幕黨でも勤王黨でも、毫も意に介せずして喜び迎へたので、操練局は浪人志士吳越同舟の觀を呈してゐた、小二郎は此處へ入つてから、彼の生涯に一轉化を示すに至り、攘夷の無謀にして到底行ふべからざる事を學ぶと同時に海外の新知見に觸れて大に得るところがあつた、然るに幾何もなくして、勝海舟の平等無私なる態度が却つて禍をなし、幕府の忌諱に觸れて江戸に召喚された、さうして操練局も従つて倒れたのである。

文久が元治と改まつて、局面は益々險惡となり、薩長兩藩の嫉視から、端なくも九門の變を惹き起し、長州が一敗して朝敵の名を負ひ、長藩に加擔したところの浪人志士は、幕府に捕へられて嚴罰に處せられたもの頗る多く、従つて事情によつては藩主にまでも罪科が及ぶとの噂に、各藩の恐慌甚だしく、土州の山内家でも坂本龍馬以下の藩臣に歸國を命じた、坂本は不服で此命に應じない、そして愈々脱藩と腹をきめた、小二郎も此騒ぎに捲き込まれて目的は多く齟齬し、師とも兄とも頼む坂本は脱藩する、自分は殊に紀州藩と幕府との關係上、どんな嚴命に接するかも知れないから、暫く身を潜めて機會を待たうと、密に京都を抜け出して、これといふ目的はないけれど、伏見の町へ入つて來た。

博徒の娘とうれしい仲

其頃伏見の町に、いろはと言ふ大親分があつた、乾兒の數百人ら居て然もそれ等が市中の良民を苦しめるやうなことはなく、善く取締つて義氣に勇んだ俠客肌、京大阪へかけて伏見のいろはといへば、誰知らぬものもないくらの評判男、それが妾の内職に一筆といふ料理屋をさせて居て、貰ひ娘のお喜美と呼ぶ美人があつた、小二郎は姓を中村と變へて、毎日ぬらりくりとやつて居たが、或夜一筆へ一杯飲みに行つて、お喜美の美貌に目をつけると、何時の間にか嬉しい仲となつて、追々と噂に上るやうになつた、すると乾兒の奴等が、親分の娘を疵物にした不屈の野郎だと、小二郎の歸途を要して親分の所へ引張つて来たけれども、親分は怒るところか却つて小二郎の普通ならぬ人物なるを睨んで、どうぞ不束な娘にお目をかけて下さいましと、下から出られて、それが評判の博徒だけに、考へれば氣持も悪いが、度胸の太い小二郎は、これを幸ひとしてヅルヅルに入り込み、京都のことなどは忘れたかのやう、毎日巫山戯散して面白可笑く遊んでゐた。

坂本に招かれて兵庫へ向ふ

土州藩を脱した坂本龍馬は、豫て勝海舟から教へを受けて、海軍思想は非常に發達してゐたので、同志を集めて頻に研究を重ねつゝ、自分を信じて居る松平春嶽に對面して、尊王の大義を吹込む傍、攝海の防備を痛論して、海軍所設立の必要を説いた、そこで春嶽は坂本の説を容れて幕府を説き、勝海舟も躍起となつて之を促したので、實行の運びは意外に早く、大阪の宇治川口に假塾を設け、兵庫に海軍所を造ることとなつて、勝は海軍奉行に任せられ安房守となる、坂本は之に機會を得て、危きを冒し歸藩すると、山内家の參政小楠を説いて、遂に此計畫に同意せしめ、脱藩の一條は自然そのまゝの態、阪地に引返して生徒の募集に取掛り、小二郎には飛脚を立て、呼び迎へた。

坂本からの急使が持つて来た書面を見ると、小二郎は枯木に花の咲いた心地して、今は女のことなど彼是して居る時ではない、然しいろはは事理の解つた男だから、これだけには多少何か漏らしてゆかねば善くあるまいと、親分に會つて、海軍所の出来ることから、坂本との關係まで話して、いづれ折を見て迎へに来るから、それまでお喜美を預つて置いてくれと頼むと、いろはは之を聞いて非常に喜び、娘のことなどは決して御心配に及ばぬ、却つて本人には何と

も話さないでお立ちなさいと言ふ、小二郎も其方が勝手がよいので、萬事親分に託して、急ぎ兵庫へと向つた。

些細の事から海軍所解散

坂本は小二郎の来るのを待つてゐた、自分は京阪の間を往來して、兵庫には居らない時が多い、誰か相當な者を代理に置かねば取締がつかぬ、それには小二郎が最適任者であると信じて彼を呼び迎へたのであつた、それから海軍所は追々盛んになつて來たが、幕府の方から見ると恰も浪人の隠家のやうな海軍所は、一敵國が生じた如き感じがして、他日の害をなすものゝやうに思はれる、と言つて理由もなく取潰しでもすれば却つて面倒を惹き起さう、何か好い機會はないかと覗つてゐると、茲に一問題が持上つた、それは外人から頻に軍用品を買込む者が所内にあるとの風説、能く能く取調べて見ると、海軍所の高松といふ生徒が、多數の毛布を外人から買込んだのであつた、さア打捨て置けない、許可を得ずして妄に外人と取引をする、殊に海軍所の生徒が斯ることをするとは、將來の不爲でもあり、かたぐい嚴重に處分した方が宜か

らうと言ふことになつた。

此秘密を聞いた小二郎は、高松に身邊の危きを話してやつた、すると高松はこんな事でムザ／＼幕府の手にかゝるのも馬鹿らしい、何としたものか一ツ智慧を貸してくれと云ふ、小二郎は、折柄坂本は不在だから海舟先生に相談して見ると教へた、勝は高松を薩摩の屋敷へ潜めと示した、その跡で幕史が出張したが高松は居らぬ、いくら詮索しても其甲斐がなかつたので、奉行の勝は益々深い嫌疑を受けて、海軍所は解散を命ぜられ、勝は江戸へ召返された、斯うなつては坂本も退くにも退かれず、小二郎を始め残る生徒を引連れて長崎へ渡つた、世に名高き海援隊の嚆矢は即ち是れだ。

龍馬の股肱となつて働く

當時の長崎は恰も諸士の梁山泊の如き觀があつて、各藩の浪士は多く此地へ集つて來てワイ／＼やつて居た、大隈重信や、副島種臣や、伊藤博文なども皆出入して居たが、坂本龍馬は後れ走せにやつて來て、龜山なる陶器製造所へ塾を設け、人材を收攬するに努めたが、坂本が京

阪で養うた勢力と、小二郎等の盡力とで漸次に多くの塾生を得、終に規則を設け、隊制を整へた、塾とは言ふやうなもの、その實は有志の通れ来る者の隠匿所としたのである、其傍海軍思想の養成に努めて、之を海援隊と稱し、隊長は無限の権力を有し、隊士に對する生殺の權を握つてゐる、その盟約の一節に左の如き簡條があつた。

凡て隊中の事一切隊長の處分に任ず、敢て或は違反すること勿れ。

若し亂暴事を破り、謬妄害を引くに至つては、隊長其死活を制す。

隊中難難相救ひ困厄相護り、義氣相責め修理相糺し、若くは獨斷過激僥倖の妨げを爲し、若

くは僥倖相擠し勢に乗じて他人の妨げをなす等、これ尤も慎むべき所、敢て或は犯す勿れ。

何と嚴格なものでないか、それから隊士たるべきものは、本藩及び他藩を脱するもの又は海

外に志あるものと規定された、公然脱藩の武士を收容すると聲言したものは、恐らく此外に

はあるまい、隊の目的とするところは、運輸、財利、開拓、投機に在りとしてある、財利に恬

淡たりし當代の武士が、かくも麗々しく金儲けを標榜した規定を掲げるとは、普通の武士には

出来ぬ藝當で、坂本なればこそ斯んな飛び放れた事がやれるのだ、而して之を扶けて片棒擔

ぐのが小二郎其人であつた。

父兄幽閉の報に切齒扼腕

さて元治は暮れて慶應元年となつた、幕府と長州藩の對抗は依然として態態を改めない、而して遂に征長の師を起すこととなつたが、此時幕府の權威既に地に落ちて、征長總督の任を承ける者が無い、紀州家に此命が下ると、藩主は早速御免蒙つた、それは藩中勤王家の人々が抗議をした結果で、小二郎の父宗廣の如きも現にその一人であり、養子の五郎は父の意を享けて、盛んに征長の非を鳴らしたものだ、父子は藩の重役を説き廻るのみならず、諸侯の重臣や有志にも入説したので、終に幕府の忌むところとなり、他方に於ては紀藩でも熱心な佐幕派は伊達父子を憎むこと甚だしく、問題が漸々やかましくなつて来て、遂には伊達父子は京都から國許へ呼戻され、嚴重な調べを受けて、五郎は和歌山に於て禁錮され、父の宗廣は親類預けとなつた、さうして紀州侯は征長總督の任を受けて、紛紜は落着いた。

宗廣が此幽居中にあつて作つた幽居五十首といふ中に、こんな歌があつた。

咲くも又散るも春雨春の風

まかせて花は安けかりけり

はてもなく限りを知らぬ大空を

心となして月を見るかな

小二郎は此時長崎に在つて幸にも此災厄を免れたが、この報知を得た時には、満身の血湧くが如く、思はず拳を握つて、おのれ徳川幕府、今にぞ思ひ知らせて呉れん、父兄の仇は吾れ誓つて之に當るべしと、切齒扼腕、遙に東の空を睨んで、熱涙を呑んだと云ふ。

小二郎の壯龍馬の襟度

長崎時代の小二郎は、血氣盛んにして覇氣に富み、剛壯人に下らずといふ有様であつたから番に同僚との圓滿を缺いたのみならず、隊長坂本に對してすら毫も辟易しなかつた、時恰も土州藩の参政であつた後藤象二郎が、藩主容堂の命によつて長崎へ一つの商會を起した、これには莫大の金をかけて、一切の切盛を後藤に任せてあつたので、後藤が長崎に於ける勢力は非常

なものであつた、當時海援隊では段々金が乏しくなつて、其維持に困難を感じて來たので、融通の利く後藤を説きつけて、遂に公然山内家の扶助を受けるといふ交渉が纏つた。坂本は海援隊に資金の心配がないことになつたの喜んで、隊へ歸ると重立つたものを集めて此事を打明け、各自異議があるか無いかを確めた、誰しも異議のあらう筈はなく、皆同意の旨を答へたが、小二郎唯一人黙然として腕を拱んでゐる、坂本が、お手前の御意見はと尋ねると、

「別に意見としては御座らぬが御尋ねに任せて伺ひ置きたいのは、今日までの海援隊は、先生御指揮の下に天下の海援隊で御座つたが、山内家の扶助を受けることになると、土佐の海援隊になるので御座るな」

流石の坂本もギヤフンとまゐつて、グウの音も出ない、一座の者は激昂して、伊達斬るべしと騒ぎ立てたが、後藤は之を慰め、坂本は之を制して僅に事なきを得た、龍馬は小二郎を見るの明があつて、常に之を庇護し掖勵するに努め、小二郎は坂本を欽仰すること一方ならぬものがあつたので、こんな痛罵を言ひ得たのであらうし、坂本も一笑に附し去つたのである、兩雄

の面目躍如として、恰も眼前に見るが如き心地がするではないか。

活躍の本舞臺は開かれた

かゝる間に坂本龍馬や中岡慎太郎が死生を賭して奔走盡力した薩長兩藩の聯合が出来て、革命の機運は十分に熟して来たので、坂本は京都の形勢急なるを見、長崎から上洛の途に就いた、そこで小二郎は隊長の庇護なき有様となつて、豪傑揃ひの海援隊中に在つては危険極まるものがあつた、といふのは元來小二郎は多辯の方で、議論は随分ひどくやる質である、さうして荷も事を論ずるに當つては、一歩も假借するところなく、嚴として追窮するので、それが妙に人の氣を損じて居た、それで親友の中島信行が小二郎の爲に心配して、難を避くべく坂本の後を追うて、京都に上れと切に勸告した。

されど悲しい哉、小二郎の上京は遅かつた、彼が長崎の危地を脱して兵庫へ着いた時、坂本と中岡の兩雄は、京都油屋の客舎で、新選組の刺客に殺された、兵庫の同志の家で此遭難を始めて聞いた小二郎は、杖とも柱とも頼める先輩を失うて、暫くは開いた口も塞がらなかつた

が、まづ兎も角京都までと道を急いでやつて行く、而して坂本は殺されても、天下の大勢は既に定まつて、大政奉還、王政復古の活劇は、豫期の如く着々として進み、斯くして維新の幕は茲に開かれた。

伊達小二郎は其姓名を陸奥陽之助と改め、これより愈々彼が活動の本舞臺に上つた、時に年有、二十三。

好機を捉へて登龍門を開く

王政維新の大號令は出た、陸奥陽之助の怨み重なる幕府は倒れた、是に於てか彼の創設的抱負経論は、其鋒鋦を露はす事となつた、これより先、我國政の紛糾錯雜せるに乗じ、佛國公使ロセスは言辭を巧にして幕府に取り入り、軍資金を支給して力を添へんとしたので、四面楚歌の状態にあつた幕府は喜んで之に頼つた、當時海外の事情に心を潜めて研究しつゝあつたものは、おほろけながらも英佛の關係を知つて居たので、陸奥は之を耳にするや否や、好機逸すべからずとなし、急ぎ神戸へ行つて英國公使館を訪ひ、書記官サト一の紹介でパークス公使

に面會し、事情を開陳して朝廷を援助せんことを請うた、英公使と薩藩との間には既に氣脈が通じて居つたのみならず、英國と佛國とは歐洲に於て甚だしく反目しつゝあつた際とて、英公使は快く陸奥の頼みを容れて、勤王派との聯絡を謀り、一臂の力を與へようと申出た、陸奥は我が事成れりと心中窃に誇りつゝ、京都へ行つて岩倉具視に面會し、委細を物語つて自己の抱負を述べた、才氣煥發、雄辯滔々、中外の形勢を説くこと掌を指すが如しで、岩倉は痛く其才を愛し、多く其説を採用する事となつた、勿論、其説いたところは大概パークスやサトーの受賣に過ぎなかつたのだが、陸奥が機を見るの敏なる、忽ち自ら登龍門を開いたのであつた。

間もなく、岩倉卿に召出された陽之助は、長藩の伊藤博文、薩州の寺島宗則と同時に、一躍して外國事務局御用掛に任ぜられた、彼は紀州藩に容れられずして、坂本龍馬の庇護の下に、土佐藩の笠をつ冠て來た生命知らずの、海援隊士伊達小二郎は、斯の如くにして早くも維新政府の一員に拔擢された。

子爵 曾 禰 荒 助

長州に生れて長州の天下に出世した組の一人で、明治二十三年には初期の衆議院書記官長として大に巾を利かせ、三十一年には第三次伊藤内閣の司法大臣となつたのが始まりで、山縣内閣の農商務大臣となり、三十四年桂内閣の大藏大臣となつて、外務大臣を兼ねたり、逓信大臣を兼ねたりした、次で伊藤公が韓國統監を辭するに當り、其後を承けて統監となつたが、在任中病の爲に有望の前途を棄て、他界したのは、前途大に惜むべきであつた。

洋行中の笑劇鰻掬ひの巻

曾禰は舊山口の藩士で、嘉永二年一月長州萩の城下に生れた、幼時藩の學校に學び、長ずるに及んで藩公に仕へた、明治元年には降服兵取締役を命ぜられ、尋で御親兵中隊司令などといふ役を勤めたが、五年には兵學寮に入學した、これが因で佛國留學の恩命に接して渡佛したが、其留學中に面白い逸話をのこした。

或日巴里の市中を散歩してゐると、とある魚屋の店先に、澤山の鰻をバケツの中に入れてあ

るのが目についた、豫て鰻が大好物の荒助さん、故郷の蒲焼の味を思ひ出し、急に食べたくなつて涎が出て来た、値段を聞いて見ると馬鹿に安いので、早速五六匹買つて持合せの紙袋に入れ、折から通り合はせた乗合馬車に飛び乗つたまではよかつたが、やがて下宿屋近くで馬車から降りた途端、どうした拍子か横ざまに轉んだ、片手に持つてゐた紙袋は、水氣で濕つてゐたから堪らない、パツと破れると同時に鰻はニョロ／＼這ひ出した、奴さん慌てて捕まへようとしたが、なか／＼捕らない、往來の人は面白半分に見てゐる、詮方盡きて彼は帽子を脱ぐと、鰻を掻き集めて其中へ入れた、やつとの事で下宿屋へ歸り、久し振りで好きな鰻は食へたものゝ二三日前二十五法を奮發して新調した見えの帽子が、泥によれておまけに腥い臭が高く、とう／＼臺なしにしてしまつたとか。

三たび大臣となり遂に統監

會禰は歸朝後外務省の役人になつて居たが、明治二十三年には初期の衆議院書記官長に擧げられて、大に巾を利かした、言ふ迄もなく伊藤公の推舉によるものだが、三十一年には第三次

伊藤内閣に入つて司法大臣となり、大に伊藤の爲に働いた、それから第二次山縣内閣の農商務大臣に任ぜられ、明治三十四年第一次桂内閣の成るに及んで、大藏大臣となり外相と遞相とを兼任した、それから伊藤の後を承けて韓國統監となつた、性頗る大膽で、陰柔にして巧智に長じてゐた人物だけに、將來ある人物として望を囑されてゐたのに、在韓中病を得て遂に起たなかつたのは、朝野の等しく惜むところであつた。

伯爵 伊東巳代治

伊藤博文公の知遇を得て、明治十一年、年齒僅に二十二歳の青年が内務省權少書記官となり、十三年には太政官少書記官より、權大書記官となり、十八年内閣秘書官となつて伊藤總理の黒幕となり、爾來累進して内閣書記官長、農商務大臣の椅子にまで歴昇つた、その以前日清戦争の時全權辦理大臣となり戦後功を以て男爵を賜はり特に華族に列せられた、今は樞密顧問官伯爵伊東巳代治として、何時も政府から鬼門とされてゐる六ヶし屋のお爺さんである。

彼が旗揚の決心と當時の國情

伊東は長崎の生れで、安政四年五月を以て長崎なる通詞の家呱呱の聲を揚けた、幼い時から頗る穎敏で、長ずるに従ひ早くも時勢の推移に心を注ぎ、家父に従うて泰西の學を修めた。當時は米國の水師提督ペルリが浦賀に来て通商を求めた後で、久しく泰平の夢を貪つて居た我が國民は其惰眠より覺めて、歐米の氣風を我が國へも移植せんと心を抱くに至つた、ところが初めは條約締結に民心を失ひ、次ひでは攘夷の聖勅を奉じないで志士の怨を買ひ、三度目には征長の役に失敗して忽ち其威信を失墜したところの、餘命旦夕に迫れる徳川幕府は、遂に人心を統治することが出来ないで、錦旗は高く東風に翻り、三百年來の覇業も茲に奉還の擧となつて、明治維新の大變革は茲に成り立つに至つた、此時に當つて奮然國家の爲に盡瘁し、又は身を千軍萬馬の間に投じた人々は、何れも功成り名遂けて立身出世したのである、此快事を目撃した伊東は、幼な心にも一通詞の伴として名も知れぬ人に使はれ、一生碌々として朽ち果てるのは、男と生れて世に出た甲斐がない、王侯宰相豈種あらんやだ、予も幸にして通詞の家を生れ、どうやら英語も喋れるから、これを資本として一番國を飛び出し、何處でなりと一旗揚げてやらうといふ、健氣な希望を起したのが明治六年、伊東が十七歳の時であつた。

神戸で外人のボーイとなる

伊東は僅かの旅費を懐にして、遙々辿り來つた二百里の長途、神戸に到着すると傳手を求めて、神戸居留地の外人のボーイとなつた、これは伊東の才智の發露したもので、即ち學費を要せずして語學の勉強が出来るからであつた、彼の才略に富めることは此一事に徴しても首肯されるところで、爾來彼は暇ある毎に語學の勉強に専念し、約二年間外人の世話になつて居るうちに、語學の方も餘程出来るやうになつたので、早速そこを飛び出して、今度は電信の技術を稽古したけれども、こんなことは初めから彼の希望ではなし、旁々以て到底長く遣るなぞといふ氣ではなかつた。

方略に任せた小刀細工の報

そこで明治八年、差當り飯にありつく爲にと、伊東は兵庫縣の雇となつた、是れ實に彼が官途に就いた抑々の初めで、時に年正に十九、其折の兵庫縣令は神田孝平といふ人であつたが、

小刀細工にかけては毫も抜目のない伊東は、忽ち縣令の神田に巧く取入つて、段々官等が昇進し、雇から五等譯官となり、遂に一等譯官まで歴上つた、然も其間僅か二年に充たない短日月であつたといふのを聞いても、如何に彼の才略が凡流を超越してゐるかを知らぬであらう然しながら斯る人物が小刀細工は何時までも永續すべき筈はなく、電光一閃、あはれや得意満面の伊東は樹から落ちた猿と同じやうな境遇に陥つたのである。

嘲つた徒輩と嘲られた彼

明治九年、縣令神田は他に轉じて、森岡昌純といふ男が其後任となつて來た、森岡は神田とは大違ひの人物で、率直豪邁の性質であつたから、着任早々縣治改革の第一着手として、吏員の上に大鉞を揮ひ、所謂醜類と目されてゐるものを退治したのである、そこで突然左の如き辭令が伊東の手許へ舞ひ込んだ、その文面に曰く、

御用無之ニ付辭表可差出候事

斯んな突拍子もない辭令は餘り例の無いことで、その由來をばたゞして見れば、森岡縣令は

伊東が従來上級の者を排斥して、自らその後釜に上進した事實を確かめたからである、伊東が上進した魂膽を素破抜いて見れば、即ち一等譯官の彭城昌實と、二等譯官吳來安との二人の支那語通詞の私事を摘發した事と、今一つは外國人と關係の貸金證書に因る事等であつたのだ、尤も此事實は當時の人々が大概知つてゐた故に、彼の免官を聞いて、自業自得だ、好い氣味だ、ざま見ろなどと口々に嘲つたが、何ぞ圖らん、此嘲つた人物は今尙碌々たる徒輩で居る時、嘲られた伊東の方は到頭大臣の椅子にまで昇らうとは……………。

お飯の種に新聞の原稿書き

突然免官の辭令に接して、一時は頗る當惑した伊東は、いろ／＼奔走して就職の途を求めたが、縣廳に於ける彼の小刀細工が禍ひして、敬遠主義で相手にして呉れない、仕方がないから遂て知合ひの神戸の酒商、三ツ村彌兵衛といふ人に頼んで紹介狀を書いて貰つた、それは其當時の工部卿伊藤博文に宛てたもので、伊藤は先に兵庫縣令であつたから、三ツ村とは昵懇の仲であつたのだ、伊東は其紹介狀を命の綱とも出世の掛橋とも頼んで、早速東海道を徒歩旅行、イ

ヤ寧ろ無銭旅行ともいふべき有様で、やつこのこと東京へ着くには着いたが、知己もなければ親類もないことだから、流石萬事に抜目のない伊東も、忽ち足の置き所に當惑してしまつた、ところが不圖思ひ出したのは、是れまで時々くだらぬ投書を朝野新聞に出したことがあるから先づ兎も角も官途へでも就ける間、鼻の下の建立にと同社に暫しが間原稿を寄せて、どうやらかうやら飯にありついて居た、此當時の朝野新聞を讀んだ人は、晨亭といふ名の下に、如何なる記事があつたかを御存知であらう。

巳代治とおみよの周章狼狽

伊東が立志の希望を懐くに至つたについては、頗る面白い逸話がある、明治七八年の頃であつたが、彼が西瀉訥といふ人の宅に世話になつてゐた、この西瀉といふのは随分長らくの間判事を勤めて居た人物で、その名前こそ訥だが、名は實の實ならで、頗るの雄辯家であつた、さうして其頃既に佛蘭西六法くらゐは研究して居つたところの法學者であつた、且つ其氣風も却々好い男であつたから、始終五人や七人の學生を家に置いて世話してやつて居た、伊東も其厄介

組の一人だつたのだ、ところで或日の事、先生は所用あつて外出し、細君も下女を連れて何處へか買物に出かけ、他の書生連も鬼の留守に命の洗濯と皆んな近所へ行つて、家には伊東と今一人おみよといふ一寸澁皮の剝けた仲働とが留守番に當つた、ところで伊東はおみよに向つて「僕も巳代だがお前もミヨだねえ」と先づ冗談の口を切ると、女の方では「イエ同じミヨでも殿方はいづれ御出世をなさるでせうが、仲働なんかしてゐます女のみヨでは、とても仕方がありません」と秋波一瞥、伊東はその後を承けて「さうか、僕にも屹度そんなに出世が出来ようかね、何うだいおみよさん、僕にそんな見込みがあるだらうか」などと、つまらぬ冗談を言ひ合つて居たが、若い男と若い女、末は段々話に實が入つて來た。

すると間もなく主人の西瀉先生が歸つて來て、玄關を開けたが誰も出迎はない、ハテ變だわい、伊東が留守をしてゐる筈だつたがと、訝りながら玄關を通つて奥の方へ行かうとする出會頭に、伊東とおみよの二人が周章出て來てウロ／＼してゐるから、どうしたことかと西瀉が二人を見ると、イヤハヤ笑止千萬、伊東はおみよが細君から洗濯せよと言ひ付かつた下帯を手にしてゐるし、又おみよの方は伊東が西瀉から出して來いと云はれた端書二三枚を手に持つて

キヨロ／＼して居つた、西瀉は餘りの可笑さに堪へかねて思はず噴き出し「折角書いた端書を洗濯すると字が皆んな消えてしまふし、又下帯はボストの口が小さいから這入らないぜ」と笑ふと二人はハツとばかりに顔見合はせて、赤面冷汗、コソ／＼と互に持ち換へて立ち別れた其後仲働のおミヨの方は何うなつたか知らないが、伊東の方は「同じミヨでも殿方のミヨは」と言はれた一言に勵まされて、成程いつまでも燻つてゐるのは不得策だと、性來野心満々たる才物であるから、大に奮發心を煮き起し、そこで一心不亂に勉強をし始めた、そして到頭今日の如き立派な地位に居る人物とはなつた、實に思へば人の出世ほど不可解なものはない。

親分のお陰で見る／＼出世

さて伊東は前に述べた如く兵庫縣廳を追はれて、遙々東京へ遣つて来て十數日経つと、三ツ村から貰つた紹介状をもつて、時の工部卿伊藤博文の邸へ出掛けて行つたが、最初は生憎多用だからとて面會を謝絶せられ、二度目の訪問に面會を許された、伊東は先づ紹介状を差出した上、こゝが一番自分一生の浮沈の岐れる大事の處だと、あらん限りの辯舌を揮つて身の振方を

懇願に及んだ、すると伊藤も少しは見るところがあつたと見えて、宜しい、お前の一身は乃公が引受けた、が、お前は英書が讀めるかいと尋ねられたので、大概のものなら讀めますと答へると、伊藤は其時自分の側にあつた英字新聞を示して「それぢや此處を一ツ翻譯して見たまへ」と言はれて、巳代治は一生懸命に翻譯した、そしてそれを伊藤の前に差出すと「成程これくらゐ出来れば何處か口があるだらう」といふかと思ふと直ぐ自分の役所の屬官としたのである。當時の巳代治の扮装は、破れ袴に七ツ下りの古羽織、見かけは誠につまらない尾羽打枯らした貧乏書生であつたけれども、持つて生れた非凡の才智と、さうして人並すぐれた三寸の舌とで、到頭博文公の手の中へ丸め込んでしまひ、何かについての作謀獻策、二人前にも三人前にも匹敵したので、博文公の方でも二なき忠臣であるかのやうに信用し、出来るだけ巳代治を立て、明治十一年伊藤が内務卿となると、巳代治も一等屬から權少書記官となつた、此時年齒やうやく二十二歳の白面の青年だつた、當時巳代治は人に語つて曰く「何でも伊藤さんに用ひられるのには、伊藤さんの心中を能く知るのが肝要です、吾輩が伊藤さんに用ひられるのは全く此方の腹の方寸にあるところですよ」と自慢して居たとか。

男爵 西 德 治 郎

多くの青年が軍人を志願する時に於て、西は獨り外交官たらんと志した、さうして能く其目的を達したけれども、實をいへば伊藤博文公の女婿たるお蔭を以て、岳父に引立てられたものと評判されてゐる。其證據には伊藤公の他界して以來、彼の名は殆ど世間から忘れられたかの感がする、さりながら彼は露西亞通を以て知られ、二度も外相の椅子を占めた人である。

出世したのは閨閥のお陰

西は舊鹿兒島藩の出身で、弘化四年七月城下に生れた、彼は明治の元勳伊藤博文公の女婿となつたところから、岳父に引立てられて人も羨む出世の仕振り、青木周藏が當年の獨逸通として知られた時、それと相並んで西は露西亞通の名を謳はれたものだ、彼は久しく露國駐劄特命全權公使として巾を利かし、明治二十九年男爵を授けられ、三十年第二次松方内閣に、大隈重信の後を承けて外務大臣となつた、尋で第三次伊藤内閣の外相となつたが、其後は清國の公使などを勤めたものゝ、別段是れとき書立てる程の功績も示さず、伊藤公が兇變に仆れてからは

所謂樹から落ちた猿同様で、全く政界から葬られた形となつたのは誠に氣の毒、世間でも彼の名を記憶から逸してしまつた。

若い時には全くの不行儀者

西は幼時藩塾で修學し、なか／＼辯舌も巧者だし、才氣もあつた、さうして當時の青年は何れも軍人を志願したのに、彼はひとり未來の外交官を以て任じ、早くも外務省に出仕した、役人とは言ふものゝ、まだ其時は半書生々活、明治五年佛國郵船に乗つて歐洲派遣を命ぜられた、時しも八月の末つかた、船中の暑さと來たら、それこそ文字通り蒸すが如くで、流石の西も堪へかねた、そこで浴衣のまゝ甲板へ飛出して涼んでゐたが、外船は午前八時までは寢衣のまゝ甲板上の散歩は許したけれども、それ以後は嚴禁したものだ、と云ふのは外でもない、八時後になれば貴婦人令嬢が身裝飾を終つて、甲板の上に出て來るからである、ところが徳次郎先生ソナ事はお構ひなしで、いつまでも甲板上をブラついた揚句、クルリと臀を捲つて坐り込んだはいが、大切な陰囊が長く甲板の上に垂れ下つてゐる、それとは知らず出て來た貴婦

人連は、此有様を見ると屹驚仰天、狐鼠々々と船室に引込んでしまつた、これが忽ち同乗者の耳に入つて行つて見ると、全く其通り、見るに見かねて或人が注意すると、彼は澄ましきつて「これが日本流だ」と答へた儘、平氣の平左で居たといふ不行儀者。

子爵 榎本武揚

夙に海軍の新智識として世に英名を知られ、長く和蘭に在りて研鑽を積み、維新の變に際して幕臣の推す所となり、心ならずも官軍に抗するや、其敏捷なる兵略と勇氣とを以て幾度か官軍を惱まし、然も遂に降服して官界に身を投じ、北海道開拓の事業に功を奏して、爾來國政に献替するところ多く、數回大臣の椅子に上りて子爵を賜はつた英傑の士、而かも彼の名は五稜廓の戦ひと共に、永く史家の筆に止められるであらう。

軍艦の註文に和蘭へ赴く

榎本は幼名を釜次郎といひ、家は代々徳川幕府に仕へ、父の國兵衛は幕府の御勘定役を勤めてゐた、釜次郎は幼年の頃から至つて漢學が好きで、儒者の友野雄介に就いて四書五經を習ひ

十二歳の時昌平黌に入學して、日夜勉強の功現はれ、學業が大に進んだ、嘉永六年には蘭學修業の爲長崎に赴いて、蘭人ハルテルスに隨ひ蒸氣機械學を修得し、安政五年江戸に歸ると、直ぐ海軍操練所の教授に任ぜられた、彼は此時代に於ける新人として英名を馳せ、非常に巾を利かしたものであつた、其後文久二年には幕府の命を奉じて和蘭に赴いた、これは軍艦註文の用を帯びての洋行であつたが、彼は其序を以て、和蘭の陸海軍に關する兵制から法規などを取調べ、又化學なども研究した、さうして註文した軍艦の竣工するまで滞在すること足掛け五年の間彼は多くの新智識を詰め込んで、軍艦開陽丸に乗つて歸朝の途に就いた、當時我邦では軍艦と名の付く船は一艘もない、此開陽丸が初めてで、然も四百馬力のエンジンに大砲六門を備へ付けた、堅牢精緻なる構造の軍艦と評判せられ、今か今かと竣工の日を待ち構へて居たところへ、血氣盛りの釜次郎は之に搭乗して、慶應二年の春品川灣へ錨を投じた。

彼の恭順説遂に容れられず

歸朝後彼は軍艦次頭取に擧げられ、次で若年寄格軍艦奉行に補せられて、從五位下諸大夫に

任じ、こゝに始めて和泉守を許された、彼の得意思ふべしである、ところが世は明治維新となつて幕軍と薩長兵との戦ひを見るに至り、彼は開陽丸の艦長として海戦の將となり、薩藩の春日丸を始め數艘の汽船と攝海に奮戦を試みた、海軍の新智識を發揚するは此時ぞとばかり、彼は遂に勝を制して薩藩の船は皆沈没の憂目に遇つた、されど幕府は恭順の意を表し、徳川慶喜は謹慎罪を待つ身の身とはなつた。

されど多くの幕臣中には、慶喜の所爲に慊らず、會議を開いて反旗を翻さうと謀つた、榎本は成島御北等と共に其非なるを痛論して、慶喜の意に従ひ恭順の舉に出づべきを説いた、間もなく朝命によつて江戸城及び軍艦兵器を朝廷に獻すると、朝廷も彼等の忠悃を感じ、四艦を收めて特に其餘を下賜された、ところが幕臣中には何うしても慶喜の恭順を快しとしないものがあつて、何時しか三兵隊が江戸を脱し、こゝに愈々舊幕臣と朝廷軍との戦ひが始まつた。

官軍を驚嘆せしめた其の軍略

榎本は代々徳川幕府の祿を食みしもの、而して先には海軍を率ゐて其將となつた關係もあり

不平組の多勢に取圍まれて推立てられたので、彼は心ならずも其れに應じ、密に遁れて品川へ走り、機に乗じて同志相應援し、そして徳川の舊業を恢復せんものと、飛んでもない決心を固めた、そのうちに奥羽諸藩の相連衡するを耳にし、同志は評議を凝らした結果、此堅艦を率ゐて海上を横行し、率制的に陸軍に一臂の力を假すならば、必ず目的を達し得るに相違ないとあつて、榎本は松平太郎、荒井郁之助等と、開陽、回天、蟠龍、神速、千代田、長諒、威臨、三日保の八艦を率ゐて品川灣を脱し、仙臺に赴く途中、威臨と三日保の二艦は颶風に遇つて沈没する、陸に於ては會津、米澤、仙臺、南部等の諸藩は、何れも官軍に降服して東北は全く戡定したとの報を得た。

ところが此時幕府の大將大鳥圭介等は、大凡千五百餘の兵を引率して會津からやつて来て、榎本と仙臺で落ち合つた、然るに幕軍は益々官兵に追撃されて、北へ北へと遁けるばかり、榎本は己むなく回天以下の五艦を率ゐて鷺木港に至り、それより蝦夷地に航して書を函館府知事に送り、哀訴するところがあつた、其時同地の守兵は賊艦の入港と聞いて、守りを棄て、函館に逃れ、それと引違ひに官軍が押寄せて賊艦を討つ、此目ざましき戦争に、榎本等は突進して

五稜廓を乗取り、それから開陽丸に投じて江刺を攻め、一舉にして北門の諸城を陥れた時の彼が兵機の敏捷なると、軍略に長じて居たのには、いたく官軍を驚嘆せしめた。

戦に勝つて蝦夷地の總裁

何を云ふにも榎本が血氣盛んな少壯時代、彼は大義名分を解しながらも、事ここに至つては今更降服も出来まい、騎虎の勢ひで遣るところまで遣つて、運を天に任すの外はないと決心し連日連夜智略を盡くして奮闘を續けたが、或夜俄に大嵐に遇つて開陽も將に沈没せんとした、部下の面々は恐怖して策の施しようもない、榎本は此時大喝一聲、衆を叱して蒸氣力を倍加し遠洋に乗り出したもの、到頭岩礁に解れて破碎せんばかり、回天神速の二艦は此危急を見て救はうとしたが、怒濤に妨げられて近づくことが出来ぬ、斯くて風波と戦ふこと四日、やつと嵐も歇んだので、何れも兵器を携へて上陸し陸戦隊を組織した、兎角するうちに開陽神速の二艦は破碎されてしまつた、けれども毫も士氣を屈せず、進んで諸塞を陥れるまで、恰も向ふ所敵なしの有様で、一人も抵抗するものがないくらゐ、當時の彼が勇氣勃々たりしことは、想像

するに餘りあるであらう。

彼は蝦夷地を略取すると、其處に首長を置く事に決し、米國の共和政に倣うて、部下の者等に投票させた結果、榎本は總裁、松平太郎を副總裁とし、海軍奉行に荒井郁之助、大鳥圭介が陸軍奉行となつて、五稜廓を本營と定め、人見松太郎を松前奉行として、こゝに蝦夷地を開墾するに定め、彼は此地で一生を送るべく決心したらしい。

陣中に於ける武將の美談

これより先、榎本は英佛の海將を介して書を朝廷に上つた、然るに朝廷に於ては、其書辭の無狀なるを怒りて、更に征討の軍を送ることとなり、海陸兩道より並び進んだ、大鳥等は官軍を邀へて力戦し、官軍は大に惱まされたが、偶黒田清隆は多數の兵を率ゐて來り援け、諸塞桐樋いで陥落し、諸艦は悉く碎かれてしまつた、榎本は千代田に在つて書を官軍に寄せ、二百五十人の負傷兵を湯川に送られんことを請うた、官軍もそれは道理とあつて、且つは情を察して其請を許して、官軍の參謀中山良三は五稜廓にやつて來て榎本に面會し、斯くなる上は

歸順しては何うかと説いたが肯かない、さうして彼は萬國海軍全書二冊を懐中から取出し、これは自分が嘗つて兵學を歐洲に修めた際、其見聞したところの隨筆である、此一書を兵火に附するは忍び難い事であるから、之を足下に贈つて今日の厚意を謝する印にしたいといふ、中山もこれは天下の寶書有り難くお受けをする、他日譯して世に公にする處存、幸に意を安んぜられよと、深く謝した上に特に酒五樽を贈つて、士の勞を犒ふたとは、武將の美談として永く世に傳ふべきものであらう。

降服入獄と赦免任官

天の許さぬ反逆に、榎本大島等が如何に死力を盡くすとも、いかでか抗續し得られよう、兵士は多く仆れて補充するに由なく、軍艦は砕け武器は盡きて、到底官軍に當るべくもない、況んや大義名分の存するところ、遂に黒田清隆の懇諭に従ひ、始めて降服の意を表した、これから東京に護送されて糺問所に入獄を命ぜられたが、明治五年大赦の恩命に浴して出獄すると、間もなく開拓使四等出仕に補せられ、中判官に累進し、黒田長官と肝膽相照らして、開拓使の

事業を輔佐擴張した、昨は生死の巷に相見えたる黒田と榎本は、今は刎頸の友として平和の事業に盡くす、磊々たる偉丈夫の心事は實に香ばしいものがある、爾來榎本は官位進んで中央政府の人となり、明治十八年初期の内閣に遞信大臣に任ぜられて以來、或は文部大臣となり、農商務大臣となり、功に依つて子爵を賜はつた。

伯爵 芳川顯正

不倫の娘の爲に其晩年をば傷けられた芳川は實に氣の毒、然し彼が四國の僻村より身を起して、七たび大臣の位に坐する大成功を遂げたについては、そこに人の學ぶべき多くの美談がある、彼は田舎の醫家の四男に生れ、親は彼を丁稚奉公に出して商人たらしめんとしたが、寺小屋の師匠は彼の學才を認めて兩親に懇諭し、好める學問をさせたのが立身出世の原因、苦學を積んで能く其志を大成したのであつた、徳島縣に於ける大臣の嚆矢で、爵位を賜はつた魁である、舊殿様の蜂須賀を除いて……。

親は藍商人にするつもり

芳川は阿波國徳島の藩士で、天保十二年十二月麻植郡川田村に生れ、祖先は代々農を以て

業としたが、彼の祖父に至つて醫を業として段々郷里の人に用ひられるようになった。後には遂に郷醫に進み、帯刀御免の身の上となつた。此祖父こそ芳川家中興の祖ともいふべき人で、名を省軒と呼び、村でもなか／＼名望のある好人物であつた。

元來芳川の生家は原田姓を名乗り、省軒以來大分村でも重きを置かれるようになったもので、省軒の末子の民部が同じく家業を繼いで、醫者をやつてゐた、これが芳川の父親であつて、省軒よりは一段人物が上であつたから、村の者にも大に信用せられ、遂には聲望一郷に隠れもないうやうな醫者となつた。芳川は其四男に生れ、長兄と三男とは醫者となつた、ところが其當時でも醫者になるのにはなか／＼金がかゝつたもので、原田家でも俸を二人まで醫者にした後であるから、此上四男坊にまでも金をかけて學問させるのは、一寸むづかしい状態にあつた、そこで阿波の國は有名な藍の産地であり、藍商人で隨分金持も多いから、いつそ芳川を商人にした方が宜からうといふことになつて、先づ何處か丁稚奉公にやつて、さうして商界に一旗擧げさせようと思つた。

三年の同手習と算盤ばかり

そこで彼の父親は何ういふ風に四男坊を教育したかといふに、先づ芳川が十一歳の春に村の寺小屋へ遣つた、こゝの師匠は住友吉五郎といつて、芳川の父も又兄たちも皆此師匠に教はつたもので、最早六十幾歳の老夫子、芳川は此人を師匠と仰ぐことになり、喜び勇んで毎日其門に通つたが、其教へるところは習字と算盤ばかり、一向に讀書の方はさせてくれない、しかし其のうちに本も教へて貰へるだらうと、後を樂しみに根氣よく二年といふもの通ひつめた、然るに何うしたことか未だ讀書の方は始めてくれない、そこで芳川も堪忍袋の緒が切れかゝつて來た、「なアに此老爺ばかりが師匠ぢやない、彼是二年も通つて勉強してゐるのに、木だに本を教へてくれないやうぢやア仕方がないから、外の師匠の所へかはらうかしら」と、斯う考へるには考へたものゝ、悲しいかな、文化の未だ開けざる當時の僻村で、此老先生より外には師匠とするべき人がない、仕方がないから今一辛棒と、疝癪の虫を抑へて又一年程待つた、されど彼の望みは尙達せられない。

讀書を教はる宿望が達した

そのうちに十三の歳も何時しか暮れて、やがて十四の春を迎へた、すると同村の原田小次郎といふものが、矢ッ張り此師匠の許へ稽古に來た、此人は村中屈指の金満家で、その教はる本は唐詩選であつた、ところが此男は少し愚鈍な方で、師匠が何遍も何遍も同じ所を教へてもなかく覺えない、そこで師匠も終ひには持て餘してゐるといふ始末、芳川は傍でその教へるのを聞いて居て、愚者がまだ覺えないうちに、何時も先に覺えてしまふ、それを見た老先生は不思議に思つて、

「此奴は奇態な奴だ、お前の家は醫者であるから、定めし書物も澤山あるであらう、何でもいゝから一冊持つて來るが、さうすると己が明日からでも教へてやらう」と云はれた時の彼の喜び、多年の願ひが達せられたと、雀躍して其日はその儘歸つて來た。

父は教育の方針を一變した

家へ歸つて書棚を見ると、山のやうに澤山の書物が積上げられてゐる、そこで彼は其中から服部南郭の書いた南郭文集といふ、絶句が載せてあるやつを取出して、翌日師匠の所へ持つて行つて、見せると「左様か、それぢや今日から之れを教へてやるから、讀んでごらん」と云つて、絶句一首を一遍ズツと讀んでくれると、芳川は直ぐにそれを覺え込んだ、そこで老先生は益々その賢明を賞めて「お前は手習ひや算盤ばかりを稽古しないで、ちつと學問の方に精出したら宜からう」と言ふ、四年越習字や算盤ばかりやらされて、學問の方に餓ゑて居たところだから、早速右の趣を父に話すと、父親も喜んで許してくれた、尤も之れは師匠が芳川の父に「お前さんところの四男殿は、丁稚小僧にでも遣るお考へかは知らないが、なかく學問の質が良いから、いつそ書物でも讀ましたら宜からう、自分が試したところでは、物覚えは好し本は好きだし、商人にすると云ふ考へを中止して、今一つ勉強させなさい」と勧めたからであつた、そこで父親も芳川に對する教育方針を改めて、さういふ事なら一番思ひ切つて十分學問を仕込んで遣らうと、これより後は讀書が専門で、大學朱熹章句の稽古にかゝつた、時に年十四、それと同時に彼は一向宗の和尚さんに論語と孟子を教はつたが、英敏な彼は僅の間に習

ひ覺えて、それから五經の素讀、斯くして十五歳の暮まで村に居た。

城下に出てて修學に勵む

少し學問が進んで來ると、老ほれの師匠やお寺の坊さんでは何うも心もとない、一つ城下の徳島へ出て勉學したい、僅八里程しか離れてゐないが、徳島には立派な學者が多く居ると父に請うて十六歳の春徳島へ出た、さうして淺野玄碩といふ漢學者で漢方醫である人を師匠として漢學の稽古を始めた、ところが醫が本業であるから時々は醫書も講義してくれるし、漢學と醫學と並び修めるといつた有様であつた。

然し學問に熱心なる芳川は、これだけでは尙ほ満足しないで、徳島藩の儒者岡本堅三郎の門にも入り、苦島五造、橋本彌五郎などの儒者にも就いたが、どうも是等先生達の教へ方が、芳川の望みを満足せしむるに足らなかつた、然しその他には之れに優れる師匠も無かつたから、十六と十七の二ヶ年は唯思ひに逸るのみで、種々の書物を漁つて耽讀し、傍、お醫者の手傳もしてやつたり、藥の調合なども助けてやつた。

學資が絶えて仕方なく養子

ところが茲に残念なことは、恰度芳川が學問を始め出した頃から、父の民部が中風症に罹つて半身不隨となり、爾來七年病床の人となつて居た、そこで長男が家業を繼いだけれども、また年齒は若し、それに父親ほどの信用も得られなかつたので、生家の家運は段々と衰へ始め遂には芳川へ學資を送ることさへ思ふやうにゆかぬといふ有様になつた。

すると、恰度藩の家老の家來に高橋文朔といふ人があつて、矢張り醫者をして居たが、自分には女の子ばかりで男子が無い、そこで芳川が學問好きの少年であるといふことを聞き込んで頻に彼を養子にしようと思望した、けれども俗に小糠三合あれば人の養子になるなと云ふし、殊に學問でもするものは、養子になつて他人の家を立てるやうではいけない、といふことを當時の青年は誰しも皆口に唱へて居た、それゆゑ彼も養子に行くことを欲しなかつた、然しながら生家は上述の如き困憊に陥り、到底學資を貢ぐことは出来ないところから、親戚の人達は様々に芳川を説き勧め、しまひには親父の病氣が悪くなるの、やれ臨終が近くなるのと脅かし

て、到頭無理無體に養子にやられ、そして彼は十八歳まで其家に居つた、尤も養家は富裕といふ程ではないが、先づ可なりの家柄で、且つ徳島に住んで居たから、芳川が好きな學問をするには、極めて都合が好かつた。

醫者などは彼の志望でない

此時阿波で有名な學者の有井進齋が、江戸から歸つて來たので、芳川は早速其門に入つて十八の年から教を受けた、丁度其時其の門下に岡本監輔が居て、芳川より三ツ年上で學問もなかく、出來た、ところが芳川は何うかして彼奴に追付きたいものと、寢食を忘れて一心不亂に勉強したすと、岡本の方でも後進の者に追付かれてたまるものと、是亦非常に馬力をかけた爲に二人の進境は驚くばかり、さうして此競争が恰度三年繼いたといふから、二人の熱心は實に感すべきである、しかしながら芳川は、自分が醫者の家に生れ、而して又醫者の養子とまでなつたけれども其志すところは醫者ではない、彼は一番世の中に飛び出して、一か八か、思ふ存分の働きを試みてやらうとの遠大な抱負を有つてゐた、さうして風雲の乗すべき機會を覘

つてゐたのであつた。

時は萬延元年三月三日、井伊大老は櫻田門外で首を取られ、それから世を擧げて尊王攘夷のことに狂奔するやうになつたので、京都や江戸に於ける世情は四國の島へも知れ渡つた、芳川は愈々醫者になるのが嫌になり、經國済民の大志を起した、時に彼は二十歳の血氣盛り、心は矢竹にはやれども、自分の思ひ通りに家を飛び出すことは一寸むづかしい、仕方なく讀書を友として暫く離伏といつた形。

老儒者と青二才との激論

有井進齋は朱子派の經學者で、芳川はその門下に居ながら徂徠の學を好んだ、それだから度々先生の學説を攻撃論難する、すると先生も癢に觸つてか時々怒り出す、けれども芳川は一向平氣に構へて居つて、いくら先生が腹を立てようが、そんな事には頓着しないで堂々と激論をやる、さうして又何かあれかしと、そののみを待つてゐるといふ風、ところが或日突然先生から絶交書を送られた、それを聞き知つた同門の友人達は、芳川に向つて「君の意旨を改めて先

生の學説の方へ従ひたまへ」と種々忠告した、芳川は之に答へて、

「今まで師匠として自分も恩義を蒙つたけれども、自ら信ずる意旨を捨てることは出来ないから、先生より絶交されれば甘んじて受けませう」

との大氣焰、斷乎として忠告を斥けたので、友人も驚いて手を引いてしまひ、今少し熱が冷めたら、屹度氣がついて謝つて來るに違ひなからうと、先づ其儘にして半年程過ぎ去つた、何しろ一方は當時町儒者でこそあれ、徳島切つての大先生、此方は未だホンの青二才の身であるから、一寸此喧嘩は面白かつた。

ところが芳川の舊師淺野玄碩が兩人の中へ入り「君が有井先生と絶交して居るのは面白くないから、何とかして仲直りした方が宜からう」と勸めた、彼も「自分も仲直りを希望するが、さりとて我が意旨を改める譯には參らぬ」と尙固く執つて居るので、玄碩は「然らば己に好い工夫があるから、兎も角も仲だけ直しなさい」と、其時分阿波の風習で、正月には「おさかづき」とて、友人を呼び集め、元旦から五日まで大に飲む、其機を利用して有井と淺野と芳川の三人が落合ひ、茲に仲直りの酒を酌んだ。

始めて長崎に遊び病に罹る

芳川は養家にあつて家業の手傳をやり、傍讀書に身を委ねて、機會の到るを待つてゐた、すると文久二年彼が二十二歳の時やつとの事で五兩程の金が出来たので、それを懐にして長崎へ遊學に出かけた、言ふ迄もなく交通不便の當時だから、渡海船や大和船などに乗つて、四國から馬關へ渡り、それから小倉へ行つて長崎に向ふのであつたが、其時彼の旅装は、二三巻の書物と数枚の着換の衣物、破れ袴を穿いて腰には粗末な大小、金は前にいつた大枚五兩、尤も當時は物價極めて安く、天保錢二枚もあれば威張つて宿屋へ一泊が出来、又二兩もあれば長崎まで往かれた。

其時分の芳川の元氣といつたら實にえらかつたもので、一體學問は貧苦を忍んで遣るのでなくしては駄目だと信じて居たくらゐ、さて目的の長崎へ着いて、やれ嬉しやと思ふ間もなく、其頃同地には麻疹が大流行してゐて、彼は着後間もなく流行病に罹り、然も容體頗る重いとあつて、遂に一旦長崎を立退くの餘儀なきに至つた。

二度目の長崎遊學時代

國へ歸つて空しく二年を過ぎた、そして二十四歳の春再び長崎へ出かけたが、此時は養父も既に死んで、家政も段々困つて来るし、他所へ出るには家族の係累があるし、全く仕方がない、然し素志を達するには何うしても遊學せねばならぬと、生家や親類の人達に心配してもらひ、萬事を托して五兩の金を懐に、やつとのことでも出立した。

さて長崎へ来たが、何ういふことをしたら宜からうかと、身の方針に迷つた、それに彼には未だ洋學の素養はなし、學資も殆ど無い有様だから、兎も角も衣食の途を見付けるのが第一の先決問題である、ところが漢書を得意に學んだお蔭で、文章の五篇や七篇は造作なく作れる、そこで彼は夫れを持つて行つて或醫者の塾へ頼み込んだ、幸ひに採用されて直ぐ塾頭となり、其處で教授もやつたり、勉勵もやつたり、多少の小遣錢も貰へて先づ一安心した。

筆耕の内職で洋學修業

然るに天下の形勢は追々と變つて来て、何時までも漢學ばかりをやつてゐるのは得策でない、と自覺した芳川は、二十五歳の時から洋學を始めた、さて洋學を始めたとなると、今まで醫者の家に居て衣食の心配が無かつたものが、忽ち生活に脅威されるやうになる、國許からは學費の來るものなし、さあ困つた、が一旦起した志を抛つやうな薄志弱行の徒ではない、彼は百方奔走して筆耕の内職を見付けた、當時お粗末な字を書いても割合に好い金が取れる、就中ボートウインの講義録なんぞの寫本をやると、二朱や三朱とれることは毎日のやうで、而して一ヶ月の下宿料が一兩内外で済むのだからこれなら遣つて行けると、晝は一生懸命に筆耕をや、夜は深更に及ぶまで洋學の勉強に精進した。

其年も暮れた翌年の正月、同郷の青江某といふ人からの紹介で、芳川は瓜生三寅の門に入り洋學を修めることとなつて、同窓の曾我祐準や前島密などと深く相識るに至つた。

大臣となること前後七回

然るに郷里に或る事情があつて、彼は半途に歸國せねばならぬ事となつた、さうして三たび

長崎へ行かうとしたけれども、今度は何うしても金が出来ない、彼はわざ／＼大阪へ赴いて親類に泣き付き、やつと旅費だけを苦面して、三たび長崎の地を踏んだのが二十七歳の時、ところが其時恰度徳島藩から長崎へ遊學生を出すことになつたので、彼も其一人に加はつて、毎月四兩づゝ金を貰ふ官費生となつた、時は慶應三年、即ち明治維新の前年である。

これから芳川は長崎で薩摩の島津家に用ひられ、追々其名を知られるに至つたのが出世の緒で、維新の後伊藤博文に隨行して米國に渡り、歸朝後官途に就いて、明治五年紙幣頭より工部大丞、電信頭等に歴任し、十四年正五位勳三等に叙せられ、内務少輔で東京府知事を兼ね、それから十八年には内務次官となり、二十二年十二月第一次山縣内閣の組織されたとき、遂に擧げられて文部大臣の椅子を占めた、次で二十六年三月司法大臣となり、爾來文部に内務に遞信に、前後通じて七度の多きに及び、巧に伊藤と山縣とを兩天秤にかけ、明治二十九年子爵を授けられ、三十五年日英同盟の論功行賞の時伯爵に陞爵された。

伯爵 大木 喬 任

第一次松方内閣の文部大臣たりし大木は、大家の域に達せる學者としても世に推重せられたる人、十六七歳にして二書を著作し、先輩を驚倒せしめたるの俊才であつた、無論彼の非常なる勉強に因るのであるが、彼は夙に勤王の志厚く、藩主の優柔なる態度に慨して脱藩東上する如き果斷あり、爲に維新後の政界に入りて薩長の人々と伍し、能く大臣伯爵の榮位を得たのである。

色男を氣取つて却々強い

佐賀藩の出身で、天保三年を以て生れ、幼名を民平と稱へた、藩費明倫館へ通うて文武の道を學んだが、其頃は卓犖豪放、稍尊大自負の風があつた、佐賀の書生は昔から質朴を尙んで、敝衣短袴を以て其風習としてゐたのに、獨り大木は立派な身装りをして、傲然お高く留つてゐるのみか、白色く肉肥え、如何にも色男を氣取つてゐた爲に、動もすると書生社會に嫌はれて折々喧嘩など吹きかけられることがあつた。

或日仲間の中で名高い暴れ者が、大木を侮つて、やれ腰抜けとか、やれ意氣地なしとか、散

々嘲つた揚句の果、己れの唾を大木の口にイヤといふ程こすりつけて「何うだ、己の唾は甘いか辛い」とやつたので、流石の大木も忽ち怒るかと思ひの外「ウンなかく甘い」と笑ひながら、其場を立ち去つて戸外へ出た、すると彼はシコタマ足へ泥を塗りつけて、元の席へと引返して来るや否や、突如暴れ者の横面を泥足で蹴飛ばした、さあ暴れ者が承知しない、そこで一場の活劇が始まつたが、居合はした者が仲裁して、彼の危険を心配し、早く避けたらよからうと勧めたが、大木は泰然自若として「なアに彼奴等に負けるものか」

先輩を驚かした少時の著作

全く彼は腕力の強いこと常人を超え、格闘の術も亦極めて巧妙であつたので、人と争うて未だ曾つて負けを取つたことがない、と云つて決して自ら喧嘩を仕掛けるやうな男ではなかつたさうして一面には非常な勉強家で、成績に於ては常に群を絶し、其文筆を能くすると云ふ評判は藩中に高かつた、彼は十六七歳の頃に「侃言」及び「獎言」と名くる二書を著はし、先輩を驚倒させたことがあつたといふ、彼は後年大家の域に達した學者として世に推重されたのも、

少年時の修養と勉強に因るものが多いのであらう。

欺かれて却つて發奮興起

彼が少壯時代に於て最も親しかつたのは江藤新平で、共に佐賀三平の一人として藩中に其才名を知られてゐた、維新前新平は頻に大義を唱へ、民平も亦大に之れに賛して、相共に深く結託するところあつたが、何にせよ藩主閑叟が優柔不斷の態度に、新平は劫を煮やして脱藩東上を企てた、しかし民平にも此事を秘して、唯親戚に急用が出来たから、何うか二十兩の金を貸して呉れまいかと申込んだ、日頃無二の友人江藤の頼みに、大木はそれを眞に受けて、漸と調達して貸してやつた。

ところが何ぞ計らん、新平は此金を懐にして其儘逃亡してしまつた、後になつて之を聞いた大木は怒るまいことか、友を賣る不埒な新平、赦して置かぬと力んで見たが、虚心再考すれば新平の行動は實に果斷であり、而して自分は因循姑息であると耻ぢ入つたとか、彼は意を決して友の後を追ひ東上したのである、爾來相携へて勤王の爲に盡し、副島種臣等と共に佐賀藩出

身の功臣と誦はれるやうになつた。

子爵井上毅

神童と稱せられ、孝子と譽められた井上は、郷人の期待に背かずして遂に大臣の位に上り、華族に列せられた、彼は大日本憲法の起草者として永く世に傳はるべく、明治時代の學制を改革大成した功勞者として、文教史上に其名を留めるであらう、彼は温厚篤實の君子人にして、然も奇才に富めず敏腕の士、維新前後の人物中、彼の右に出づる應本出身の人はあるまい、天若し彼に假すに壽を以てせば、尙大に爲すところがあつたであらう。

實に不思議な神童の幼時

熊本出身の人物中で、其腕の冴えたのと、奇才に富んだことに於て、其類を見ないと言はれる井上は、天保十四年十二月を以て生れ、天性具はつた穎敏な質で、チヨコ／＼歩きをする時分から、手習ひの眞似をしたり、本などを欲しがる、親達も此兒は妙な兒だと、いろはなどを教へて見ると、忽ち覺えてしまふ、そこで益々不思議に思つて、家にあつた百人一首を讀み聞

かせてやると、是れも亦間もなく覺えてしまひ、早や三四歳の頃には、片語交りに何うやら斯うやら残らずを語記してしまつた、賢兒と云はうか神童と云はうか、實に不思議な幼兒の惻發さに、家人を始め近所のものたちまで、こりやア驚かされるのみであつた、今に此兒はどんな豪いものになるか知れぬと評判して、誰しもその奇才に驚かされるのみであつた。

そこで親達も大に將來に矚目して、大事をとつて育てると、俾は何處で何う覺えて來るのか人が本を教はつて居るのを聞いてゐては、おきにそれを覺えて來る、また何か文字の書いてあるものがあれば、片ツ端から手に取上げて眺めたり、或は手本として夫を寫しなどしてゐる、實に嗜きこそ物の上手なれで、こんな風にして誰が何時教へたといふでもないのに、彼が十歳の頃になると、それは／＼大人を負かすやうな達筆とはなつた。

籠の火で車胤もどきの勉學

井上の家は極めて貧乏で、格は士分であるが、家には婢僕を置くだけの餘裕はない、臺所の事などは總て母親の手一つでやつて居るといふ有様、ところが井上が十三四歳の頃のこと、或

朝母親が例の通り夙く起き出してみると、竈の下でバチ／＼と音がするから、ハテ變だなと思ひ廣くもあらぬ家のこととして、ヒヨイと臺所の方を見ると、寝てるものとばかり思つてゐた倅が、何時の間にか起き出して、竈の下へ火を焚きつけ、さうして未だ夜が明けない時刻だつたから、その火の光りで一心になつて本を見て居つたので、母親は我が子ながらも實に感心したその時以來これが常習のやうになつて、毎朝々々屹度母親より先に起きて、飯の世話をしながら、竈の火で書物を読むのであつた、まるで螢の光や窓の雪あかりで苦學した支那人の話を如實に現はして、勉學を怠らなかつた甲斐あつて、獨學獨習で立派に學力が進んだ、兎角するうちに早や元服の年に近づいたから、両親は困苦い中から漸く金を工面して、學問の稽古に通はせることゝなつた。

孝養を盡しつゝ落校に學ぶ

其頃熊本藩の學問所に時習館といふのがあつて、此校へ入學してゐる生徒を居寮生といひ、生徒は皆藩の直臣ばかりで、陪臣の子弟は入學することの出来ない規則であつた、ところで井

上の父は、藩の家老を勤めて居る米田といふ人の家來であつたから、即ち陪臣に當るのだから倅の井上は入學する資格がなかつた、そこで彼は何とかして入りたいものだ、そればかりを残念がつてゐた、すると彼の師匠であつた木下翁がその事を聞いて、成程あの俊才をあの儘にして置くのは、誠に惜しいものだ、藩の爲にも大なる損失である、非常に力瘤を入れて、百方奔走し、推舉を周旋した結果、到頭彼の望みが叶つて、時習館へ入學を許されることゝなつた。

さあ井上の喜びは如何ばかり、よし一番奮發して外の奴等を飛び越し、陪臣の倅にも此のくらのものはあるんだぞと、直臣の者どもに鼻をあかしてくれなくてはならないと、意氣込み物すごく必死の勉強、けれども彼は他の生徒とは異つて、唯學問ばかりにかゝつては居られない、自分には母に代つて朝夕の食事を世話しなければならぬ勤めがある、といふので一頃よりは尙一層早く起き、まだ暗いうちに炊事一切の用をすまして、それから學問所へ通ひ、歸れば直ぐに夕餉の仕度、その骨折といつたら實に一通りのことではなかつたが、それでも彼は一日だも怠ることなく、且つ嫌な顔一つするでもなく、勇ましく立働いて孝養を盡しつゝ勉強に餘

念がない、それに家が貧乏だから、學校の餘暇には粟を精けたり、味噌や漬物の造り込みまでやつた。

藩公より稀有の褒詞を受く

天性の穎敏慧悟なる上に、斯の如き不斷の勉學、學校の成績は言ふまでもなく何時も群を抜いて、彼が思ふ通りに直臣の伴共を驚倒させた、而して兩親への孝養は四隣に評判高く、誰とて彼を賞めそやさぬものは無い、父母の喜びは譬ふるに物なしといふわけで、井上も其勤め甲斐あるに激勵せられ、一層精出して勉め勵むといふ工合、一年と経ち、二年と過ぎるうちに、彼が十七歳の春、學術拔群の優等といふことで、藩主からお褒めの詞にあづかつた、これは俗に講堂御用と稱すること、藩が秀才の生徒を優遇する榮典であるが、こんなことは滅多になく、實に千人中稀有のことに屬する、後年彼が大臣の位に上り、華族に列せらるゝの大成功を遂げたのは、勿論彼の才學の齎らしめた結果であるが、彼の幼童からの勉強が幸福を生むに至つた原因を爲せることは、蓋し否むべからざるところのものであらう。

横井小楠の豫言は當つた

元來井上は寡言沈黙の人ではあつたが、然し一たび議論を始め出すと、談論風發、快辯流暢として所謂立板に水の雄辯家であつた、殊に少壯の折には極めて達者な議論家として推服されてゐた、或時、師匠の木下翁と、其頃九州で有名な横井小楠とが、互に學說を異にして大に議論をやつた、何しろ一方は日の出の勢ひある若手の小楠だから、木下老人頗る旗色が悪かつたすると少壯論客を以て自任してゐた井上は、横井がどれ程の人か知らないが、彼も人なり我も人なりだと大氣焔を吐きつゝ、早速小楠の所へ押掛けて行つて、勝手な熱を散々に吹きまくりやがて意氣揚々として横井の門を出ると、其後姿を見送つた小楠が「彼奴年はまだ若いかなかく見所のある男だわさ」

友と困厄を別つ彼の美德

孝は百行の基といふが、井上は前に書いたやうに感すべき孝心の人であつたと共に、友人に

も同情の念が厚かつた、時習館時代に藩から何程づゝかの學費を貰つて居た頃、彼は二人の書生を同宿させ世話してやつた、何しろ僅一人分だけの學費で、血氣壯んな男三人の費用に充てようといふのだから、ほんとうに喰つたり喰はなかつたりの素寒貧、けれども、なアに飽食暖衣では學問は出来ぬ、何でも學問は苦學にあるので、螢雪の功を積んで而して後始めて成功するのだと稱し、一心不亂に勉強したものだ。

とは云へ三人の學生は全く貧乏に困しんだ、三度の食事さへ満足に出来ないのだから、其他の日用品と來たら無論十分に整へられるわけではない、それで穿物なんぞになると、一足の冷飯草履を三人して交るゝ穿く始末、されば假令何んな用が出来ても、一時に二人の外出は出来申さずといふわけだ。

其又彼等が居つた處は、家といふのも名ばかりで、間口は二間に奥行が九尺、朽れかゝつた根太の上に三枚の古疊、茶色に燻ぶつた膏藥だらけのひどいもの、それにも屈せず平氣で勉強したのであるから、薄志弱行の徒輩に出来ることではあるまい。

中江兆民井上を評して曰く

さて苦學に苦學を積んだ功が酬いられて、彼は明治三年九月大學小舎長となつた、井上の出世の緒はこゝに開け、五年六月遂に洋行するやうになつた、彼が少壯時代は先づ斯んなことで幕を閉ぢよう。

中江兆民は人も知るとほり奇行に富んだ才物であるが、嘗つて井上を評して曰く、
『今や我國中産以上の人物は皆横着の標本也、ヅウ／＼しき小人の模範也、余近時に於て眞面目なる人物、横着ならざる人物、ヅウ／＼しからざる人物唯兩人を見たり、曰く井上毅、曰く白根專一、今は即ち亡し』

と、井上の人物を評し得て極めて適切なものといへるであらう、彼は憲法起草者として其名を不朽に垂れ、文部大臣として明治時代の學制を大成せしめ、長く其功を文教史上に録せしめた。

大石正巳

長く英國に在つて政治學を研究し、現今の政黨社會で彼の右に出る政治通はあるまいと言はれてゐる大石は、頗る波瀾に富める歴史をもつてゐる、教員もやれば學校經營もやる、あらゆる嫌疑で一年も未決監に入れられる、筆禍にかかつて禁錮に處せられるなど、それから大臣になるまでには政治運動に熱中して、幾多の苦心と奮闘を續けたものだ、彼は農相として約半歳其職にあつた。

教員をやめて政黨生活へ

大石は高知藩士で、安政二年四月吾川郡御墨瀨村に生れた、弱冠の頃既に東京に上つて英學を修めたが、當時はやくも秀才の名を知られてゐた、さうして三菱商會が京橋八丁堀に商業學校を建てると、大石を英語の教師に聘した、三菱の主人公岩崎彌太郎は、大石が非凡の才幹であるのを見抜いて、同校で廢止された後も、尙引續いて長男久彌の教育を托したといふ。その時馬場辰猪が英國から歸朝したので、相談の上明治義塾を開いた、其程度は今日の中學校くらゐのもので、同縣出身の福岡孝悌や杉浦重剛などが、塾の經營に盡力してくれた、彼是

れするうちに明治十四年、後藤象二郎や松本暢などが大同團結を組織して、政見を天下に發表した、大石も其仲間の一で、諸方に遊説を試みたものゝ、遂には物にならなかつた、然るに其年十月、板垣退助が自由黨を組織して、天下の同志を糾合したので、大石などは其參謀となつて、専心黨務に奔走盡力した、彼は此時分から大の議論家で、人と舌戰して未だ曾つて敗を取つたことがなかつた、翌年九月は總理の板垣が洋行するについて、大石は大に其見るところを異にし、爲に自由黨を脱黨してしまつた。

防毅事件で其名を知らる

その後は切りに風雲を待ち構へてゐると、明治十八年馬場辰猪が米國へ渡航するから、一緒に往かうぢやないかと勧められて、共に往く筈になつてゐたところへ、横濱市廳から爆彈を買入れるとの有らねない嫌疑を受けて、意外にも監獄に打ち込まれてしまつた、未決監に在ること一年、漸く無罪で出獄し、馬場の後を追うて渡米したが、故郷忘れ難くで間もなく歸朝し豫て後藤象二郎とは意氣投合の間柄であつたから、後藤を説いて「政論」を發行し、大石が主

単で手腕を揮つた、すると圖らずも筆禍に遭ひ、新聞條例違反の言論を載せたといふので禁錮に處せられた、たびたびの不運を啣つ彼は、西洋が戀しくなつて今度は英國へ渡つた、そこで大に政治學を研究し、二十五年歸朝すると、拔擢を蒙つて辨理公使に任せられ、朝鮮へ赴任して例の防毅事件の突發に會ひ、彼は韓廷に迫つて國王に謁見し、首尾能く談判を結んで、我れの勝利に歸せしめたので、これから大石の名は朝野の間に宣傳された。

退官後は相變らず政治運動に熱中し、進歩黨が組織されると彼は其首領株となり、憲政黨内閣成立に際して一躍農商務次官に任じ、次で農相の椅子を獲取した、然るに在官約半歳にして内閣が潰れた、爾來彼は内閣に縁薄く、彼の率ゐる政黨は幾變轉、桂太郎を中心として組織した同志會にあつて、其總務となり敵にも味方にも畏敬されたが、今は悠々自適の身の上、蓋し今の政黨社會で、彼の右に出づる政治通はあるまい。

男爵 松田正久

多年政治に奔走し、自由黨以來政友會の領袖と仰がれて、徳皇一世に高く、五たび臺閣に坐して何等の

缺點なく、何等の非難を受けざる松田の如き清廉の士は、稀に見るの君子人として推重さるべき人である、政友會が今日の大を成せるも、松田等の粉骨細心の結果であると云へよう、政黨の功勞者として華族に列せられた嚆矢も彼である、彼は永く佐賀の誇りとなるであらう。

方角達の修業に歸朝の嚴命

政友會をして今日の大を成すに至らしめた功勞者として、清廉潔白の政治家として、今尙世人の推重する松田は、弘化二年四月佐賀縣に生れ、父は横尾只七と云ひ、次男の彼は故あつて松田勇七の養子となつたのである、幼少の頃藩費に入つて漢籍を修め、明治維新の後、陸軍省から各藩の秀才を抜いて佛國に留學させた際、彼も亦選ばれて渡佛した、當時は西園寺公望なども佛國に居て、松田と一緒に勉強したといふことだ、ところで茲に一ツ不都合なのは、松田は陸軍省から軍事研究の爲に差遣された身でありながら、軍事などは少しも目もくれず、方角達の法政學を修めた、何時しか之れが政府に知れて、忽ち急ぎ歸朝せよとの嚴命に接し、仕方なく巴里の都を後に日本へ歸つた。

官を罷めて政黨に加盟す

陸軍の當路者からひどく叱りつけられて、松田も全く恐れ入つた、そして身の振方に弱つて居るのを見た、時の陸軍中將山縣有明が、彼の境遇を憐むと共に深く其材幹を惜んで、陸軍省の翻譯官に世話してやつた、松田は糊口の道にありついたが、兎角するうち、法政學を以て其長所とする彼には、どうも陸軍側とは反りが合はない、そこで今度は大阪地方裁判所の檢事に轉じたが、これも間もなく辭職して民間に下り、西園寺などと共に東洋自由新聞を發行した當時は民權自由の論が盛んな折とて、新聞發行は眞に時代的の事業だと、大に世間に持囃された。

教頭から縣會議長となる

然るに之れも永くは續かなかつた、何分政府の干渉が甚だしくて、一寸思ひ切つたことを書かうものなら、主筆も編輯員も酷い目に遇はされたので、これでは遣り切れないと中途廢刊を斷行した、それから彼は鹿兒島造士館に聘せられて其教頭となり、次で又官界に入つて文部省

の參事官となつたが、再び職を辭して九州進歩黨に加盟し、長崎縣會議員に當選して議長に擧げられた。

眞に模範的の政治家

そのうちに愈々國會が開かれることとなつて、衆議院議員の選舉が始まつた、衆望を擔へる松田は、忽ち選ばれて代議士となり、それから自由黨の領袖に推され、黨の爲に盡すところ實に大なるものがあつた、三十一年大隈内閣の大藏大臣となり、尋で第四次伊藤内閣の文部大臣に任ぜられ、三十九年第一次西園寺内閣の司法大臣として藏相を兼ね、第二次西園寺内閣の法相、更に第一次山本内閣の法相に任ぜられる等、五たび大臣の椅子を占めた。

彼は平素憤らず悲まず、大臣や政黨仲間のうちで清廉家の譽れ高く、その昔五圓七圓の家賃が積り積つて何十圓、それが大臣になつてからも尙支拂ふことが出来なかつたとか、彼は眞に身を國家に捧ぐる政治家の模範と謂つべく、政黨の功勞者として男爵を賜はつたのは、蓋し松田を以て嚆矢とする。

子爵 金子堅太郎

此英才を教ふるに祖父は武道を以てし、父は文事を以てす、而して之を激勵するに健氣なる母のあるありと云ふのだから、彼が小祿の士族より今日の榮位に上るに至つたのは不思議はない、ハーバート大學を卒業した法律學士が、明治初年に巾を利かして立身出世を早からしめ、伊藤博文は彼を引上げて其手腕を伸ばさしめた、今は樞密顧問官として老體を國家に捧げ、簞々匪射の任を盡くしてゐる。

武道の薰陶を祖父に受く

金子は福岡藩の人、嘉永六年二月、城下の烏飼村に生れた、父は清藏と呼ばれ彼は其長男である、幼時より學問が好きであつたが、祖父は武術に通じた嚴格な人で、此祖父が薰陶の下に家庭教育を受けた、祖父は、苟くも男子として刀劍の取扱ひや手入の方法を知らぬのは、武士としての耻であると言つて、毎日の如く孫の堅太郎を相手に稽古を付けた、そんな事情で彼は少年時代から刀劍を嗜好し、澤山の刀劍を所藏して居り、十六歳で家督を相續した後は、平生備前長船所定の刀を佩し居た、何しろ昌平三百年の後である、武士の佩刀といつても名ばかりで

皆斬れない、たとへ斬れても直ぐ曲るやうなお粗末な新刀が多かつた時代に、少年ながら長船の名刀を佩してゐるといふので、友達仲間の羨望の的となり、當時彼は小祿の士族でありながら、名刀のお蔭で大に巾を利かし、金子の顔を見ると「御腰の物拜見」といつて、見せて貰つては何れも感心して居たといふ。

文事に熱心なる父の指導

斯の如く祖父は武藝の人であつたが、父は又之に反して文事に熱心で、倅には只管文事を教育した、そして父は黒田公に仕へて、勘定奉行の下役を勤め、果進して今日の財務局長とも云ふべき役に上つた、ところが黒田藩の財政の基礎をなすものは、其領地の産物を大阪に積出して、大阪の商人鴻池などに夫を賣らせ、その得たる金をば筑前と江戸に送るといふ風であつたから、財務局長たる父は毎年代代に大阪と國許に勤務して、藩の財政調理に努めた。

彼の父は倅に勉強させんが爲に、大阪から各種な書物を取り寄せて、之れを讀めといつて與へる、同窓の友は何れも金子の處へ來て、それ等を借りて讀むといふ風で、父は折々倅の堅太

郎を始め、多くの子供を集めて訓戒やら指導やらしてやつた、こんな風で金子は子供の時から書物を豊富に持つてゐた、當時藩には修験館といふ學校があつて、金子は之れへ入つて勉強したが、十三から十五までの三年を通じて、試験のたびに甲科に登つた、ところが其頃彼が讀んだ書物の中に『年幼くして甲科に登るは一の不幸也』といふ事が書いてあつた、思へば自分は三度まで甲科に登つた、さすれば結局は不幸になるのだと悟つて、其後は藩費の試験を受けず、爾來諸先生の門を叩いて、講義を聴いては自修してゐたとか。

倅を激勵する母堂の書狀

明治元年十六歳で家督を相続すると、藩廳の給仕となり、暫くして藩の軍隊へ編入されて英式訓練を受けた、しかし其間漢學の研究を怠らない、或時弘道館記述義を讀んで、始めて國體の尊嚴と他國に比類なきを悟つた、三年には藩の選拔で東京留學を命ぜられたが、一年も経たないうちに廢藩置縣となつて、藩から支給さるゝ學費もハタと止まつた、これには金子も非常に困つてゐると、偶々母から一通の書狀が届いた、その文面の趣意は「此度廢藩置縣になつた

よつて將來を考へ、汝等子供の學資に充てる爲に、祖先傳來の土地家屋を賣り拂ひ、又什器等は一切大阪へ送つて賣却したから、取敢へず此事を知らせる」とあり、更に筆を改めて、「祖先以來折角維持して來た土地家屋や、祖父並に父が心を籠めて集めた書畫骨董刀劍等を之を人手に渡すは如何にも心外で、残り惜しき心地がすれど、汝等の教育の爲に餘儀なく賣拂ふこととした、之からの出世は教育あるものでなければならぬとは、父上がしばしば仰せられたことで母もさう思うて居る、大切な什器であるが、其資金で汝等兄弟四人出世することになれば、土地家屋や書畫骨董を買戻す事も出来ようし、祖先傳來の寶物も取り返されようそれゆゑ母は斷然賣却するから、左様承知せよ」と書いてあつた、彼は父からは飽く迄も勉強せよ、書物は望み通り與へると云つて獎勵され、父なき後は母から一家の重責を負はされ、いたく感激して涙に咽び、この上は如何なる辛苦も厭はず、勉強して大成を期せんとの大決心を拘いた。

孝の終りを全うし得たり

當時金子は同藩士平賀義質の従僕となり、餘暇を偷んでは英學の修業を怠らなかつた、ところが幸ひにも明治四年舊藩主黒田長知侯が渡米することゝなつて、金子は其隨行員として米國に赴き、留學八年、ハーバート大學を卒業して法律學士の稱號を授けられ、歸朝すると直ぐに大學豫備門の教授に任ぜられた、これが彼の就官の初めてであつたが、何にせよ外國仕込の腕前殊に其頃はまだ法律の發達してゐないことゝて、金子の中の利くこと何のくらゐであつたか、彼の得意想ふべしであつた、十三年には元老院權少書記官に躍進し、また憲法の取調べに従事した、それより太政官大書記官となり、十八年新内閣の組織せらるゝに際して内閣總理大臣秘書官に任じ、二十三年には貴族院書記官長に昇進、二十七年農商務次官となり、三十一年親分伊藤公が第三次内閣を組織するに當り、其四月伊東已代治に代り農商務大臣の椅子を占めた、尋で第四次伊藤内閣の司法大臣となり、遂に子爵を賜はり華族に列せられた。

伯爵 林 董

英國や清國に公使となつて居て、政變來に一躍外務大臣となつたのが第一次西園寺内閣の時で、更に第

二次西園寺内閣では遞信大臣で外相を兼ねた、彼は公使として又大臣として、朝野に批難の一つたも受けず、無事平穩にやり通して行つたのは、今までの大臣には餘り類のないこと、其のかはり是れといふ大した手腕も現はれなかつたやうだ、兎も角位は伯爵にまで昇つた彼は、千葉縣出身の特筆的人物と云へよう。

父は一風變つた有名な醫者

林董は嘉永三年二月、下總の佐倉町に生れた、父は佐藤泰然といひ、有名な堀田藩の典醫で、蘭學に通じた人であつた、彼は當時關東に於ける蘭學の大家で、大阪の緒方洪庵と並び稱せられ、蘭學の塾を開いて、諸藩よりの留學生百數十人を寄宿させて教授してゐた、性質剛毅膽勇、なか／＼外科に長じて居たが、患者が來て施術する際に、痛さに堪へかねて泣かうが何うしようが、何の遠慮會釋もない、醫者は患者を治療するのが役目だ、此治療に必要な限りは盡すだけの施術をせねばならないと云つて、患者をつかまへては一刀兩斷の思ひ切つた荒療治而も其腕前は立派なものだつた、こんな風に一風變つた醫者であり、又其家を相續さすにも、財産の相續にあらずして家名を相續さすのだと云つて、たとへ我が子でも、其技能が萬人の上

に立つべく卓越した人物でなければ、決して家名相續は許さぬと力んで居た。さうして泰然はそれを實行した、彼には有名な博士松本順や、林董の如き人材を持つて居たに拘らず、之を排して他より養子を迎へて其家を繼がしめた、佐藤尙中は即ち是れで、殆ど社會的の家督相續だ、否これが佐藤家の家憲となり、尙中も我が子を排して佐藤進博士を養子とした、本郷湯島臺の順天堂病院は、實に佐藤泰然の創立したものである。

眞に感ずべき母の教訓法

父親の泰然は斯の如き偉い人物であつたから、母親も亦女丈夫と評判された賢明な人であつて、林は此女丈夫に依つて嚴格なる家庭の教養を受けた、彼が幼時寺小屋で論語や孟子の素讀を稽古して、家に歸ると直ぐに復習をやつた、何分子供のことだから例の棒讀みで、知らぬ所も好い加減にサラリくと讀み流す、すると母は傍に聞いて居ては誤讀を指摘し、今一度讀んで見よと咎める、誤つてゐると其れではいかぬ、かう讀まねばならぬと教へる、林は子供心にも少し不思議に思つた、どうも母が論語や孟子を誦讀してゐる筈がないのに、あんなに知つて

ゐるとは實に變だ、これには何か種があるのぢやないかと、或日母の不在中にソツと母の文庫を開けて見ると、何ぞ計らん、母は經典餘師と名くる、假名付の四書五經を藏してゐるやうとは、彼女は倅に修養させたさに、斯る書物を置いて指導教訓の資に供したのである、其熱心の程眞に感ずるに餘りあるではないか

十七歳にして英國に留學

林は幼い時から學問が好きで、何處へ行くにも書物を手から離したことがない、中にも八犬傳を愛讀して、幾回となく讀み下し、しまひには之を誦讀するやうになつたさうで、父の泰然も彼が將來爲す有るの材たるを知り、此上は時代の要求する有用の學問を修めさせんものと、彼を横濱へ遊學させた、此頃は洋學修業の目的で、各藩から横濱へ來る秀才も多かつた、林は十三歳の頃横濱へ來て、有名なヘボン先生の所で英語の研究にかゝつた。

慶應二年、幕府は福澤諭吉の建言を容れて、英國へ留學生を派遣することに決し、蕃書調所即ち後の開成學校で試験をやつた、受験者八十人ばかりの中、十四人が選拔されて、中村敬宇

菊池大麓、外山正一、林董などの秀才が、何れも日本刀を腰にしてチヨン鬚姿、横濱を縦横にして六十五日目に英國サウサンプトンに着いた、此時十七歳の林は、將來日本の海軍を擴張せざるべからずと看破し、留學中は切りに海軍の技術を専攻した、留學二年を経つと、風の便りに國內は維新の大改革を行ひ、國を擧げて騷然たる有様なりと聞き、此上は一時も安閑としては居られない、早く歸つて國事に奔走せねばならぬと、かう決心してゐる矢先、幕府からも在歐洲の留學生皆歸朝すべしとの命令が來た。

官軍に降服赦免の後就官

さあ歸つて來ると、彼の時遅く此の時早し、既に上野では幕軍が朝廷に反旗を翻して、砲烟彈雨物すごく、榎本武揚等は幕府の軍艦開陽丸其他を率ゐて、品川沖を發鎗し勃に函館に赴かうとしてゐる、林は此機失ふべからずと、一目散に品川に駈け付けて、開陽丸に乗込んだ、然しながら榎本始め林等の所存は、決して朝廷に反抗するわけではなく、唯王朝を擁して幕府を倒さんとする薩長兩藩に對抗し、幕府を朝廷の下に置いて政權を執らせようとしたのだ。

船は愈々函館五稜廓に着いて、こゝに目ざましい對戦を試みた始末は、榎本武揚の項に於て述べた通り、彼等の率ゐる軍勢は果敢なくも官軍の爲に破られて、榎本始め林等は降服の上監獄にプチ込まれたが、間もなく赦免の恩典に浴して出獄すると、恰度其時紀州藩の改革が行はれて、陸奥宗光が采配を振つて居たので、林は兄の松本順から紹介してもらつて、陸奥の食客となり、陸奥の指金で藩の改革に盡力した、そのうちに廢藩置縣の制が布かれ、陸奥は神奈川縣知事に任命せられ、林は同縣の少參事に引上げられた、これが官界へ踏出した抑もの端緒となつた。

星 亨

宛も獅子王の荒れ廻るが如き勢を以て日本の政界を蹂躪し、泰平の世に頭の働き一つで國務大臣となり星なくんば政界はおのづから寂寥を感ずるといふくらゐの大人物になつた彼が、左官の親方の胤であるといふに至つては、頗る異數に感ぜられる、さうして彼の政敵は彼を以て、悪人の親玉、公益の巨魁であると思ひ、味方の者は彼を巨人と崇め、人傑と賞してゐる、彼の如き毀譽褒貶紛々として、その批判の定まらざるは、世に其類を見ないであらう。

彼の素性は果して如何

星亨の如く、毀譽褒貶の紛々として、死後三十年の今日に至るも、尙且つ其批判の定まらざるは果して如何なる次第であらうか、星は巨人であるとか、人傑であるとかいつて、口を極めて賞讃する者があるかと思へば、他の一方では、公盜の巨魁であるとか悪人の親玉であるとかいつて、聞くに堪へぬ罵詈雑言を放ち、之を攻撃するものがある、のみならず彼の素性についても、或人は彼を山賊の子であると言ひ、或人は穢多の子であると言ひ、彼を憎むと同時に、其親にまで耻辱を加へようとしてゐるものもあつたが、而も星自らは其等の讒誣に對して、辯解らしいことは絶えて言はなかつた、彼が其選挙區たる宇都宮に於て補缺選挙を争うた時に、選挙區の有力者が彼に向ひ、

「あなたの素性について、世間では色々に申しますが、今度の選挙につきましても、反對派の人達は、あなたを以て穢多とか非人とか申して、實に聞き苦しいことを觸れ廻つて居ります、甚だ錢金で埋りませんから、どうか先生の素性を明していただきたいものです」

と言つた時に、星は冷笑を漏らして、

「イヤ、それは詰らぬ心配だ、敵は何と言つても宜しい、敵の悪く言ふほど己が詰らぬ者の子なら、これ程になつたのは猶えらいことになる譯だから、決して心配はない、穢多や非人の子が是れくらゐになれば、實にえらいものだ、代議士の候補者は、つまりが人物を擧げるのが目的だから、素性や出身の穿鑿は全く別問題だ、生れは卑しくても、手腕があれば宜いではないか、彼等の悪く言ふのは決して恐るゝに及ばぬ。」

と答へて、一向辯解らしい言葉を述べない、例の有力者も成程と言つて、星の言つた通りをそれ／＼説いて歩いた、さうして星は遂に大勝利を得たのであつた、

賢母の胎内に巨人の卵

星は穢多の子でもなければ非人の子でもない、彼は嘉永三年四月、天下多事の時に當つて、大江戸の一隅、而も四民の最下級たる職人の家に産聲をあけた、父は築地小田原町の左官の親方で、佃屋徳兵衛と云ひ、母は相州浦賀の漁夫の娘で松といふのであつた、彼には二人の姉が

あつて三番目の子供として生れたのだが、職人の家から彼の如き傑物を出したのは、實に異數といつて宜からう。

母の松子は非常な賢母であつて、彼を養育するについては、容易ならざる辛苦を嘗めた、實を言へば、松子あつて始めて星があるのである。松子は極めて快潤な氣風で、義侠心に富んだ男優りの女であつた、松子が彼を生んだ後に、父の徳兵衛は死んだので、到底女の手一つで三人の子供を育てる事が出来ぬから、世話する者があるのを幸ひに、越後中浦原郡の人星泰順といふのを入夫にすることになつた、此人の本業は醫者であるが、易者もするし、茶や俳諧もやり、又活花なども上手にやつた、しかし世渡りは下手な人で、入夫になつてから色々の事に手を出したが、悉く失敗に終つて、終には住みなれた家を立退かねばならぬ不幸に陥つた。

星は幼名を濱吉と言つたが、泰順が義父になつてから星を名のり、名も泰玄と改めた、松子が星を愛することは、嘗に其末子であるといふばかりではなかつた、子供の時分から我慢の強いところなどは、最も母の氣に入つたことであらう、されば母は女の子を手放すやうな場合になつても、決して星を放すやうなことなく、泰順に氣象をしながら、大切に彼を育て上げた、

江戸から横濱へ移つた時の星の家は、極度の零落に陥つて、泰順は大道の賣卜者になり、松子は星を背負つて蠟燭の壺焼を賣つてゐた、といふ程に哀れな境遇にあつた場合にも、松子は彼を手放すことが出来なかつた。

金創や梅毒の膏藥賣り

易者の泰順も、所謂賣卜者の身の上知らずで、夫婦共稼ぎから歸つて來た晩、ぐつすり寝込んだ丑滿つ頃に、近所から火事が始まつて寢衣の儘で焼け出され、箸一本持たぬ宿無しになつてしまつた、何とも仕ようがないので、知己の人に泣き附いて少し許りの草鞋錢を貰ひ受け、それで漸く辿りついたのが、松子の郷里なる相州浦賀である、こゝには多少の親類もあれば知己もあるといふので、其れを頼りに歸つて來て見ると、思つたほどの半分も相談に應じてくれる者が無い。

そこで男優りのお松は、もう斯うなれば一身の外には味方がないと心に定めて、四方八方奔走した末に、他の家を半分借りて、泰順には醫者を始めさせ、自分は毎日濱邊へ出て漁師の手

傳をしてゐた、すると此困窮の有様を見かねた濱吉は、父の手助けに金創や梅毒の膏藥を船へ賣りに行かうと言ひ出した、其頃の浦賀には船舶の出入りが多かつたから、却々膏藥が賣れる他の醫者も皆な之を行つてゐるので、濱吉は其れをやらうと考へたのである、さうして彼は膏藥箱を持つて、たつた一人小さな舟を漕ぎながら、毎日膏藥を賣りに出るのであつた、すると此膏藥が大層能く効くといつて、其評判がよい上に、無邪氣な子供が一生懸命の行商とて、それが人氣になつて、この方の儲けが相應に生活を助けることになつた。

醫者を志望し再び横濱へ

然るに泰順の方は一向病家も殖えないで、空しく妻と子の稼ぎに甘んじてゐる外はなかつた、お松は女ながらも男一人だけ稼ぎはしてゐるが、何分標同様でやつて來たのだから、泰順の開業についても親類から借金をした、それを早く返してしまはないと頭が上らぬと、負けぬ氣のお松は賦しくづしに運ぶので、生活は何時も同じやうに苦しい、或夜泰順は寢物語りに自分の不幸を啣ち、妻や子供の苦勞を謝しつゝ、お松に向つて悲觀的の覺悟を話したので、氣丈

な妻は夫を慰めたり勵ましたり、これから親子三人が益々元氣を出して、力限り働いてみようなどと語らつてゐた、よく眠つてゐると思つた濱吉は、寢床の中で兩親の物語りをスツカリ聞いて、さて翌朝になると、私は横濱へ行つて、夷人さんの弟子になつて、お醫者の勉強をしたいと兩親に訴へた。
わづか十三や十四の子供が、貧苦についての父母の寢物語りを聞いて、大に發憤して天下の名醫にならうと云ふのだから、此一言を聞いた時は、氣丈のお松は言ふまでもなく、泰順も共に涙の抑へようがなかつた、さうして幾日かの後、親子三人は少しばかりの荷物を纏めて浦賀をあとに、再び横濱に赴いたのである、これぞ星が漸く世に立たんとする希望の埠頭に上陸したのと同じであつた。

持てあました我儘者

文久元年の頃から明治へかけて、横濱辨天通りに渡邊禎庵といふ醫者があつた、元來漢法の醫者であつたが、蘭法の醫術を學んで、それから更に亞米利加の醫者に就て修業をしたので、

まだ醫術の開けない時代のこととして、頑庵の評判は非常に高くなつた、横濱に於て種痘を始めたのは此人が元祖である、彼は非常に厳格な人物で當時半幫間的の行爲をやらねば、門戸が張つて行けないやうな醫者の中にあつて、決して病家に阿つたり、口先で巧く御機嫌をとるやうな卑しい行ひはなく、異彩を放てる立派な醫者であつた。

泰順は横濱へ着くと、濱吉の泰玄を伴れて頑庵の宅を訪づれ、薬局生として使つて貰ふことに話を纏めた、併し星の希望は決して醫者になりたいといふのでなく、どうかして洋學を修業したいと心竊に期したのである、それは、維新前は洋學と云ふと醫者に限るやうになつて居たのだから、假に父の業に従ふといふ名目の下に渡邊の家に住込み、大に洋學を勉強しようといふ考へであつたのだ、然るに意外にも頑庵は洋學を知らないの、先生から教へを受ける事が出来ず、單に藥を量る一個の調劑生となつて日を送るの外はなかつた、星は大に力を落した、おまけに患者が多くて調劑に多忙を極め、とても獨學を爲る時間などは無い、癩に觸つて仕事もしないことがあるので、他の書生共が屢苦情を言ふけれども、星は年長者を屁とも思はず子供に似合はぬ思ひの外の理窟を吐いて、兄弟子をミシミシやつつけるので、しまひには誰も

彼を相手にしなくなつた、星は却つてそれを喜んで、外へ遊びに出掛けてしまふ、時には先生に知れて叱責を喰ふこともあるが、一向平氣で、馬鹿にしてゐる様子があり／＼と見えるので、先生は嘆聲を漏らして、

「泰玄は却々伶俐で見込のある少年だが、如何にも我儘で強情で仕様がな、あれが改まらねば駄目だ」
などと言ふこともあつたさうだ。

行方不明となつて大騒ぎ

或る日のこと、患者に與へる藥に不足の物があるので、泰玄は之を求めべく出入りの藥種屋へ行つた、他の書生は其歸つて來るのを待つてゐたが、待てど暮せど歸つて來ない、そういつまでも患者を待たせることは出來ないから、他の書生が藥種屋へ行つて見ると、泰玄は夙つくに藥種を持つて歸つたといふので、直ぐ引返して見るとまだ歸つてゐない、泰玄の平生が癪にさはつてゐるから、書生は先生に告げ口をした、先生も困つたものだと思つて、心の中では

とても見込みがないから、歸つて來たら、親を呼んで引渡してしまふつもりであつた、然るに日が暮れても歸らず、夜になつても歸つて來ない、到頭其晩も過ぎて翌朝になつたが、矢張り歸らぬ、三日目になつても何の消息も無い。

禎庵先生少し心配し始めた、いくら怜悧のやうでもまだ子供だから、若しや悪戯が過ぎて川へでも陥つたのではないか、萬一の事があつては親達へも相濟まぬ事だと、怒つた氣持は何時しか失せて、泰玄の身を案じるやうになつた、母の松子を呼びにやると、松子は氣狂ひのやうになつて騒ぎ出した、渡邊の家では總掛りでその行方を探した、一日掛りで探したが何うしても分らぬ、愈々泰玄は何うかなつてしまつたのだらう、此上は早速役所へ届け出る外はないとなつて、流石に松子もボンヤリしてしまつて、青息吐息で憐いである、一家は寂として人皆憂色ありといふ形だ、折柄戸外の方でワイ／＼人聲がするので、書生が出て見ると、泰玄が小さな鬚の元結を切つて、散らし髪になつてゐる、衣物も何も泥水に染つて、シク／＼泣いてゐるのだ、書生は之を見附けて、

「ヤア、泰玄さんが歸つて來た、どうしたんだか泥だらけだ、泰玄さんだ泰玄さんだ……」

書生が騒ぎ出したので、禎庵も飛び出して來る、松子も嬉し泣きながら泰玄に取附いた。

蛇は寸にして人を呑むの概

先づ叱言は後廻しとして、慰める方が先になつた、座敷へ上げて段々様子を聞くと、泰玄は吸り泣きをしながら、

「一昨日、藥種屋から歸りに、幾ら歩いても一ツ所に出て、どうしても家の前に出ない、それから休まず歩いてゐたら、到頭この前へ來た」

といふのであつた、少しも要領を得ないが、松子や禎庵の妻などは、流石に女だけに此話を聞いて「それでは、大方狐にでも憑かれたのであらう、能くそれでも歸つて來た」と言つて喜ぶのを、頻りに考へて居る禎庵が制して、

「マア待ちなさい、どうも泰玄の中すところは信用が出來ないぞ、藥屋から此處まで來るのには軒並びの繁華な町ばかりで、僅二丁程しかない、一尺一寸の土地も餘さず家が建込んでゐる所に、狐の出る筈がない、殊に泰玄が使ひに行つたのは、午前のごとで、夜とは違ふか

らどうも泰玄の言ふところは信ぜられない、何でも外に事情があるに違ひないから、泰玄を調べて見るが宜からう」

成程尤もな理窟だ、そこで一同が交る／＼理窟詰にして糺問に及ぶと、泰玄も到頭往生して「實は、打ちをやつて、遅くなつて、面目が悪いから辨天の社の中で日を送つて、この狂言を作つて歸つたのだ」

打ちといふのは其頃東京横濱などに流行つた子供の遊びで、地面に一線を引いて、三歩ばかり退がつて一文銭を投げる、線の上に出たのは親銭といふので、別に持つて居る銭を、其親銭へ投げて載せるのである、巧く載せれば自分のものになり、又線の下に留つたのには、同じく親銭を投げ附けて、線の上へ弾き出すのである、星は是れが飯より好きな遊びであつた。

と言ふのを聞いて、一同呆れ返つたが、禎庵が容を正して談じつけると、

「洋學は出来ないし、調合ばかりやつて居たつて面白くないから、それで怠るのだ」

と言はれて、禎庵も誠に感心な心掛だとは、思つたが、賞めるわけにもならず、その場はこれきりで済んだが、これが原因となつて、禎庵の保證で彼は英語の學校へ通ふやうになつた。

英語を學んで商館の書記

其頃、高島嘉右衛門が私費を以て建てた英學の塾があつた、禎庵の周旋で彼は此塾に入ることなつて、星は自分の目的が達せられた嬉しさに、風雨の日も厭はず、寢食を忘れて一心不亂に勉強した、彼は生來通常の人と異つて、記憶力の強いことは驚くばかりで、所謂強記と言ふやつだ、一度聞いた事は決して忘れぬといふ、不思議に便利な頭の持主であつて、それで書物を手放さなさいといふのだから、進歩の著しいことは教師も呆れる程であつた、彼の記憶力の強いことは、彼が一生の間、終に手帳の厄介にならなかつた一事でも解る、門人などが何か手帳に書いてゐると、彼は今の若い者は手帳がないと仕事が出来んのかな、と手帳連を嘲つたものだ、後年彼が衆議院議長となつた時、記憶の善いことが一般の人に知れた、如何に細かいことでもおぼえてゐて、前例を擧げて裁決する必要のある時は、書記官長に問はずして直に宣告を與へたので、視た者は何れも驚嘆したのであつた。

英學が一通り出来て、もう大概のものは讀みこなせるやうになつた、速成を主とするのだか

ら、學課は左程六ヶしいものは教へないが、彼の進歩は如何にも著しいので、教師も末頼母しいことに思つて、課外の書物を教へるやうになり、僅に二箇年ばかりで相當の素養が附いたしかし英語を實地に應用する必要があるといふので、此教師の世話で、居留地の商館へ書記に入つて、英人を主人として朝夕英人ばかり接するやうになつた。

大阪へ行つて英語の教授

斯くて一年ばかり経つた商館の書記は彼が一生の目的でない、そこで全國の漫遊を思ひ立つた彼は世界の歴史にも親しむやうになつて、其希望は段々大きくなつて來た、先づ取敢ず高山大河を跋渉して、勃々たる英氣を養ひ、名士偉人を訪ねて胸底の經綸を叩き、以て他日大に飛躍すべき資料を得ようといふ考へから、此漫遊は企てられたのであるが、果して之に依つて得た利益は、實に莫大なものがあつて、彼が立身成業の上で容易ならざる關係を有する、當時未だ丁年に達せざる星は、多くの人に接し、多くの事を見聞するに爲し得るだけの事を爲した。初旅の面白さに、東海道の旅行は存外手間取つて、やつと大阪へ乗り込んで來た、其頃何禮

之が英漢二學の私塾を開いて居た、星は英書こそ其頃の人としては、多く類を見ないくらゐに學んで居たが、漢學の力は誠に乏しかつたので、傳手を求めて何禮之に接近し、其教授を受けることゝなつた。

ところが何禮之は、日を経るに従つて星の才幹を認め、年こそ若けれ確に見込のある人物だと深く信するやうになり、殊に英學に達して居る點に最も信を置いて、英學部の教頭として諸生に教授することを囑託した。

陸奥宗光の師匠となる

時恰も徳川幕府が倒れて、明治政府が起つた際であるから、各藩の人材が追々と新政府に入つて、それ〴〵政府の實務に當つて居たが、一番困つたのは外交係の役人であつた、其頃はまだ外務省として今のやうに纏つた役所はなかつた、外國事務御用係といつたやうな肩書で、外交上の事に當つてゐたのである、素より外交の知識などいふ立派なことは備置いて、兎に角外國人の書いた物をどうか斯うか讀むくらゐのもので、満足に話の出来る者すら極めて少く

甚だしきに至つては、朝夕の言語さへ不通であつて僅に通事の力に依つて對談をする、といつたやうな有様であつたから、多少志のある者は洋學の必要を感じて、政府へ勤める傍、何禮之の塾へ来て、英學の教授を受けて居た。

其中には、外國事務係の陸奥宗光も居て、毎日といふ譯ではないが、屢何禮之を訪うて洋學の研究を怠らなかつた、或日何禮之は改めて、

「さて陸奥さん、外の事でもないが、私の所に星泰玄といふ青年が居る、其年に比べて如何にも、英學が能く出来るし、且つ人物も確に見込のある立派な才物であると思ふが、今此塾で英學の教頭を託してあるくらゐであるから、貴下も此星に就いて學んだら宜からうと思ふそれならば強ひて通はずとも、貴下の方へ日を極めて星を差向けても差支はないが、どうでせうか」

「ハ、ア、それは好都合ぢや、是非一度遇はせて貰ひたい、あなたが認めて十分といふのならば學力も確かであらうし、我輩に於ても素より異存はないから、然るべく御紹介を願ひたい」

斯うした話から、星と陸奥とが初めて面會して、それから陸奥の爲に、彼が英書の教授をする事になつた、當時彼は能く酒を飲んで、酔に乗じて難波新地を荒し廻り、軒並の娼家の掛行燈に石を投げて、毀し廻つたこともある。

紀州藩主の無禮を怒る

陸奥宗光は種々の關係から、紀州藩主徳川茂承に重く用ひられる事となり、彼は藩制改革に着手した結果として、いづれの藩士であらうと、そんなことには頓着なく、一廉の役に立つ者は採用することになつた、星も亦陸奥の推舉で、和歌山の藩費を監督することになつて、和歌山へ乗込んで来た。

暫くすると藩主から改めて拜調を賜ふことになつた、他國の人に自分の藩の子弟を託することであるから、藩主としては一應彼に遇うて置きたい、といふ希望を持つて居たのは當然のこと、さて愈々拜調となると、また昔の氣風が残つて居て、徳川御三家の一として、殊に大納言であつたといふやうなことが、幾分か鼻の先に掛つてゐるから、恰も藩臣に拜調を賜ふのと同

じやうな形式で星を引見した、自尊心の高い彼は佛然として怒つて、殆ど挨拶も碌にしないで其席を立つて歸つた、歸ると同時に行李を纏めて、和歌山を後に大阪へ上つてしまつた、實に小氣味の好い星の行り方ではないか、しかし陸奥は随分これには迷惑をした、後日「何故貴様あの時に黙つて立つたのか」と詰ると、星は、

「藩主の茂承といふのはあれは、馬鹿だなア、自分の藩の子弟を己に頼んで教育をして貰ふのに、高い所で敷物の上に坐つて、其方が星か、といふ一言は随分怪しからんことだ、己は紀州の家來ぢやないのだから、あれは人に對する禮を知らぬ奴だ、それで己は歸つて來たのだ此答へには宗光も笑つて、別に叱言も言はなかつたさうだ、星の負けじ魂は、若い時から斯の如き有様であつたのだ。

流石は陸奥宗光の炯眼

彼は再び地方漫遊の途に上り、大阪から北越に道を取つて、奥州十五州を廻り、横濱へ歸つて來たのは一年の後であつた、それから江戸へ出て御家人か旗本かの家へ一時養子にはいつた

が、直ぐ飛出してしまつて横濱へ舞ひ戻り、今度は渡邊禎庵の世話になつて、暫くは英語の研究に餘念がなかつた。或日横濱市中を散歩してゐると、布告の掲示場に入だかりがして、頻りに高話をして居るのでフト近づいて見ると、縣令陸奥宗光と署名してあるのが眼についた、さては陸奥が縣令になつて居るのかと、初めて知つたから直ぐ其足で縣廳へ訪ねて行つた、不意の訪問に陸奥は非常に喜んで醫者の家に厄介になつて居ても仕様があるまいから、我輩の家へ來たら宜からうと言つてくれたので、相變らず貧しい生活をして居た兩親を伴れて、その日から宗光の官邸の一部に住むことになつた。

或時グランドホテルへ食事に行かうと、宗光から誘はれての歸り途、馬車を急がせて境町まで來ると、黒山のやうな人ばかりであるから、星は馭者に命じて馬車を止めた、陸奥は迷惑したが己むを得ず待つてゐると、星は大勢の人を押除けて群衆の中へ入つて、事情を聞いて見ると、無錢飲食をやつた書生を、料理屋の若い者が大屯所へ引張つて行く途中、書生が大地に手をついて詫びてゐる、若い者は承知しないといふわけ、星は、宜し、己が拂つてやると大きな

遂に我を折つて仕官

聲で「オイ、陸奥君、金を二三兩呉れたまへ」と嗷鳴つたので、偕は今度来た縣令が此馬車に乗つて居るのだなと、群衆はワイ／＼言つて、馬車の方へも人が駈けて行く、陸奥は苦い顔をしながら馭者に金を渡した、星は拂ひをすまして、厚く禮を述べてゐる書生から、現狀を聞いて大に同情し、直ぐ自分の家へ書生に置く話をきめた、こんな調子で書生を拾ひ集めるのだから、陸奥が養つて居る書生よりも、食客をして居る星の書生の方が多いいといふ有様、しかし陸奥は大に見るところがあつたものか、星の放縱磊落な氣風を強ひて矯めようとしなないで、其爲すがまゝに委せて置いた。

陸奥宗光は、星の如き人物を永く遊ばせて置くのは惜いものと、或日彼を呼んで役人になれと勧めたすると、星は顔を擧めて手を振りながら、それは平に御免蒙ることとわる、さうして役人などになる希望は決して持たない、今時薩長二藩に關係のない者が役人になつたとて、出世の行止りが知れてゐるではないかと反抗する、そこで陸奥は、自分も薩長の我儘を壓へる考

へで、必ず一度は衝突しなければならぬと思つて居るが、マア一時でも出ることにしたら何うぢやと説いても、星は遂に承知しなかつた、けれども陸奥は斷念られず、其後も時折勸説を試みて、

「人間といふものは花と同じで、盛りの極つて居るものだから、人に彼是言はれるうちが花だ、殊に君なんぞは歳もまだ若いし、今から辛抱する氣になつたら、相當に立場を造れるだらうと思ふから、マア我輩の言ふことを聞いて、入ることにしたら宜からう」と、段々話し込んだので、遂に星も我を折つて、それぢや君に任せるといふ事になつた、彼の大藏省に入るに至つた動機は右のとほり。

正しい温かい家庭の人

その頃星は綱子夫人を迎へた、彼女の實家は伊阿彌といふ姓で、町人でこそあれ幕府の御用達をして居た家だから、女一通りの教育は素より受けて居た、時に星が二十三歳で、綱子が十七の妙齡であつた、星の最期は那アした悲惨な有様であつたが、併し生前に於ける彼は、よく

世間の名士の家庭に有り勝ちな、品行上の事に就いて細君に厭な思ひをさせるやうな事は一度も無かつたさうである、彼は一般の政客が爲すところの賤しい遊びといふものは、少しも爲なかつた人で、尤も、綱子を迎へた前後には、大分吉原あたりで耽溺した事もあるといふことだが、それは舊幕時代から、天下國家の事を以て生命とする、所謂志士なる者に有り勝ちな、一種の習慣から來た行爲であつて、遊治郎が耽溺したのは譯が違ふ、従つてそれが爲に、綱子が胸を痛めたなどといふ事は、勿論なかつたのである、殊に其晩年の如きは、天下の有象無象を相手に、あれ程の奮闘をしたのであるが、さればとて、その勞を慰めるといふやうな口實の下に、悪い遊びをする如き事は決して無かつた、外に出ると、宛も猛獸の荒れるが如き勢ひで敵陣を粉碎せずんば止まざるの概があつたけれども、家に歸れば和氣霽々、傍の見る目にも羨ましい程の、正しい温かい家庭であつた。

陸奥のお蔭で英國留學

星は大藏省から轉じて横濱税關の翻譯掛となり、間もなく税關長が空位になつたので、陸奥宗光と中島信行とが非常に盡力して、政府の内部を調べて、翻譯係の星をば、税關長に押し上げてしまつた、其頃は封建政治の夢がまだ全く覺めきつてゐない時分であつたから、門地門閥をひどく尊んだもので、左官屋の俸が、如何に技倆があればとて、税關長になるなどといふことは、普通では出來ない状態であつた、それを押し上げたのだから、陸奥と中島の骨折は想像に餘るものがあつたであらう、自負心の強い星も、自分が何うして斯ういふ地位になれたかといふことは、ちやんと頭に入れて、其推薦者の名を汚さないやうに心掛けると共に、斯る破格の登庸にあづかつた以上は、其推薦者たる陸奥の顔を立てる爲に、何か一仕事残して行きたいといふ考へが、始終念頭を去らなかつた。

そこで考へ附いたのが、長い間行はれてゐる脱税の問題である、せめては是れだけの事でも嚴重に取締つて、横濱の税關は脱税者を容赦しないといふことを、他の開港場にも知らせたそれが一般に行はれることになれば、國庫の收入も大に殖えるし、第一には條約上に於て得て居る權利を擁護するわけだが、さてその成功は却々容易でない、肝腎の外務省の腰が弱いのだ

から、一ツ天下の問題にしてしまつて、秘密に事を葬り得ないやうにしてやらうと、當時税關の翻譯係であつた神鞭知常と相談して、奇抜な方法を講じ、遂には英國公使パークスを殴りつけるやうな、思ひ切つた事をやつて、別に外交問題も惹き起さずに、星の勝利に歸したのであつた。

今一つは英吉利の領事と税關長との間に往復した文書の中に、クインといふ語に對し、女王の字を當てはめたところが、領事からは今日までは女皇若くは皇帝と譯してあるのだから書き改めて來いといふ、ところが星は承知しない、女王と書かうが、女皇と書かうが、女の天子といふことに變りはない、英吉利人が日本の文字を彼是れ差圖するのは其意を得んと、頑として書き改めない、遂に書類を受取らない、受取らなければ渡さないといふやうな縫れが生じて又復た外務省の問題となつた、重ねくの事に、外務省の役人も聊か激して、遂に外務省から役人が出張し、強制的に其文字を改めると同時に彼は罰金二圓の處分になつた、それが不平で斷然辭職をすと言つて騒ぐのを、陸奥が心配して、政府の内部を調べ、遂に英國へ留學させることになつた。

男爵 石本新六

記憶力に富んだ勉強家の石本、學校を出る毎に首席の優等生で押し通し、軍人となつて官位の昇進は、まながら旭日の天に昇るが如き勢ひ、其陸軍大臣となるに及んで、朝野ひとしく彼の將來に矚目してゐたのに、惜い哉其技術を現はすに至らずして死んだ、彼は軍人として戦功多く、軍事行政に於ける手腕と智識は、再度の洋行によつて大いに切磋琢磨せられ、大臣たるの器として申分なき人物であつた。

どの學校でも首席で卒業

石本は播州姫路藩の出身で、同藩の工學博士古市公威と共に、明治二年藩の貢進生として上京した、そして藩の中屋敷に往まつてゐたが、彼の父は江戸の大地震で惨死を遂げたので、その後は兄の勝左衛門が彼を監督して、毎日大學南校に通學させた、古市とは極めて親しい間柄であつたが、偶古市等が間違つたことを言へば、石本は靜にそれを聞いてゐて、「君達はさう言ふが、決してさうではなからう」といつた調子で、諄々として其説を辯駁し、亂暴なことを

言へば随分激しい議論もやつて、決して負けてはゐなかつた、といったやうな石本の性質であつた。

そのうちに陸軍幼年學校が出来たので、彼は大學南校を去つて此學校に入學し、將來軍人として身を立つるの第一歩を踏んだ、彼は頗る記憶力に富み、且つ勉強家であつたから、小學時代から何時も首席の占めどほし、幼年學校も矢張り一番の好成績を以て卒業し、直ぐ士官學校に入學した、是亦同校の創立された年で、彼は即ち第一期の卒業生であつた。

通譯の間違て川へザンブリ

彼が士官學校在學中は、何よりも佛蘭西語が最も得手で、記憶力の強い彼は、巧に佛語をあやつつて、教師そこ退けの有様であつた、當時士官學校の訓練は、全く佛國式に則つて日本古式のもの皆廢止され、従つて教師も佛人や英人の御雇教師、それを通譯官が直譯して教練をやつたものだ、ところが其直譯が能く間違ふので、その時には石本が「そりや違つてゐる、斯うだ」と突込み、たび／＼通譯官を赤面させたものである、ところが或日千葉縣下へ演習に行

つた、演習のことだから號令をかける教師は生徒と餘程離れてゐる、通譯官の誤譯も無論わからない、川の手前へ来た時、佛人の教官が「止めッ」と號令を掛けた、然るに通譯は間違つて「渡れ」と呶鳴つた、規律正しき軍隊の教練だ、仕方がないから先に立つた石本等二三の學生はザンブとばかり飛び込んだ、之を見た教官は急ぎ駈けつけて、其誤譯であることを告げた、通譯官は面目なげに詫び入つてゐる、餘りの無責任に石本等は立腹して、大議論をオツ始めたといふ話がある。

目ざましき其の躍進振り

士官學校を卒業したのは明治九年、折も折とて西南戦争、若き士官は其習得せる智識を應用するは此時だとばかり、戰場に臨んで献策勇奮、天晴な功名を現はして歸隊すると、忽ち中尉にと昇進した、後日大臣の位に上るほどの人物、その手腕は數多き軍人中で卓越したものがあるので、十二年には拔擢されて佛國に留學し、三年の期間を了へて歸朝すると、間もなく復たも伊太利に差遣された、其後は參謀本部御用掛から陸軍砲工學校長となり、法務局長に榮轉し

三十六年には陸軍次官となり、翌年日露戦役に出征して戦功著るしく、勳一等功二級に、男爵を授けられて華族に列せられた、それから四十四年八月、第二次西園寺内閣の成立に際し、陸軍大臣に任ぜられ、朝野共に彼の將來に矚目してゐたが、未だ十分に其技倆を現はすに至らずして、病の爲に他界したのは惜むべきである。

男爵 菊池大麓

年齒僅に十二にして英國に航し、中學校より進んで大學を卒業するに至るまで、常に優等の成績を得て教師を驚かし、東洋の奇男子と持てはやされた頭腦の秀でたる菊池は、我邦の學界にも多大の貢獻をなして、理科大學をして今日の旺盛を見るに至らしめ、數學者として其名を海内に馳せ、第一次桂内閣の文部大臣となつた、數學者と云へば唯學問一方にのみ偏して、餘り融通の利かぬものであるのに、彼の如き人物を見るのは實に珍しい。

幼時の教育は放任主義

菊池は東京の人で、安政二年正月江戸津山藩邸に生れた、父を箕作秋坪といひ、蘭學者として世に知られ、後又英佛の二學に通じた學者であつたが、秋坪は元菊池姓で津山の藩士であつた、さうして若い時分に東京に出て苦學して居た時、有名な儒者箕作阮甫に知られて養子に懇望せられ、箕作姓を冒すに至つたものである、然るに實家には惣領の相續人が死んで、跡継ぎのものがなかつたから、次男の大麓をして菊池家を繼がせた、箕作麟祥も、箕作佳吉、箕作元八も大麓の兄弟で、一家悉く學者揃ひの家だが、大麓獨り菊池姓であるのは上述のやうな譯である。

彼は七歳にして幕府の蕃書取調所に入學し、英語を修める傍父に漢學を教はつた、父の秋坪は寡言實行の人で、子供を教育するにも、一々彼是とやかましく言はず、大抵は子供の自由に任す所謂放任主義であつたが、唯、お前は學者の家に生れたのだから、普通の者と同じ學問のやり方では不可いよと、始終言ひ聞かせるのであつた。

劍橋大學に於ける最優等生

菊池は天才秀逸、至つて記憶力強く、慶應二年英國に行つて倫敦の中學校に入學した、さうして間もなく歸朝すると大學出仕に擧げられ、明治三年十一月再び官費で英國に留學し、三年間普通學を修めてから、ケンブリッジ大學に入り、五ヶ年で卒業、パチエラー・オブ・アーツの學位を受けて歸朝した。

ケンブリッジ大學に在學中は、學術の成績極めて優等で、試験の度に最高點を得、何時も其第一位を占めてゐた、そこで教師も大に望みをかけて特に誘導し、東洋の奇男子と稱せられた、而して卒業して同校を去つた後までも其名を謳はれ、明治十四年には同大學からマストル・オブ・アーツの學位を送り、後又大不列顛理學獎勵會通信員に選ばれ、尋で倫敦數學會員に擧げられたなど、菊池が同大學在學中の評判が如何に好かつたかを知るに足るであらう。

學界に盡した彼の功績

菊池が我邦の學界に於ける功績としては、明治十六年米國に於て開會した、地球上一定の子午線零點並に計時法設定公會に、本邦委員として臨席し、大に討議をやつて、遂に明治十九年

七月發布に係る、本初子午線及本邦標準時に關する勅令を見るに至つたのである、彼は又東京大學工藝部と工部大學校合併の事を圓滑に遂行せしめ、又理科大學に部長として諸種の規畫を施し、今日の如き理科大學の旺盛を見るに至らしめた。

彼は資性慎沈周密、考案的の腦力が至つて強く、ケンブリッジ大學では數理學が最も優等であつて、同輩に後れを取つたことは一度もなかつたといふ、彼は數學家として其名高く、著書も亦若干あつて多く世に讀まれてゐる、先に大學官制の大改革があつた時、理科大學長に擧げられ、理學博士となり、森文部大臣の變死後は、之に代つて學士會員に選ばれ、明治三十四年第一次桂内閣の成立に際し、文部大臣の椅子を占めた。

子爵 渡邊 國武

黨の人々に忌み嫌はれた程の腕白者が、一たび書を讀むに至つて發憤啓蒙し、勤王の精神を養ひ、洋學の習得に専念し、若年にして中央政府の人となるくらゐの素地を造り、剛毅の氣象は先輩の推賞を受けて、三十一歳にして縣令となり、能く難治の地方に良二千石の譽れを高くし、官位累進して第二次伊藤内閣の

下に大藏大臣の椅子を占めた、彼は兄の千秋を凌いで官海に馳驅し、大臣となつたエラ物である。

讀書に依つて發憤啓發す

渡邊は弘化三年三月を以て信州諏訪郡長地村に生れた、父は諏訪の藩士で渡邊政徳と呼ばれ渡邊千秋伯は其兄に當る人だ、然も彼は兄を凌駕して大臣とまで出世した技倆は天晴たと稱し得られる、彼の幼時は實に頑暴無頼で、人も無げなる其の舉動には郷黨の人を苦しめ呆れさせた、しかし夫れも頑暴無頼の時、後日大臣にまでなるくらゐの人物だから、何時までも馬鹿な真似をしてゐない、十五歳の頃から全く節を折つて讀書や手習に精を出すやうになり、傍劍術、槍術、砲術の三技を修めて、同輩中に嶄然頭角を現はしたのであつた。

一日彼は有名な會澤恒藏の書いた新論といふのを読んで、大に發憤啓發するところあり、乃ち尊王の志を懐いて、國家の爲に身を捧げようとの精神を惹起した、それから又安積良齋の著した洋外紀略を読んで、初めて宇内の大勢を看破し、洋學を修めるに至つたなど、彼は若年にして既に達見を備へてゐた。

藩兵を統卒して親衛に當る

慶應元年彼が二十歳の時に、兩親に乞うて仕籍となり、そして江戸常詰を命ぜられ、藩邸に勤務してゐた、其後松代藩士の村松英俊に就いて佛蘭西語を學び、更に壬生藩士友平榮に従つて西洋砲術を學んだ外に、密に諸藩の有志と往來して、大に爲すところあらんとする決心をした。

明治元年、伏見鳥羽の戦ひが濟むと、東征の師が上信二州の間に駐在したことがある、此時薩藩の士山下某が、幕府の軍情を探らうとして江戸へ來た、すると何處の家でも後難を恐れ、山下を宿泊してくれる者がなく、之を聞いた渡邊は、なアに心配することがあるものかと、自分の住ひに匿してやつて、彰義隊の實情を探つては之を官軍に報知させたものだ、彼は若年にして却々勇氣もあり膽力もあつた。

此年七月渡邊は藩士に従つて上洛したが、恰も朝廷では諸藩の兵を徵集して親衛に充てることとなつたので、彼は諏訪藩の兵を統率して軍務官に入り、官門に宿衛すること凡そ一年半餘

に及んだ、其中に奥羽が平定して解隊せられ、郷里信州に歸るに際して、朝廷では物を賜つて其勞を賞された。

大久保内務卿に拔擢せらる

其後渡邊は伊奈縣の役人となり、間もなく民部省に轉じて地租改正事務局六等出仕に補せられた、是れが彼の出世の緒であつた。

明治九年、四國の名東縣を廢して高知縣に合し、阿波土佐の兩國を管轄することとなつたが、當時土佐には立志社、阿波には自助社といふのがあつて、盛んに自由民權説を鼓吹し、非常な勢力があつたので、其地に縣令たるものは、餘程しつかりした人物でなければ治まらないといふ状態にあつた、ところで時の内務卿大久保利通は、渡邊が剛毅活潑で、能く天下の大事に善處する能力あるを見抜いて、彼を高知縣令に拔擢した、時に彼は三十一歳であつた、そこで世間では、あの若い國武を縣令にするのは險呑だと、取り取りの評判をしてゐたけれども、御本人は心竊に抱負經綸を懷いて、大に期するところあるものゝ如く、勇んで任地に赴く途

すがら、横濱から友人に寄せた詩に曰く、

濺血南海水

埋骨孤島山

亦尋常一様事

扁舟載日向日灣

渡邊は爾來累進して官界生活を續け、明治二十五年伊藤内閣の大藏大臣となつた。

侯爵 小村壽太郎

我が邦の國運を賭したる日露戦役が、日本をして世界列強に伍するの結果を招來し、世界の歴史に其光を投ずると共に時の外務大臣にして媾和使節たりし小村壽太郎は、永く史家の品隲する所となるであらう、彼は陸奥宗光に認められて外交官となり、精妙敏活なる心理的活動は遂に彼をして大政治家たらしむるに至つて、日英同盟、日露戦争、條約改正、日韓併合の大案件に善處し、伯爵となり侯爵に上り、日向の小藩士の伴に生れたる彼は、多くの美譚を貽して範を後世に垂れた。

天孫降下の地に生を享く

安政二年九月十六日、九州は日向國飢肥郡本町の茅屋に小村壽太郎は生れた、父の名は寛平

といひ、日向伊東藩士で、夙に財政家を以て許され、藩の植林や製材を奨励して、これが實施を監督した。さうして廢藩の後は、藩士の公債で低肥商社といふのを經營し、自ら其社長となつて采配を振ふなど、一種の經綸的才幹に富んだ人であつた、然るに後に至つて事業に蹉跌を來し、同社は破産の悲運に會して、彼は多額の負債を背負ひ、また起つ能ざるの境遇に陥つた。伊東藩は其領地は狭く、且つ九州の僻隅に介在して、古來幾度か島津勢に撃破せられ、日向を捨て、他國に走りたることもあつたが、豊臣秀吉の時に功を立て、舊地を回復し、それ以來やつと其封土を維持するを得た、伊東家の祖先は頼朝に追はれて鎌倉を落延びた名家である。天孫降下の地として知らるゝ高千穂の峰を有し、時勢の落伍者に依つて作られたる深山幽谷の彼方に追ひ縮められ、多くの物語と秘密とを包める此里に、世界的外交家として其名を馳するに至つた小村を産んだのは、抑も偶然か、將た奇瑞か、否、否、彼の堅忍と沈勇と、さうして負けじ魂の反撥心とは、此自然が與へた大なる感化であつた。

弱い身體に優れた頭腦

小村は生れてから極めて羸弱な病兒で、發育は十分ならず、醫者も殆ど匙を投げて生長の見込なしと語り、家人も亦到底回復の望みなしと諦めてゐたが、其名の壽太郎なるに幸ひせられたか、三歳の頃からやつと室内を這ふやうになつた、こんなに體質が弱かつた割合に、知識は早く其芽を吹いて、幼い時から却々伶俐な性質を現はした。彼には壽平と呼ぶ兄があつた、これは又壽太郎とは反對に、體格の健かな子供で、よく悪戯もしたが、兩親は兄の方に多くの望みをかけてゐた、或時壽平は父の珍重せる鉢植の梅の枝を無心に折り取つた、フト氣がつくと同時に、若し此れが父に知れたなら、どんなに叱られるかも知れないと、何食はぬ顔をしてゐたが、父親は之を見つけると烈火の如くに憤り、傍に掛けてあつた弓をとつて、壽平の頭を打たうとした、母親は頭是なき子供の爲に、百方あやまつたけれども父は却々承知しない。其時母親の側にゐた壽太郎は、此有様を見ると父の足もとに寄り添うて、僅か五歳の身を以て靜に兩手をつき「梅の木は他所の家にもありますが、兄さんは何所にもないんでせう」と云つた、無邪氣な幼兒の此一言に、怒れる父も感激して、俄に手にせる弓を捨て、壽太郎の頭を

撫でつゝ「お父さんが悪かつた」と、涙を流して感じ入つたといふ。

學問修業に長崎へ赴く

性來惻愾な壽太郎は、依然として體質虚弱、常に藥餌に親しんでゐるといふ有様、兩親は愛兒の行末を案じて、安穩な生活を送らしめんとし、六歳の時に附近のお寺へ彼をあづけた、彼は物靜かな座敷で、溫和なる老僧から手習や讀書を教はり、二年の後には寺院生活の効驗が現はれて、餘程健康状態の子供となつた。

そこで八歳の時は再び父母の膝下に呼び戻され、四書五經の素讀や、千字文などを習つたそして追々と生長したけれども、他の少年にくらべると非常に虚弱で、外へ出て遊ぶ度に屹度泣かされて歸つて來る、だから自然と家に引込み勝で、減多に外出しないといふ可哀相な有様であつた。

十三歳の頃から藩の學校に入つた、されど彼は一向少年の友達を作らうとせず、獨り學業にのみ耽つて、最優等で卒業したので、藩の人々は始めて此少年に對し、其將來に矚目するに

至つた、明治二年彼が十五歳の時、父は「長崎の外國人に就いて器械を學んで來い」と云つて學問修業に出した、これより先、父親は長崎へ行つて、外人のこしらへた器械の精巧なるを見て驚いたからである、即ち飢肥唯一の産物たる木材を材料として、郷土の富を豊かにせんと欲し、父は其子を之に利用せんとしたのであらう。

貢進生として大學に入る

小村は藩の先輩小倉處平に伴はれて長崎に向つた、小倉といふ人は維新當時飢肥藩から出た第一の先覺者で、少にして京都に遊學し、次で江戸に入り安井息軒の門弟となり、傍天下の志士と交りを結んで、切りに時勢革新の急務を唱へた、抑も飢肥藩は前述の如く九州の一小地域に過ぎなかつたけれども、幕末當時には藩主に李門公あり、其下に安井滄洲及び其子息軒の一時教鞭を揮つたこともあり、又史學に精しい平部喬南などもあつて、文明の空氣は此處にも吹いてゐた、而して其空氣のうちに哺育された主なる人物は小倉處平であつた、彼は人材養生の必要を藩主に説き、秀才數名を率ゐて長崎に出た、其秀才の中に最年少者の小村壽太郎が加

はつてゐたのである。

此時小倉は二十三歳の青年であつた、間もなく彼は最年少の小村を伴れて、長崎から更に東京に上つた、明治四年小倉は英國へ留學し、小村は飢肥藩の貢進生として大學南校に入つた。(小倉は英佛二國で政治經濟學を修め、歸朝後熱心に自由主義を唱へ、國へ歸つて藩校に西洋の新智識を鼓吹誘導したが、十年の戦役に際し、西郷の軍に投じて戦死した)

開成學校時代に於ける逸話

當時の所謂貢進生は、全國各藩より一名乃至三名の秀才を選拔せしめたもので、其總數は約五百人に上つたが、大學南校の改革後、政府は其五百名中より更に前途有望なる學生五十名を精選し、官費を以て開成學校に學ばしめた、小村は無論其中に拔擢せられた一人である、幼時虚弱であつた彼は、泰平の世に長じて幸ひに其學識を以て儕輩を凌ぐに至つたのである。

小村の名は鳩山和夫、菊池武夫、齋藤修一郎等と共に、頗る同僚の愛好と推重とを受けた、當時の學生は何れも貧窮を意とせず、燒芋を嚙つて天下の大勢を論じ、氣焔虹の如きものがあ

つた、其中でも小村は第一の貧書生であつたけれども、彼は平然として之を苦まず、同僚の振舞酒を飲み、同僚の煙草を吸ひ、極めて無遠慮な横着者であつた、しかし友人等は如何なる場合にも小村を圍んで談論し、少しも彼を疎外するが如きことはなかつた。

一日彼等學生は大福餅を買つて来て、之を火に温めつゝ貪り食つた、數十の大福も残り少くなつて、温め役の小村と中山寛六郎の兩人はまだ一つも食ふ暇がなかつた、もう三つしか無いので周囲の餓鬼連も、流石に兩人を憚つて手を出さなかつた、すると小村は指頭に唾をつけて三つの大福に塗り「オイ中山、君は僕の唾を喰ふ勇氣があるかい」と、小村は残れる三個を獨占せんとした、ところが中山は大福を掴んで、中の餡を舐め盡し「小村、貴様の唾をつけた部分は返してやる」と、あはれ、剛情な小村は、大福の皮のみを残された、往時の無邪氣なる學生氣質には笑はせられる。

二十歳にして米國へ留學

小村は既に其頃から大膽莊重な政治家であつた、彼は儕輩の紛々たる議論を聞きつゝ、容易に

言を發しない、然も一たび論議を開けば、趣旨整然、觀察精透、如何にも自信あるもの如く論決した、彼は窃に一代の大政治家を以て任じ、當時廟堂に在つて名聲噴々たりし大隈参議を模し、自分の室には大隈の寫眞を掲げてゐた、其寫眞には「呈小村君、大隈重信」と書いてあつた、これは小村が自分で書いたものだ、それ以來友人は彼を呼ぶに「参議小村」の綽名を以てした、誰か知らん「参議小村」は後年に至つて帝國を代表する大外交家となり、生前侯爵の榮位に上つて、優に大隈重信を凌駕せんとは。

明治八年七月、開成學校は其第一回の留學生を米國に送ることとなり、小村は選ばれて其一行に加はつた、こは彼等が時の文部卿田中不二麿や九鬼隆一、濱尾新等に運動した結果で、就中鳩山、小村、齋藤、古市公威、安東清人の五名が率先して、所謂五人組を作り當路に要請したものだ、さうして彼は法學部より選ばれ、同行十一名と共に渡米した。

粹に碎けた常識的の裁判

米國に學ぶこと五年、西南戰爭を外に過して明治十三年の秋歸朝し、其翌年九月花の如き十

七歳の嫁御寮を迎へた、これ侯爵夫人として一世の美望を受くべき筈の婦人であるが、苛烈なる運命の手は小村家を攪き亂して悲惨なる物語を遺した、花嫁は容貌頗る美しい少女で、洋行歸りの花婿は之を二なきものと愛した、されど數年ならずして、小村家は陰鬱限りなき愁雲に閉され、遂に往年の花嫁は其身侯爵夫人でありながら、夫君の死水をも取らなかつたやうな有様であつた。

米國より歸朝後、上等裁判所の判事に任ぜられた、其時こんな事件が起つた、或男が或茶亭の女と好い仲になつて、情交が日に密なるを嫉んだ他の男が、其女の偽筆を情夫に送り、男を民にかけて家宅侵入罪に訴へたといふのだ、偽筆の手紙には、忍ぶ戀路の遺筋を記し、夜半何時某所の潜戸から忍び來れとのが書いてあつた、掛りの小村判事は、偽造の手紙を以て男をおびき寄せたるものなるを楯として其男の無罪を主張し、他の判事は其原因動機の如何を問はず、夜中窃に他人の家に入りしは家宅侵入罪を構成するものと反對した、而して種々詮議の結果、小村判事は斷然無罪の判決を下して、粹に碎けた常識的裁判かなと、傍聽人を喜ばして好評を受けたといふ。

それから大阪に轉任したが、法律家としての彼は、何等の逸話も功績もなかつた、彼は法律の條文を辿り、市井の出來事に頭を悩すには餘りに不向であつた、彼は大阪を去つて東京に歸り、二年間大審院判事の職を執つた。

大悟一番不遇の地位を忍ぶ

しかし此處でも小村判事の技能は毫も認められなかつた、辛抱強き彼も、二六時中法文の拘束に疲れて、うき身を棄つてゐることは終に堪へられなくなつて、明治十七年六月、大審院を罷めて外務省轉任を願ひ、外務省少書記官、公信(翻譯)局勤務、年俸千二百圓といふ辭令を受けた、時に年三十歳、然るに外務省では同窓の齋藤修一郎が公信局長となり、鳩山も同省にあつて相當に巾を利かしてゐた、小村は早川鐵冶等と机を並べて、同學の僚友中最も低い地位に就かざるを得なかつた。

十五歳にして大學南校に入り、二十歳にして米國に留學し、年少既に頭角を抜んでたる秀才も、今は不遇の地位を忍ばねばならぬこととなつた、これは其年齢の餘りに若かつたにも由る

であらうし、又彼の性格が、先輩に頼つたり權門に諛つたりするのを好まなかつたのにも由るであらうし、今一つは其出身地が既肥の小藩であつたことも、不幸の一つであつたに違ひない、「人間は或時期までは他人の股を潜らねばならぬ」といふ言葉が、屢「參議小村」の口から出るやうになつた、彼は「大悟一番、急げば廻れ主義を奉じて、ゆるくと長き人生を歩むべく覺悟を極めた。

氣の毒千萬な彼の窮境

同學の友人は局長となり、公使となり、次官となり、ドン／＼彼を追ひ越した、されど彼は翻譯局より一步も外に踏み出さなかつた、英文の翻譯にかけては前後幾十人の同役中、一人として彼に及ぶものはなく、彼はやがて局長に陞進はしたけれども、引續き二十六年の十月に至るまで、實に十年の長い月日を翻譯局に過したのであつた。

此時代の小村は實に視る目も痛ましい状態であつた、年俸千二百圓といへば、物價の低廉な其頃の收入として決して尠い方ではないが、米國の豪奢なる生活を見、加ふるに金錢に無頓着

な彼は、恬淡を通り越して寧ろ亂暴に近かつた、彼は女色を漁らないが有名な酒豪で、一ヶ月百圓づつの収入では生活費の何分の一にしか當らぬ、おまけに父の失敗から生じた負債の辨償もあり、彼の収入は年と共に増加しても、支出はヨリ以上に膨脹して、彼の囊底は常に空しく月末になつても其妻に渡すべき何物をも齎し得なかつた、唯殖えるものは借金ばかり、訪づるものは債鬼である、彼は華奢を衒ふを能事とする外務畑に居りながら、毎年々々一枚しかない古外套の襟を取換へ、地色の判らぬやうになつたものを繕うてゐた、彼が家に居る書生は、日債鬼を追つ拂ふに多忙を極め、終には給料の全部を債鬼の前に投げ出して、多くの債鬼をして任意の處置を講ぜしむるに至つた。

貧に處する麗はしき舉措

斯の如く、小村翻譯局長の貧乏と云へば世に知られたものであつたが、然し流石は一代の傑物である、彼は平然として毫も之れが爲に操守を破らず、其思想の高潔にして、其の性情の純美なる、貧困に處して益々其人格の光を添へた、彼は如何に苦しく、如何に困難するとも、

凜乎たる氣節と、精緻なる研究と、警拔なる識見とを砥礪するを怠らなかつた、彼の同僚及び部下は勿論、門衛も、給仕も、辨當屋も、さては苛酷なる債鬼までが、彼の麗はしい人格の光に打たれざるを得なかつた、唯彼の眞價を認めざるものがあつたとすれば、それは彼の先輩とさうして彼の細君であつたかも知れない。

先輩の人々は彼の鬼才たるを知りつゝも、彼を用ひて其手腕を發揮せしむるだけの勇斷がなかつた、それは少くとも彼の貧乏と豪酒とを氣に病んだ、彼の細君は外交官の令夫人として將た家庭の女王として、其身を誇り其心を安んずるには、彼女の郎君は甚だしく無頓着であり過ぎた、少時より演劇を唯一の娯樂とし慰安とせる細君は、極貧に處して其操守氣節を變ぜざる郎君に仕ふべく、餘りに辛酸を嘗め過ぎた、斯くて小村の家庭は陰鬱なる雲霧に鎖されるに至つた、蓋し其責任は誰にあるのであらうか。

伯樂あつて千里の馬あり

さもあらばあれ、斯の如き艱難と戦ひつゝ、富貴を羨まず、權勢に阿附せず、獨自の理想と

抱負とを懐いて、孜孜として職務に勉勵し、文字通り十年一日の如く翻譯局に其人格を鍛へる。小村は眞に偉い、千里の馬は何れの時か伯樂に認めらるべき時機がある、駄馬に伍してゐても其嘶く聲はおのづから他と異るところあるは言を俟たぬ、果せるかな、當時の外務大臣陸奥宗光は、彼の驥足を伸すべく、明治二十六年十月、支那駐劄公使館参事官として小村を北京に赴任せしめた。

十年晝ばす鳴かず、翻譯局の隅に燻ほりつゝあつた小村は、陸奥外相より贈られた金時計を胸にかけ、仕立おろしの新調服を着けて、意氣揚々として新橋を發した、當時の支那駐劄公使は大鳥圭介であつたが、而も公使は清韓兩國を兼攝して京城に居つたから、事實上北京の日本公使館には首脳部が缺けて居た、小村は北京着任後一等書記官に任じ、代理公使の職務を行つた、時正に日清間の關係急迫を告げつゝあつて、小村代理公使の辣腕は遺憾なく發揮せられ、彼が大政治家たるに至れる初舞臺は茲に展開されたのであつた。

伯爵内田康哉

醫者の伴に生れ、幼よりナポレオンの傳記を耽讀して、之に私淑したる内田は、遂に其志を達するを得た、彼は幾何學に對する優秀な智識を持つだけ其れだけ、頭の働きも緻密であり、ゴム人形と呼ばれる程の愛嬌があつて、外交官として適任の資格を備へ、小村壽太郎に知られて思ふ存分其腕を揮ふことが出来、而して能く大臣の地位を占むるを得て、外務大臣となること四たび、功を積んで子爵より伯爵に陞進した。

幾何學は級中第一の成績

内田は熊本縣八代に生れ、家は代々醫を業としてゐた、幼くして笈を負ひ京都に上ると、同志社に入つて新島襄の薰陶を受けた、ところが申すまでもなく同志社は基督教主義の學校であつて、而も當時耶蘇教は禁ぜられてゐたので、同志社に入つたと聞いた内田の父は、忤が耶蘇教信者になるのではあるまいか、若し然うだとすれば其れこそ大變だと、早速彼を呼戻して、銀杏城下の喜悅塾へ入塾させることゝなつた。

塾長の喜悅氏政といふ人は、横井小楠門下の逸足で、該地方には非常な名望があつた、それで其塾に入る者も決して凡庸の輩ではなく、何れも一廉の俊才と目される人々ばかり、彼は塾の某助教と共に狭苦しい物置の二階に住つて、一生懸命に勉強を續けた、當時同級には衆議院書記官長をした林田龜太郎や、龜井英三郎や、横濱生絲検査所の紫藤章などの面々、何れも負けず劣らず勉強して其才學を競うてゐた、さうして林田は何時にも首席、内田はそれに次ぐエラ物であつて、然も幾何學に至つては、誰も彼にかなふものはなく、教師も之れには感服したさうだ。

文武兩道を心得たゴム人形

當時彼の愛讀書はナポレオンの傳記であつて、それをば熟讀玩味して飽くところを知らなといふ風、この塾に居ること二年、相當の素養が出来たから、奮發一番東京に上つて、最高の學府に學ばねばならぬと決心し、十七歳の時大學豫備門に入つた。

郷里に居た塾生時代の内田は、温厚勤勉の男であつたが、豫備門から大學に入る頃は、都の

風は青春の心を吹き荒らして、大した放蕩家になつたといふ譯でもないが、學生に能くある酒池肉林の振舞、野田忠治、中木常治なんかの豪傑連と、折花攀柳に憂身を糞したこともある、彼はゴム人形と綽名されるくらの、一種言ふに言はれぬ愛嬌の持主で、到る所でチャホヤされて大に持てた、然も尋常一様の輕薄才子とは其撰を異にし、圓轉滑脱の才ある一方、武道少心得もあつて柔道は初段、劍道も相當やれる腕前だ、然し之れあるが爲に、時々酔つては友人に喧嘩を吹き掛け、度々失敗を繰返したこともあつたとか。

小村に認められた彼の手腕

明治二十年法科大学を卒業すると、直に外交官試験補を拜命して、華盛頓に勤務することゝなつた、是れ彼が外交官として大臣の椅子を占むるに至つた端緒である、米國に在ること三年、明治二十三年には農商務大臣の秘書となり、二十五年には外務書記官に轉任した、こゝで小村壽太郎の其手腕の凡ならざるを認められ、深く其信任を得て、辨理公使となり、再び本省に入つて通商局長、商務局長に歴任し、三十二年には特命全權公使となり、翌年は外務省